

平成 17・18 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）研究成果報告書

国際バカロレア・プログラムにおける教科外活動の
位置づけと評価方法に関する研究

（課題番号 17530601）

平成 19 年 3 月

研究代表者 河合 久

（国立教育政策研究所 教育課程研究センター基礎研究部 総括研究官）

はしがき

国際バカロレア機構では、従来から IB 教科についてのガイドブックや過去テスト問題や解説等の図書を発行しているが、これらの図書は IB 校関係者向けのものであって、国際バカロレアのプログラムに関心のある一般の人たちや教育者向けのものではない。私が最初に国際バカロレア機構以外の出版社から発行された、より広い読者を対象とした IB プログラムに関する図書を入手したのは、Learning and Understanding: Improving Advanced Study of Mathematics and Science in U.S. High Schools (2002 年、National Research Council) であった。この図書は、高度な教科内容と大学入学に大きな影響力を持つアドバンスト・プレースメント (AP) のプログラムと IB のプログラムについて、限られた教科であるが両者の比較検討を行ったものである。これにより両プログラムの違いや教師研修の違いなどの一端を知ることができた。

その後、国際バカロレア機構のホームページや世界の IB 校からのインターネットによる情報発信により、以前とは比較にならないくらい国際バカロレアのプログラムに関する情報が入手できるようになった。なかでも、2005 年から 2006 年にかけて IB プログラムに関する一般図書が次々に発行され、より詳しい内容を知ることができるようになったことは研究者として嬉しいことである。この報告書を作成するにあたっては次の図書から多くを学ぶことができた。

**Supertest: How the International Baccalaureate Can Strengthen Our Schools ,
Jay Mathews, Ian Hill, Open Court, 2005**

**International Baccalaureate Diploma Programme: An Introduction For Teachers And
Managers, Tim Pound, Routledge, 2006**

Study Skills for the International Baccalaureate, John L. Tomkinson, Anagnosis, 2006

**Theory of Knowledge for the IB Diploma, Richard van de Lagemaat, Cambridge
University Press, 2006**

これらの図書は非常に有用ではあるが、国際バカロレアのプログラムの実践者から直接疑問に感じていることや不明なことを訊くことが実態把握には欠かせない。国内外のいくつかの IB 校や国際バカロレア地域事務所を訪問し、IB コーディネーター、教師、研究者などから貴重な情報を得ることができた。本研究のための調査訪問で特別にお世話になった二人の名をここに記して感謝申し上げる。

一人は、国際バカロレア機構アジア太平洋地域局長の Judith Guy 氏である。同氏には、これまで日本で 2 回、シンガポールで 2 回お会いしたが、毎回の多くの質問に丁寧にご回答いただいた。また、IB の評価に関する論文 (Diploma Programme assessment Principles and practice) や IB コーディネーター必携の Vade Mecum の紹介、提供をいただいたことで、IB の評価についての考え方や評価方法の手順等の全貌の理解に大

いに役立った。

もう一人は、国際バカロレア機構アジア太平洋地域日本・韓国代表のバーナード恭子氏である。同氏は現在、玉川大学学術研究所に所属されているが、平成11年(1999年)、同氏が横浜インターナショナルスクールに勤務されていたときからの知り合いである。同氏の長年にわたる国際バカロレアの日本語教師としての経験と国際バカロレア機構日本代表としての経験は貴重で、国内外の国際バカロレアに関する確かな最新の情報の提供いただいた。

IBプログラムの調査でこれまでいくつかの学校を訪問して、学校長やIBコーディネーターに生徒の実態や進路動向、学校の経営、教師の研修、CAS活動の内容などについて質問をしたが、どの学校からも丁寧な説明をいただいた。また、授業も見せて頂くことも多かった。IB校は非常にオープンであるという印象をいただいている。IBプログラムの内容については、IBプログラムを学ぶ生徒の人物像にもあるが、「探求する人」や「考える人」を育てる内容になっていると実感している。本研究では、教科外の「課題論文」、「知識の理論」、「CAS」について主に扱ったが、これらの要件についても当てはまる。「課題論文」では約4000語、「知識の理論」では約1600語の論文を書くことで生徒は知的に相当鍛えられるであろう。もう一つ、IBプログラムの特徴であると思っていることをここに記すならば、評価基準とその活用方法である。IBの評価基準はすべて公表されていて、教師と生徒が共有している。学習は常に評価基準を念頭において進められる。評価基準の詳細については、それぞれの要件に関するガイドブックから該当部分を翻訳し紹介した。参考になれば幸いである。

平成19年3月

研究代表者 河合 久

研究組織

研究代表者 河合 久 (国立教育政策研究所 教育課程研究センター基礎研究部)

科学研究費補助金額

平成17年度 1,600千円

平成18年度 1,600千円

目 次

はしがき	
目 次	
研究成果の概要	v
第 1 章 国際バカロレア・プログラムの概要	1
1 IBO の 3 つのプログラムと認定校	
2 日本における IB プログラム導入校	
3 DP のカリキュラム構成	
4 DP の試験の評価と DP 授与	
5 DP 資格試験受験者と DP 資格授与率	
6 IB 学習者の人物像	
第 2 章 課題論文 (Extended Essay)	11
1 課題論文のテーマと評価基準	
2 課題論文の詳細	
第 3 章 知識の理論 (TOK)	26
1 外部評価と内部評価	
2 TOK の得点 (ポイント) とクラス	
3 評価の詳細と評価基準	
第 4 章 創造性、活動、奉仕 (CAS)	41
1 CAS の 3 つの要素と活動例	
2 CAS の評価	
3 CAS の詳細	
第 5 章 高大接続プログラムとしての IB プログラム	53
1 AP プログラムと IB プログラムの類似点と違いについて	
2 IB プログラムの大学での評価	
3 今後の動向と課題	
参考文献	57
資料	
資料 1. ディプロマ・プログラムのガイド	61
資料 2. AP & IB	85
資料 3. 戦略計画	91
資料 4. 国際バカロレア北米戦略計画	107
資料 5. ディプロマ・プログラムの評価プロセス	118

研究成果の概要

本報告書は平成 17～18 年度の文部科学省研究補助金による「国際バカロレア・プログラムにおける教科外活動の位置づけと評価方法に関する研究」の研究成果をまとめたものである。研究目的、研究活動の概要、および研究成果の概要は、以下のとおりである。

1. 研究目的

国際バカロレア (IB) のプログラムについては、日本ではインターナショナルスクールのいくつかの学校で実施されているが、どのような内容でどのように実施されているか注目されることはこれまでほとんどなかった。しかし、近年、IB プログラムは世界で注目され、IB プログラムを導入する国や学校は急増している。

IB プログラムの DP が高度な教科内容からなることは、米国などの多くの大学で、大学の単位として認められていることからわかる。しかし、教科のレベルが高いというだけでなく、IB プログラムには教科外の活動である「知識の理論 (Theory of Knowledge)」や「創造性・活動・奉仕 (Creativity, Action, Service)」や「課題論文 (Extended Essay)」といった内容が含まれていて、DP 資格取得の要件にしていることが IB プログラムの評価を高めていることに注目したい。これらの要件には、「自ら課題を見つけ解決する力」や「コミュニケーション能力」の育成といったこれからの日本の教育に求められているものが含まれているし、これらの要件の評価方法にはそれぞれ特色があり、学ぶべき点が多いと思われる。

IB プログラムの教科の研究についてはこれまでにいくつかの報告書が出ているが、教科外の 3 つの要件についての研究、特に、これらの要件がどのように評価されるかについての本格的な研究はない。IB の DP 資格取得者は日本においては大学入学資格者として昭和 54 年から認められている。近年の教育の規制緩和により、日本にあるいくつかの外国人学校への受験資格の付与とともに、IB プログラムは大学関係者などには徐々に知られるようになり身近なものになってきた。しかし、IB プログラムを、より深く、より正當に評価するためにも、IB プログラムにおける教科外の要件についての詳しい研究の必要性がある。

そこで、本報告書では、国際バカロレア・プログラムの DP の教科外活動である 3 つの要件（「知識の理論」、「創造性・活動・奉仕」、「課題論文」）の内容と評価方法の詳細について明らかにする。さらに、近年、IB プログラムを導入する国や学校が急増していることから、国際バカロレア機構 (IBO) では現状と課題についてどのように認識し、今後の政策を考えているかを、資料等により明らかにする。

2. 研究活動の概要

1 年目の研究活動では、国内外の IB 校等の訪問調査を行った。国内の IB 校では、加藤学園暁秀中・高等学校、カナディアンアカデミー、広島インターナショナルスクール等を訪問した。海外では、ロサンゼルス市の CRESST とロサンゼルス統一学区、サクラメントのカリフォルニア教育省と Mira Loma 高校、シンガポールの IBAP (太平洋地域事務所) と United World College of South East Asia 等を訪問した。どの訪問からも有益な情報が得られたが、IBAP の Judith Guy 所長とのインタビューが特に有益であった。同氏からは IBAP の主

な仕事の内容（①ワークショップの開催、②学校認定のための指導及び訪問調査、③大学や各国の政府の動向把握・連絡調整、④被災国等の支援のための資金獲得協力活動）の説明を受け、本調査に必要な IBO 刊行の重要な図書と資料の提供をいただいた。

この他に、IBO の公式ホームページや IB 北米地域事務所のホームページなどから IB 校の動向、将来の IB の戦略計画などの情報を収集した。また、IBO から刊行されている 3 つのプログラム（PYP、MYP、DP）に関するガイドブック、教科に関するガイドブック、CAS、TOK などの要件に関するガイドブック等の収集、翻訳、分析を行った。

2 年目は、シンガポールの IBAP、サクラメントのカリフォルニア教育省、ロサンゼルス の統一学区の再度の訪問の他に、ニューヨークの IBNA（IB 北米地域事務所）を訪問した。IBNA では、米国での IB 校の動向や IBNA の活動について専門官から説明を受けた。大学入学に際しての IB 教科の大学での扱い、つまり、大学の単位としての認定状況、及び各州における IB プログラムに対する扱いについての概要を知ることができた。

この他には、玉川学園での IB シンポジウムへの参加。小樽市と福山市で開催された研究会の講師として、IB プログラムの評価方法についての研究成果の一端を紹介したことが主な活動である。2 年目の後半は、AP プログラムと IB プログラムの比較研究、及び二重単位（Dual Credit）取得という観点からの IB プログラムの研究に関心が生じ、その関連の資料の収集と分析を行った。

3. 研究成果の概要

ここ数年で、IBO からのインターネットによる情報発信が充実してきた。また、世界中の IB 校からの情報提供もインターネットにより利用できるようになったことで、IB プログラムに関心をもつ者にとっては良い環境になってきた。

IB プログラムの内容については、IBO から刊行されている各教科等のガイドブックとコーディネーター用の便覧に評価基準、評価方法、事務手続き等の情報が詳しく掲載されている。本報告書もこれらを手がかりとしてまとめた。

IBO から刊行されている図書、資料以外では、次の 3 冊が参考になった。すべて 2006 年に一般図書として出版されたものである。数年前には IB に関する一般の図書はほとんど存在していなかったもので、最近の IB への関心の高まりがここに見ることができる。

- International Baccalaureate Diplonm Programme: An Introduction For Teachers And Managers, Tim Pound, Routledge, 2006
- Study Skills for the International Baccalaureate, John L. Tomkinson, Anagnosis, 2006
- Theory of Knowledge for the IB Diploma, Richard van de Lagemaat, Cambridge University Press, 2006

この他に、2005 年に刊行された次の図書は IB プログラムの成長の歴史を知る上では大いに参考になった。

- Supertest: How the International Baccalaureate Can Strengthen Our Schools, Jay Mathews, Ian Hill, Open Court, 2005

本報告書は第 1 章～第 5 章と参考文献、資料からなる。以下、研究成果の概要である。

第1章は、国際バカロレア・プログラムの概要である。教科外活動の位置づけと評価方法に入る前に、国際バカロレア・プログラムとはどのようなもので、どのように受け入れられているかについて最新の情報に基づき要点をまとめた。IB校の国内外の動向、DPのカリキュラム構成と試験の評価、IB学習者の人物像などである。

- ・IBOではPYP, MYP, DPの3つのプログラムを提供していて、2006年11月現在、124ヶ国の1,895校がIB認定校となっている。日本では12校がIB認定校である。
- ・DPは六角形で表され、課題論文(Extended Essay)、知識の理論(Theory of Knowledge)、創造性・活動・奉仕(Creativity, Action, Service)は3つの要件で六角形のコア(核)に配置されている。
- ・IBOではIBプログラムを通じて学習者に以下のような人物に育ってほしいと考えている：探求する人(Inquirers)、博識な人(Knowledgeable)、考える人(Thinkers)、意思が伝えられる人(Communicators)、節操がある人(Principled)、心が広い人(Open-minded)、思いやりがある人(Caring)、リスクを恐れない人(Risk-takers)、バランスのとれた人(Balanced)、自己を見つめる人(Reflective)

第2章は、課題論文(Extended Essay)のテーマと評価基準について扱った。

課題論文は教科での学びと関連したことをテーマにして4,000語以内(日本語の場合は8,000字以内)で書く必要がある。グループ3(個人と社会)に関する教科との関連をテーマにする生徒が最も多い。

課題論文は一般評価基準(General Assessment Criteria)と教科評価基準(Subject Assessment Criteria)に基づいて評価される。これらの基準は生徒にも公開されていて、課題論文の監督者(スーパーバイザー)は生徒にこれらを念頭に置き、積極的に活用するように指導している。

最終的に仕上げた生徒の課題論文については、内部評価と外部評価がある。学校のコーディネーターを通じて、監督者がつけた課題論文の予想評点(内部評価)は、IBOが指定する期日までに英国のカーディフにあるIBCA(IBカリキュラム評価・学術部門)に届けられる。また、課題論文については、IBOが指定した外部の試験委員(Examiner)に指定の期日までに提出し、評価を受ける(外部評価)。

第3章は、知識の理論(Theory of Knowledge)の評価方法を明らかにした。

知識の理論(TOK)は、指定された10の課題(テーマ)の中から一つを選び、1200語から1600語で書き上げる。評価は、内部評価と外部評価からなる。学校での内部評価では、生徒は学習内容のプレゼンテーションを行い教師が評価する。そのときのプレゼンテーションをビデオに撮り、外部の審査者(examiner)に送付して評価を受ける。評価結果は最終的には、カーディフにあるIBOの研究部門に送付される。

課題論文と知識の理論の評価は、それぞれA～Eで評価される。ともにAの評価を受けた場合、3点のポイントが生徒に与えられる。マトリックスが用意されていて、それぞれの評価の組み合わせに応じたポイントが決められている。

ディプロマの評定は、科目による評定(6科目あり、それぞれ7段階からなる)と課題論文と知識の理論の組み合わせによる評定(最大で3ポイント)からなる。最高点は45

ポイントである。

第4章は、創造性、活動、奉仕（CAS）の活動例と評価方法についてまとめた。

生徒は、2年間にわたり、創造性、活動、奉仕のそれぞれについて50時間ずつ（合計150時間）実施する。CASガイドブックにいくつかの活動例が示されているが、教師研修会やIB Worldなどの雑誌を通じても成功事例の情報交換がなされている。CASの評価は学校が認める監督者（スーパーバイザー）と呼ばれる人によって評価される。監督者は必ずしも高校の教師ではない。パスしたかそれともパスしなかったかという評価方法で、各学校は生徒の成績を地域事務所（日本のIB校はシンガポールにあるIBAP）に送付する。

CASの活動と評価については、地域事務所が主な監督責任を果たしている。地域事務所ではランダム・サンプリングで生徒の成果（ポートフォリオ）をチェックして、質の管理をしている。チェックにより、成果が達成されていないと判定すると、その生徒の学校のCASのプログラムの見直しを要求する。

CASには課題論文や知識の理論と違い、外部評価はない。また、ディプロマの評定のポイントも与えられない。しかし、CASの活動がなかったり、不十分な場合には生徒はDP資格を得ることはできない。

第5章は、大学との接続について考察した。

IBプログラムは高校のプログラムでありながら大学においてはIBの教科を大学の単位として認めているところが多い。二重単位（Dual credit）としての扱いである。APの教科もDual creditにすることができるが、APとIBではどのような違いがあるか明らかにした。研修の義務、テスト受験の資格等の両プログラムの比較を行った。

生徒は誰でもAPの試験を受けることができる。特定のAPの教科の授業を行っている高校は多いが、APを提供しているカレッジボードではAPの試験を受けるためにはAPの教科の授業を受けることを義務づけてはいない。したがって、APの教科の授業を受けていないIBの生徒でもAPの試験を受けることができる。それに対してIBは、IBディプロマ・プログラムを受けている生徒だけがIBの試験を受けることができる。

米国においてはAPもIBも急成長を遂げている。高度な内容に挑戦する生徒の意欲、努力が評価され、連邦政府や州政府の財政面での支援が増えていることが一つの大きな要因である。急成長の中、継続して質の高い教師をいかに確保するかといった課題もある。

資料編は、国際バカロレアのプログラムに関する多くの資料のなかから重要なものを取り上げ翻訳したものからなる。ディプロマ・プログラムのガイド（資料1）、APとIBの内容を簡潔にまとめた小冊子（資料2）、国際バカロレア機構の今後の方向性を決める戦略計画（資料3．戦略計画、資料4．国際バカロレア北米戦略計画）、そしてディプロマ・プログラムの評価プロセス（資料5）である。

第1章 国際バカロレア・プログラムの概要

1 IBOの3つのプログラムと認定校

国際バカロレア機構 (International Baccalaureate Organization) は、スイスのジュネーブに本部を置く、国際教育の推進を目的とする非営利教育団体である。1968年に設立された。国際バカロレア機構 (略称: IBO) が提供するディプロマ・プログラム (Diploma Programme) で学び、試験を受け、ディプロマを取得すれば、世界中のどの国においても大学入学資格として認められるようにしたいとの願いがあった。ディプロマ・プログラム (略称: DP) は、高等学校の最終2学年 (日本では、2年生と3年生) の生徒を対象としたプログラムであるが、高度な教科内容、国際性、社会性を重視した教育、思考力を育む教育、厳格な評価などにより、プログラムの優秀性が認められ、世界各国において正当な大学入学資格として認められてきている (日本では、1979年に文部省が DP 取得者を大学入学資格を有する者として認めている)。設立当初、このプログラムは主にインターナショナルスクールで採用されていたが、現在では、多数の公立および私立の学校が採用している。米国においては、国際バカロレア・プログラム実施校の約90%が公立校である。

現在、IBOはディプロマ・プログラムのほかに「初等課程プログラム」と「中等課程プログラム」の提供もしている。1992年に11歳から16歳の中等学年の生徒を対象とした「中等課程プログラム (Middle Years Programme)」 (略称: MYP)、そして1997年には3歳から12歳の生徒を対象とした「初等課程プログラム (Primary Years Programme)」 (略称: PYP) を導入し、幼稚園・小学校・中学校・高等学校において、IBOの全人教育の理念に基づいた一貫教育を行えるようにしている。

IBOのプログラムはどの学校でも自由に導入できるというわけではない。IBOが定める基準にしたがって適格かどうかの厳しい審査を経て、認定される必要がある。図書の数や教員研修の義務などの条件をクリアする必要がある。3つのプログラムを導入し、一貫した教育を受けることは理想であろうが、プログラムはそれぞれ独立していて MYP だけを学校が導入するといったことが可能である。

IBOではジュネーブにある本部の他に、アフリカ・ヨーロッパ・中東 (IBAEM) 地域事務所、アジア太平洋 (IBAP) 地域事務所、ラテン・アメリカ (IBLA) 地域事務所、北米・カリブ (IBNA) 地域事務所の4つの地域事務所を設置している。

表1は、地域ごとの3つのプログラムの認定校の数を示したものである (2006年7月現在)。また、表2は国別のIB校の数を多い順に並べたもので (トップ10)、日本のIB校の数も参考までに示している (2006年7月現在)。アメリカ合衆国とカナダにIB校が多いことがわかる。

さらに、表3は日本にある学校でIBプログラムを導入している学校名とそれらの学校がIBのどのプログラムを導入しているかを明らかにしたものである (2007年1月現在)。インターナショナルスクールだけではなく、学校教育法の第1条で規定されている学校 (加藤学園暁秀中高等学校) も2000年からIB校として認定されている。

表 1 地域別 IB 認定校

地域	プログラム			合計
	DP	MYP	PYP	
アフリカ・ ヨーロッパ・中東 (IBAEM)	485	96	84	665
アジア太平洋 (IBAP)	192	95	88	375
ラテン・アメリカ (IBLA)	182	36	51	269
北米・カリブ (IBNA)	630	290	95	1015
合計	1489	517	318	2324

表 2 国別の IB 認定校

国名	学校数	プログラム		
		DP	MYP	PYP
アメリカ合衆国	681	520	170	72
カナダ	225	102	118	21
英国	100	97	6	5
オーストラリア	98	45	46	31
メキシコ	60	39	13	28
アルゼンチン	43	42	6	6
スペイン	38	36	7	2
インド	33	31	6	7
スウェーデン	33	29	7	5
中国	32	26	17	6
日本	12	9	3	7

表3 日本の国際バカロレア認定校

学校名（所在地）	DP	MYP	PYP
カネディアン・アカデミー Canadian Academy (神戸市東灘区向洋町中4-1)	○		
神戸ドイツ学院/ヨーロッパンスクール Deutsche Schule Kobe/European School (神戸市灘区曾和町1-3-22)			○
広島インターナショナルスクール Hiroshima International School (広島県広島市安佐北区倉掛3-49-1)	○		○
K. インターナショナルスクール東京 K. International School Tokyo (東京都江東区東砂3-31-5)	○	○	○
加藤学園暁秀中・高等学校 Katoh Gakuen Gyoshu Senior High School (静岡県沼津市岡ノ宮中見代1361-1)	○	○	
京都インターナショナルスクール Kyoto International School (京都府京都市上京区葭屋町通中立売下る北俵町317)			○
大阪インターナショナルスクール Osaka International School (大阪府箕面市小野原西4-4-16)	○	○	○
清泉インターナショナルスクール Seisen International School (東京都世田谷区用賀1-12-15)	○		
セント・メリーズ・インターナショナルスクール St. Mary's International School (東京都世田谷区瀬田1-16-19)	○		
サンモール・インターナショナルスクール St. Maur International School (横浜市中区山手町83)	○		
東京インターナショナルスクール Tokyo International School (東京都港区三田3-4-22)			○
横浜インターナショナルスクール Yokohama International School (横浜市中区山手町258)	○		○
	9校	3校	7校

2 日本における IB プログラム導入校

IB プログラムを導入するには学校は IBO から認定を受けなければならない。表 3 に示したように、2007 年 1 月現在、日本における IB 校は 12 校ある。カネディアン・アカデミー、神戸ドイツ学院/ヨーロッパンスクール、広島インターナショナルスクール、K. インターナショナルスクール東京、加藤学園暁秀中・高等学校、京都インターナショナルスクール、大阪インターナショナルスクール、清泉インターナショナルスクール、セント・メリーズ・インターナショナルスクール、サンモール・インターナショナルスクール、東京インターナショナルスクール、横浜インターナショナルスクールである。

IB 認定校となる前の段階の学校は認定候補 (candidate) 校と呼ばれるが、認定候補校として認められている学校は、玉川学園 (MYP 候補校)、広尾学園 (MYP 候補校)、AICJ 広島 (MYP 候補校)、福岡インターナショナルスクール (DP 候補校) の 4 校である。

すでに IB 校として認定されているが、あらたに IB プログラムを増やす予定の学校もある (清泉インターナショナルスクール (PYP 候補校)、東京インターナショナルスクール (MYP 候補校)、広島インターナショナルスクール (MYP 候補校))。

さらに、IB プログラムの導入趣意書提出校がある。ホライゾンジャパン・インターナショナルスクール (PYP)、関西インターナショナルスクール (PYP)、湘南インターナショナルスクール (PYP)、カネディアン・アカデミー (PYP)、グレッグ・インターナショナルスクール (PYP)、AICJ 広島 (PYP)、東京学芸大学附属国際中等教育学校 (仮称) (MYP) である。これらの学校も近い将来 IB 校になる可能性がある。

平成 8 年 (1996 年) 3 月に、文部省学術国際局国際企画課国際教育室が「国際バカロレアの概要」を作成している。その序文には「近年、海外などにおいて国際バカロレア資格を取得する日本人子女が増加していることにかんがみ、このような国際バカロレア事業の概要等について紹介し、国際バカロレアに関心をもつ人々の参考となるよう作成」した、とある。また、「我が国では、現在、7 校の国際学校がこの国際バカロレア事業に参加し、このカリキュラムによる教育を実施」している、とある。7 校とは、セント・メリーズ・インターナショナルスクール、カネディアン・アカデミー、サンモール・インターナショナルスクール、横浜インターナショナルスクール、清泉インターナショナルスクール、大阪インターナショナルスクール、聖心インターナショナルスクール (現在は、国際バカロレア認定校ではない) である。平成 8 年から 10 年で IB 校が急増したことが分かる。また、平成 12 年 1 月に加藤学園暁秀中・高等学校が MYP の認定校となったことで、国際学校 (インターナショナルスクール) だけでなく、学校教育法の第 1 条で規定している学校が IB 校になったことが大きな変化であると言える。

平成 18 年 11 月 25 日に玉川学園で「IB 国際バカロレア教育シンポジウム」が開催されたが、インターナショナルスクールの関係者ばかりではなく日本の大学や高校の先生たちの参加も多く、国際バカロレアのカリキュラムに対する関心の高まりが感じられた。

3 DP のカリキュラム構成

本稿は、国際バカロレアのプログラムの教科外活動と評価方法を明らかにすることを主目的としているので、ディプロマ・プログラム (DP) の教科外の 3 つの要件について、焦点を絞り考察する。DP 以外の MYP と PYP については割愛する。

3つの要件に触れる前に、まず、DPの概要を紹介する。

DPは、次の6つのグループから構成されている(表4)。国際バカロレア・ディプロマ資格を取得するためには、必ずグループ1～5までの科目を各々1科目ずつ選択し、さらにグループ6から芸術又はグループ1～5の中からもう1科目選んで合計6科目を2年間にわたり履修する必要がある。IBのテストの受験資格があるのは履修者のみである。

各グループ内の科目は自由選択であるが、履修規定により、理数系の生徒も文学を履修しなければならないし、文系の生徒も実験科学に取り組みなければならない。

表4 DPプログラムの構成

		科目
グループ1	第一言語	A 1 言語 HL/SL (母語又はそれに準ずる言語) の文学学習と世界の文学鑑賞と理解
グループ2	第二言語	A 2 言語 HL/SL (第一言語に準ずる高度なバイリンガル言語能力) B 言語 HL/SL (既習外国語：中級—上級) Ab Initio 言語 SL (未習外国語：初級) ラテン語 HL/SL、古典ギリシャ語 HL/SL
グループ3	個人と社会	歴史 HL/SL、地理 HL/SL、経済学 HL/SL、哲学 HL/SL、心理学 HL/SL、文化及び社会人類学 HL/SL、ビジネスと経営学 HL/SL、イスラム世界の歴史 HL/SL、グローバル社会における情報技術 SL
グループ4	実験科学	生物 HL/SL、化学 HL/SL、物理 HL/SL、環境システム SL、デザイン技術 HL/SL
グループ5	数学とコンピュータ科学	数学 HL、高等数学 SL、 数学的方法 SL、 数学的研究 SL コンピュータ科学 HL/SL (数学を履修した上、グループ6として選択可能)
グループ6	芸術と選択科目	美術・デザイン HL/SL、音楽 HL/SL、演劇 HL/SL、又は上記の科目群からもう一科目選択、IBOの承認を得た認定校作成のシラバスに基づいた科目 SL

(HL：上級レベル、SL：標準レベル)

生徒は、上記の6グループから、大学で専攻したい科目や得意とする科目を上級レベル(HL：Higher Level)として通常3科目(最大で4科目)選び、それ以外の3科目(あるいは2科目)を標準レベル(SL：Standard Level)として履修する。上級レベルの科目は、2年間に1科目当たり240時間以上、標準レベルの科目は、2年間に1科目当たり150時間以上の履修時間が必要とされている。

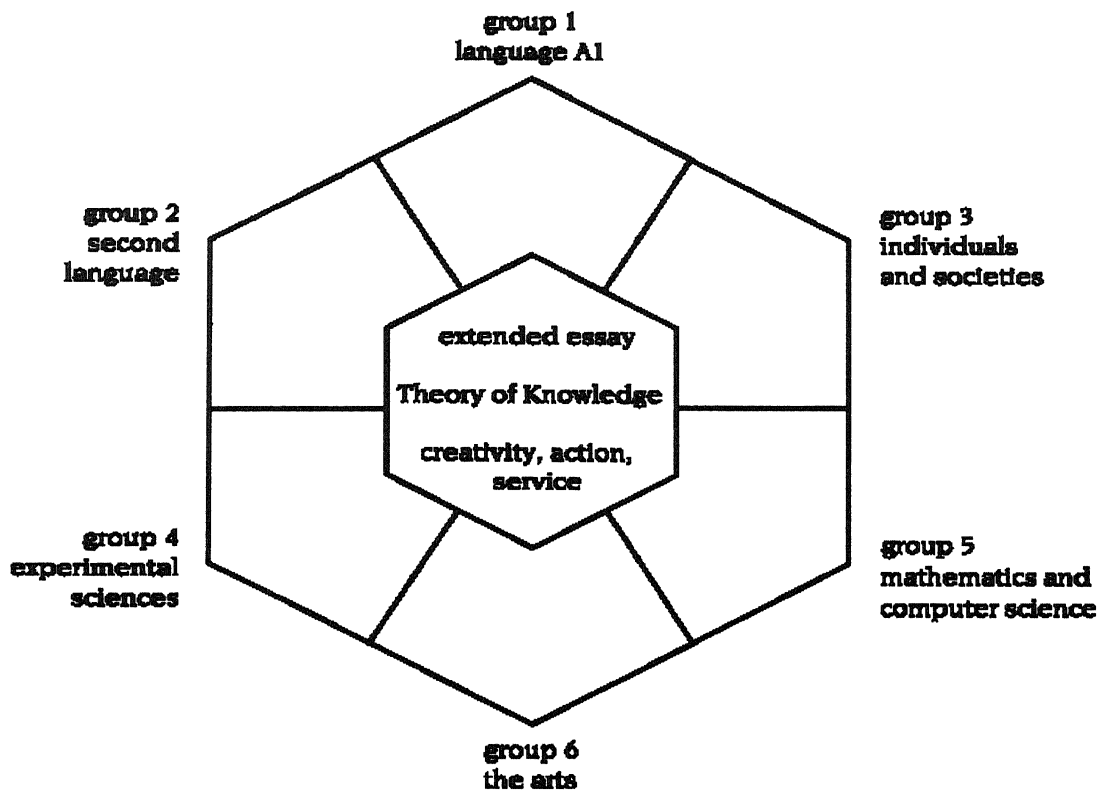
さらに、ディプロマ取得のためには、3つの要件も満たす必要がある(表5)

表 5 DP の 3 要件

<p>要件 1 Extended Essay (課題論文)</p>	<p>独自の調査研究した課題を学術論文として記述し、提出する。</p> <p>6科目の中から1つの科目に関連した研究課題を決めて、担当教師の指導の下に研究調査を行い、その結果を英文 4,000 語以内の学術論文にまとめる。</p>
<p>要件 2 Theory of Knowledge (知識の理論)</p>	<p>知識の理論の講義と演習を2年間にわたり学習し、小論文と口頭発表作品を提出する。最低 100 時間の学習が義務付けられている。</p> <p>知識を吸収するだけでなく、学際的な観点から個々の学問分野の知識体系を吟味して、理性的な考え方や客観的精神を養うことを重視している。</p>
<p>要件 3 CAS (創造性・活動・奉仕)</p>	<p>芸術・音楽・演劇などの創造的活動、スポーツなどの活動、奉仕活動に従事する。</p> <p>学問以外の生活の重要性を真摯に受け止めさせるために、2年間にわたり、それぞれ最低 50 時間ずつ、合計 150 時間以上の活動が要求されている。</p>

これらの教科と 3 要件の関係は、IB では図 1 のように示している。

図 1 DP の 6 角形



4 DP の試験の評価と DP 授与

IB 試験の評価は、国際バカロレア機構が選任する国際的権威を持つ主任試験官(Chief Examiner)が監督し、世界中にいる 5,000 人以上の試験官が責任を担っている。評価は絶対評価で、教科ごとに作成されている詳しい評価基準により評価を実施している。評価基準には、IB 校の教科担当教師が評価を行う内部評価用の基準及び外部の評価担当者が評価をするための外部評価用の基準が用意されている。IB 用の教科書は存在しないので、各学校では IB 試験に対応できるような内容の図書を採用することになるが、その際には評価基準を意識せざるを得ない。生徒の試験の結果が指導者の評価にもなるため、指導者にとってはどの図書を採択するかということは授業での指導方法と同様に大切になる。IBO 主催の教師研修会では、教科指導法、評価内容、評価基準の解釈と応用について学ぶ機会が設けられている。

IB の教科の評価は 7 段階に分けられていて、4 点以上を合格点としている (表 6)。DP 資格が与えられるのは、原則として 6 科目の合計で 24 点以上を得た者のみである。ただし、学科試験で合計 24 点を獲得しても、3 要件を満たしていない者は、DP 資格を取得できない。IB のプログラムにおいては 3 要件を教科の内容と同様に重視していると言える。最高点は 6 科目すべて最高点を取った場合の 42 点 (6 科目×7 点) と「課題論文」と「知識の理論」の両方で優秀な成果を収めた受験生に対して授与される 3 点の合計で、45 点になる。

表 6 IB の試験の評価

合格点 (最高点)	7	Excellent
合格点	6	Very Good
合格点	5	Good
合格点	4	Satisfactory
不合格点	3	Mediocre
不合格点	2	Poor
不合格点 (最低点)	1	Very Poor

DP のガイドの総則第 9 条に DP 授与に関しては、下記のように示している。

第 9 条 ディプロマ授与

ディプロマは、24 点を上回る得点を残したものに与えられる。

- 1 項 段階評価がディプロマ・プログラムの六つの科目に与えられる (第 2 条参照)
- 2 項 「知識の理論」を修め、評価基準を満たしている
- 3 項 「課題論文」が提出され評価されている
- 4 項 学生は適切な、創造性、活動、奉仕(CAS)の活動に従事していた
- 5 項 上級レベルでとった科目に 1 の評価がない
- 6 項 24 から 27 点までの学生の場合、落第条件が一つもない

- 7項 28点以上の学生の場合、落第条件は一つまで
- 8項 最終評価委員会が、学生の評価過程において不正に良い成績を取ろうとした違反行為を確認していない

落第条件 学生が以下の落第条件の一つでも当てはまる場合、卒業証書は授与されない。

- 9項 「知識の理論」、「課題論文」の両方とも初歩的という評価だった場合
- 10項 上級レベルでとった科目で2の評価があった場合
- 11項 上級レベルで3の評価をとった場合、他の上級レベル科目での5ないしそれ以上の評価でも埋め合わせにはならない
- 12項 標準レベルで1の評価をとった場合
- 13項 標準レベルで二つ以上2をとった場合
- 14項 3の評価を四つ以上とった場合
- 15項 標準レベルに2がある場合で、3が二つ以上ある場合

5 DP 資格試験受験者と DP 資格授与率

北半球所在の学校では5月に試験が実施され、結果は7月5日に公表される。南半球では、11月に試験が実施され、結果の公表は1月5日である。日本においては、インターナショナルスクールは5月に試験を実施しているが、加藤学園暁秀高等学校は入学を4月にしているために、試験は11月に実施している。

IBO 発行の Annual review 2005 によると、2001年の DP 資格試験受験者は 19,655 人であったが、毎年増加し続け、2005年には 31,707 人にまで増えている（表 8-1）。表 8-1 に示した人数はディプロマの証書を取得するために受験する人たちの人数であるが、IB のプログラムの中から1科目か2科目を受験して受験科目の修了証書（certificate）を取得する人も多く、こちらも年々増加している（表 8-2）。

表 8-1 DP 資格試験受験者（5年間の推移）

年度	DP 資格試験受験者数
2001	19,655人
2002	22,064人
2003	25,854人
2004	28,279人
2005	31,707人

表 8-2 DP 科目別試験受験者（5年間の推移）

年度	DP 科目別試験受験者数
2001	13,919人
2002	15,559人
2003	18,579人
2004	19,659人
2005	21,761人

（2006年 IBO 資料：Annual review 2005）

同資料によると DP 資格授与率（合格率）は毎年ほぼ同様で、80%前後である（表 9）。

年度	DP 資格授与率
2001	79.6%
2002	79.5%
2003	80.6%
2004	80.0%
2005	81.4%

（5月と11月に実施された試験の合格率を平均した数値）

IB のプログラムで学び、DP 資格試験に挑戦する日本人も世界各地にいる。文部科学省大臣官房国際課の「国際バカロレアの概要」（平成 17 年）によると、平成 16 年度における日本人の DP 資格試験受験者は 311 人（科目別受験者は 24 人）で、278 人が DP 資格授与者である。徐々にではあるが年々増加している。

6 IB 学習者の人物像

この章のはじめで、IBO の 3 つのプログラム（PYP、MYP、DP）はそれぞれ独立したもので、たとえばある学校が MYP だけを導入するということができる」と説明した。ここでは、3 つのプログラムに共通しているものについて紹介する。IBO では学習者をどのような人物に育てたいと考え 3 つのプログラムを提供しているのかということである。IBO が 2006 年に作成した IB Learner profile booklet に IB プログラムで学ぶ学習者の人物像が描かれている。次のようにまとめられている。

IB 学習者の人物像

すべての IB プログラムの目標は、お互いが人間として認め合い、地球を守る責任を分かち合い、より良い、より平和な世界を創るのに貢献できる国際感覚を身につけた人々を育てることにある。

IB の学習者は、次のような人になろうと努力する人である。

探求する人	生来の好奇心を発達させる。探求と研究を遂行するのに必要な技能を習得し、自主的に学ぶ。学ぶことを心から楽しみ、学ぶ事への愛を生涯にわたって保ち続ける。
博識な人	地域的重要性、世界的重要性をもつ概念、思想、問題を探求する。その探求を通じて、広い知識を獲得し、幅広く、バランスをとりながら学問の諸分野への理解を深めていく。
考える人	思考技術を自ら進んで批判的・創造的に駆使して、複雑な問題を見きわめ、それに取り組み、筋の通った倫理的判断を下す。
意思が伝えられる人	考えや情報を二つ以上の言語で、さまざまな伝達手段を使いこなしながら、自信を持って創造的に理解し表現する。他の人と積極的に協力し、協力の成果があがるように役目を果たす。
節操がある人	ゆるぎない道德心を持ち、誠実に、つねに公正と正義を意識し、個人、集団、コミュニティの尊厳を尊重しながら行動する。そして、自分の行動とその結果に責任を持つ。
心が広い人	自分の属する文化と自分の歴史を理解し、尊重するとともに、他の個人やコミュニティの考え方、価値観、伝統も受け入れる。つねにさまざまな視点を求め、評価をし、その経験によって自分を高めようとする。
思いやりがある人	他の人々が何を必要とし、どのように感じているかを、その人たちの身になって理解し、思いやりを示し、尊重する。一人一人が奉仕に参加し、他の人々の生活と環境をよりよくするために活動する。
リスクを恐れない人	未経験の状況や不確実なことに勇気と先見性をもって取り組み、自ら進んで新たな役割、アイデア、方法を探り出そうとする自立心をそなえている。自分の信念を守るのに勇敢で、はっきりと意見を表現できる。
バランスがとれた人	自分も他の人も、みなそれぞれに幸福でいられるようにするためには、知性と肉体と感情のバランスが大切であることを理解している。
自己を見つめる人	自分の学んでいることと経験について深く考える。学び続け、自分が成長していけるように、自分の力と限界を評価し、理解することができる。

これは IB0 の目標と価値観を簡潔に示したものである。

第2章 課題論文 (Extended Essay)

国際バカロレア・プログラムの用語の中には日本語にするのが難しいものがある。DPの3つの要件(Extended Essay、TOK、CAS)もその例である。まだ定訳はないので確定するまでは、文部科学省大臣官房国際課の「国際バカロレアの概要」(平成17年)で使用している訳語を採用することにした。Extended Essayは「課題論文」、TOKは「知識の理論」、CASは「創造性、活動、奉仕」という訳が当てられている。

さて、課題論文はいかなるもので、どのようにして評価されるのかを明らかにするのがこの章の目的である。国際バカロレア機構では各プログラムに対応する教科書を作成して提供することはしていないが、各教科や要件等に関するガイドブックで詳しい規則や評価基準を明らかにしている。ここでは、主としてVade Mecum 2006(2005)とThe Extended Essay(1998)を使って、課題論文の全貌を捉えてみることにする。

課題論文は論文の前に課題がついているように、長めの論文であれば何について書いても良いというわけではない。教科の授業で学んだことについて書くことが必要であり、字数についても4,000語以内(日本語の場合は8,000字以内)という決まりがある。また、生徒は監督者(supervisor)の助言を得ながら書き進めなければならない。

1 課題論文のテーマと評価基準

課題論文の詳細に入る前に、課題論文のテーマと評価基準について簡単に触れておく。

まず、課題論文のテーマであるが、生徒はどのようなものを選んでいいのか、最近のIBの資料で見てみよう。2006年の5月のIB受験生のデータがある。そのデータでは、31,198名の課題論文の提出予定者がいて、彼らがどの分野で論文を書こうとしたかは表1にまとめられている。グループ3(個人と社会)に関する教科との関連をテーマにした生徒は53.80%で、半数を超えている。グループ4(実験科学)とグループ1(第一言語)がそれに続いている。

表1 教科群別課題論文(EE)の登録志願者数

教科群別 EE 登録志願者数	グループ1 第一言語	グループ2 第二言語	グループ3 個人と社会	グループ4 実験科学	グループ5 数学とコンピュータ科学	グループ6 芸術と選択科目	パイロット科目	総計
	4,639	1,661	16,783	5,066	902	2,048	99	31,198
割合	14.87%	5.32%	53.80%	16.24%	2.89%	6.56%	0.32%	100.00%

(Diploma Programme Statistical Bulletin May 2006. 19頁)

なお、各グループの科目は次のようなものである。

グループ1は母語又はそれに準ずる言語の文学学習と世界の文学鑑賞と理解。グループ2は第一言語に準ずる高度なバイリンガル言語能力、既習外国語、未習外国語、ラテン語、古典ギリシャ語。グループ3は歴史、地理、経済学、哲学、心理学、文化及び社会人類学、ビジネスと経営学、イスラム世界の歴史、グローバル社会における情報技術。グループ4

は生物、化学、物理、環境システム、デザイン技術。グループ5は数学、高等数学、数学的方法、数学的研究、コンピュータ科学。グループ6は美術・デザイン、音楽、演劇、IB校のシラバスに基づいた科目など。

次に、評価基準についてであるが、評価基準はどのような役割を果たしているのであろうか。課題論文の指導教官は常に生徒に指導しているのは、生徒がIBの示している評価基準を念頭に入れて書くことである。つまり、一般評価基準 (General Assessment Criteria) と教科評価基準 (Subject Assessment Criteria) に注意を払うことである。これらの基準が生徒に公開されていて、積極的に活用するように指導がなされていることに注目したい。カリフォルニア州のサクラメントにある Mira Loma High School を訪問した際に、IBコーディネーターの David Mathews 氏もこのような指導をしているとのことであった。同氏は自分が運営するホームページでも、論文を書くときには評価基準に注意を払うように生徒に呼びかけている (2006年9月12日、http://www.thereforeib.net/extended_essay/)。

一般評価基準は次の A~H の 8 つ設定されている。

- A 研究課題 (Research question) の絞り込みと明確さ
- B 研究課題に対する研究方法 (Approach to the research question)
- C 分析／解釈 (Analysis/interpretation)
- D 論拠／評価 (Argument/evaluation)
- E 結論 (Conclusion)
- F 要約 (Abstract)
- G 形式に沿った提示 (Formal presentation)
- H 総合的判断 (Holistic judgement)

各一般評価基準に数段階の質的レベルがいくつかの到達度を表す記述子 (descriptor) によって定義されている。また、特に重要な基準がいくつかある場合には到達度の段階も他の基準より細かく分けられている。一般評価基準についての課題論文の質は、8 つの基準の各々について到達度を判定し、それを合計することにより評価される。課題論文の一般評価基準での最高点は 24 点になる。

次に、教科評価基準であるが、これは選択したトピックを、課題論文が登録されている教科の文脈の中で志願者がどのように扱っているかを判定するものである。各教科にそれぞれ独自の評価基準セットが定められていて、各課題論文は、それが登録されている教科の教科評価基準に照らして評価される。例えば、グループ1 (第一言語) は次のような評価基準が設定されている。

- J 調査した文献についての知識と理解、及び適宜な二次的情報源への参照
- K 文学的な判断及び／または分析によって正当化される個人としての考え [意見]
- L 文学論に相応しい言語の使用

歴史に関して書いた論文であれば、次のような評価基準により評価がされることになる。

- J 史料
- K 歴史に関する知識と理解
- L 歴史に関する情報／証拠の選択と活用
- M 批判的な分析と歴史に基づく判断

教科評価基準での最高点は 12 点になる。

一般評価基準の得点と教科評価基準の得点の総計が A～E の評価となる（表 2 を参照）。

表 2 基準と評価

合計：一般評価基準（ /24）	_____
合計：教科評価基準（ /12）	_____
総計（ /36）	_____
評価：	_____
A 優秀（30-36）	
B 良（25-29）	
C 可（17-24）	
D 普通（9-16）	
E 初歩的（0-8）	

課題論文は以上のような評価基準に照らし評価されるが、論文の指導者である監督者による評価で最終的な評価とされるのではない。IB 校の監督者による評価はあくまでも参考にすぎない。最終的な評価は IB が指定した外部の試験委員（Examiner）により下される。したがって、生徒が仕上げた最終的な課題論文や監督者がつけた課題論文の予想評点を IB 校のコーディネーターは IB が指定したところへ期日までに届ける必要がある。例えば、5 月に IB の試験を受ける北半球の IB 校であれば、課題論文は 2 ヶ月ほど前の 3 月 15 日までに外部の試験委員に提出しなければならない。また、監督者がつけた課題論文の予想評点は、約 3 週間前の 4 月 10 日までに英国のカーディフにある IBCA（IB カリキュラム評価・学術部門）に届けなければならない（表 3 を参照）。

表 3 送付先及び到着日

	試験実施期間	送付先	到着日
志願者の課題論文の提出	2006 年 5 月/ 2006 年 11 月	試験委員	2006 年 3 月 15 日/ 2006 年 9 月 15 日
監督者が予想する志願者の課題論文の評点の提出	2006 年 5 月/ 2006 年 11 月	IBCA	2006 年 4 月 10 日/ 2006 年 10 月 10 日

2 課題論文の詳細

課題論文についての詳細は IB のガイドブック (IB Extended Essay, April 1998) に書かれている。以下、その中から「規定」、「監督」、「一般的ガイドライン」、「課題論文の評価」を翻訳し紹介する。

規定

ディプロマの授与にあたっては、ここに定めるすべての規定に従わなければならない。

規定 1—要件

すべての IB ディプロマ志願者は、課題論文を提出しなければならない。課題論文を提出できるのは、ディプロマ・カテゴリーと再履修カテゴリーに属する志願者のみに限られる。再履修志願者は、前回と同じ教科分野または別の教科分野に登録した新しい課題論文を、評価のために提出するか、または前回の論文を書き直して提出するかのいずれも可能である。

規定 2—監督

課題論文を提出する志願者のいる学校は、その志願者が選択した教科について適切な資格または経験を有する自校の教師によって、志願者の監督 (supervision) が行われるようにする責任を負う。この監督を行う教師は、志願者の課題論文監督者 (supervisor) と呼ばれ、志願者の縁者であってはならない。

規定 3—論文に使用する言語

教科グループ 1 または 2 について提出される課題論文は、その言語によって書かれていなければならない。その他のすべての教科で作成される課題論文は、英語、フランス語またはスペイン語のいずれかで書かれるものとする。

規定 4—不正行為

国際バカロレア機構 (IBO) では、いずれかの評価要素に関して志願者が不当な利益を得ようと試みることを不正行為として定めている。ある志願者が自分の作品が別の志願者によって評価のために提出されることを知りながらそれを放置する行為を癒着と呼ぶ。ある志願者が他人の作品、思想、または考えを、出典を明示せずに評価のために提出する行為を、IBO では盗作と定義している。

盗作として非難されることを防ぐため、志願者は必ず他の人の言葉および考えの出典を完全かつ詳細に示さなければならない。課題論文の要件と、ディプロマの取得に必要な他の教科の評価要素の要件を両方とも満たすために、同じ作品または同作品の 2 つのバージョンを提出することはできない。

規定 5—教科の選択

課題論文のために選択可能な教科と言語のリストは、便覧 (Vade Mecum) に記載されている。志願者がこのリストに含まれていない言語で教科グループ 1 を主題とする課題論文の提出を希望する場合、学校は、便覧に記されている期日までに IBCA より許可を得なければならない。教科グループ 1 および 2 の教科領域における課題論文の性質についての説明は、各教科グループの教科ガイドラインを参照すること。

課題論文のために選択する IB 教科は、志願者がディプロマ取得のために履修している教科ではなくとも良い。

課題論文を学校単位でのシラバス、知識の理論またはパイロット・プログラムの一環として提出することはできない。但し、便覧に掲載されているリストに含まれているケースに該当する場合は除く。

言語 A1 の SL 独習志願者は、通常、その言語 A1 で書いた課題論文を提出することはできない。

志願者がディプロマ課程で言語 A1 として登録している言語でグループ 2 を主題とする課題論文を提出することは認められない。

課題論文を登録した教科とは別の教科を主題とする課題論文が評価のために提出されても、その論文は評価されない場合がある。

監督

課題論文監督者は 4 つの主な責任を負う。

- ・ 志願者が課題論文のために研究を行い論文を執筆する間、終始志願者を励まし支援する。
- ・ 研究の技法について志願者にアドバイスとガイダンスを提供する。
- ・ 課題論文が志願者自身によって作成されるようにする。
- ・ 監督者レポートを作成する。

監督者は、課題論文がディプロマの全体像の中でどれほど重要なものかを志願者が理解できるようにしなければならない。志願者は、課題論文のために合計 40 時間程度を費やすことが望ましい。志願者は、ディプロマ・プログラムを進める中で課題論文以外にも多くの課題を果たさなければならないので、時には課題論文の要求事項によってくじけそうになることがあるかもしれない。そこで、志願者が課題論文を準備し書き進める間、志願者を励まし、支え、そして不安を除くことが監督者の 1 つの重要な役割となる。

監督者が 1 人の志願者のために費やす時間は、状況によって異なるが、通常は合計で 2~3 時間である。志願者が課題論文のために計画的に時間を使えるようにするため、学校は課題論文の執筆過程を幾つかの重要な段階ごとにその学校での期限を設定することが好ましい。執筆段階のスケジュールを立てることで、監督者が志願者との密接な関係を維持することが可能になる。スケジュールは次の段階を含めて作成するとよい：教科の選択、トピックの決定、研究課題の記述、研究の実施、下書きの作成、最終版の提出。

監督者は、志願者が本ガイドブックに記されている関連情報をすべて熟知するようにしなければならない。また監督者は、志願者に適用される個々の具体的要件に相応しいアドバイスとガイダンス

を提供しなければならない。これには次の項目についての支援が含まれる。

- ・ 適切なトピックを定める。
- ・ 研究課題を適切に設定する。
- ・ 適切な情報源へのアクセス（人物、図書館、実験室など）。
- ・ 情報・証拠・データの収集・分析技術。
- ・ 情報の出典を記録するための資料一覧の作成方法。
- ・ 要旨を作成する。

監督者は、トピックと研究課題の選択について志願者と議論することが好ましいが、志願者がトピックと研究課題を自分で決定し、自分の考えを発展させていくことを妨げてはならない。監督者は、選択された研究課題が健康と安全、プライバシーと人権、動物の福祉と環境問題に関して適切な法的および倫理的基準を満たしていることを確認しなければならない。これらの問題については、該当する教科ガイドラインにさらに詳しい情報が記されている。

監督者は、課題論文の最初の下書きを読み意見を述べるのが好ましいが、監督者が志願者のためにその下書きに手を加えることは許されない。課題論文の誤りを直し、内容の正確さを確認することは、志願者の責任において行う。

監督者は、課題論文の最終版が記入事項が全て埋められたカバーに納められているかを確認することに責任を負う。課題論文のカバーに志願者または監督者の署名が行われていない場合、その論文は評価の目的で受理されず、学校に返却される場合がある。監督者は、カバーの内側に監督者レポートを記入し、カバーに納めた課題論文を IB コーディネーターに提出しなければならない。

監督者は、課題論文の作成プロセスを観察してその論文が志願者自身の手によるものであることを確認する責任を負う。さらに、監督者は課題論文の最終バージョンを読むものとする。監督者が盗作などの不正行為が行われた疑いがあると判断する場合、監督者はその疑いの理由を説明する完全なレポートを作成しなければならない。監督者は、このレポートを IB コーディネーターに提出し、コーディネーターは適切な処置を講じるものとする。

研究活動の間、志願者が外部の人物の意見を聞く必要が生じる場合がある。これは行っても良いが、上述のすべての手続きが遵守されるようにする責任を負うのは、学校での志願者の課題論文監督者である。

一般的ガイドライン

課題論文の性質

課題論文は、ある教科の中で範囲を限定したトピックについて行う詳細な研究として定義されている。その目的は、志願者に対し自分の力で研究を行う機会を提供することである。個人で行う研究、考えと情報を論理的で一貫性のあるやり方で伝達すること、および課題論文の全体を本ガイドライ

ンに沿った体裁に仕上げることに重点が置かれる。そういった一般的課題の多く、たとえば情報の処理の仕方、分析のレベル、意見の質などが一般評価基準に従って評価される。このことから、一般評価基準と教科評価基準のウェイトが2:1に配分されている。

教科の選択

課題論文を登録する教科は、便覧に記載されている利用可能な教科のリストから選択しなければならない。

課題論文のトピックあるいは研究課題を決める前に、課題論文を登録する教科を選択することが好ましい。IBOが許容される教科の範囲を指定しているので、課題論文に相応しくないトピックがある。

課題論文のために選択する教科は、志願者がディプロマ取得のために履修している教科ではなくとも良いが、志願者が十分な知識とスキルを持っている教科を選択するように配慮すべきである。

また志願者は、自分がその教科にどの程度個人的な興味を持っているかを考えた上で、教科を選択すべきである。

論文の準備

トピックの選択

課題論文のトピックは、選択した教科の中の特定の研究領域である。トピックの選択を最終的に決定する前に、関連する教科ガイドラインを慎重に検討すべきである。

志願者は、自分の興味を刺激し、自分にとってやりがいのあるトピックを選択するよう心がけるべきである。選択したトピックは、範囲を限定し、志願者が1つの課題または問題を掘り下げて考察することができるように範囲を十分に狭く設定すべきである。志願者が分析と評価を行うために情報またはデータを収集または作成する機会を持てるようにしなければならない。志願者が教科の範囲内で知的貢献をすることは期待されていない。

幅の広いトピックを設定すると、ディプロマに相応しいレベルの課題論文を作成できない可能性がある。個人による研究を必要としないトピック、あるいは本質的に物語(narrative)あるいは記述的なアプローチを必要とするトピックは、課題論文に相応しくない。同様に、二次的資料を利用する必要が生じる場合もあるが、そのような資料の要約を行うだけの課題論文は、ディプロマに相応しいものと認められない。資料によって十分に立証されているトピックの要約を書いても、ディプロマに相応しいレベルの課題論文を作成できないだろう。

研究課題

適切なトピックを選択したのち、志願者は調査の焦点を絞り、具体的な研究課題を設定する。多くの課題論文で、これは疑問文の形式によって表わされる。但し、仮説を立てて調査を開始するなど、他の方法でも良い。志願者は、頻繁にこの研究課題を見直すことで、調査の目的と方針を堅持することができる。

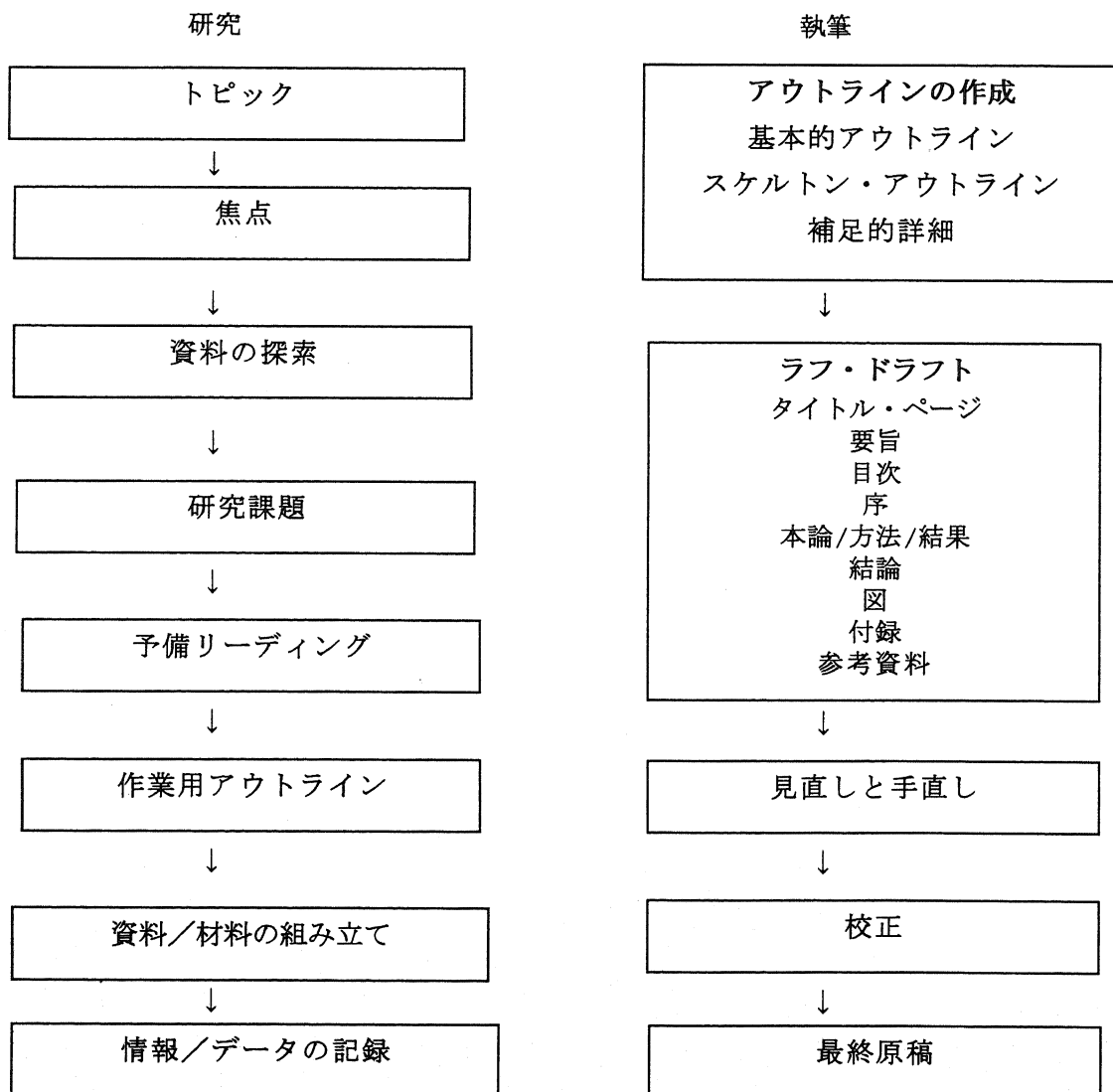
志願者は、やりがいのある研究課題を設定することが好ましいが、論文の長さ、利用できる時間と資源の制約の範囲内で探求が可能なものでなければならない。

研究プロセス

教科が多様であり、研究アプローチも多岐にわたるため、本ガイドでは研究の方法とスキルについて詳細なアドバイスを提供しない。しかし、設定した研究課題に対して説得力のある答えを作成するために役立つような情報と考えを生み出し、また集めるには、教科の性質に応じた体系的なプロセスが不可欠である。

次の図は、研究の実施と課題論文の執筆プロセスについて1つのモデルを提供することを目的としている。

研究・執筆プロセス



Research and Communication Skills, Ottawa: Piperhill, 1996 からの翻案

論文の構成

大半の課題論文では、慎重にアウトラインと下書きが作成された後、以下に説明するような構成を整えることになる。

序

序には以下の要素を含めるものとする。

- ・ 選択したそのトピックが興味深い、重要である、または研究の価値があると考えられる理由の説明。
- ・ 背景情報、および適切な文脈にトピックを位置づける試み。
- ・ そのトピックを自分で扱える程度にまで焦点を絞ったかどうかの説明。
- ・ 明確かつ正確に説明された研究課題。
- ・ 主張と意見の明確な結論。つまり後に論文の本論において展開される、研究課題に対する回答。

本論／展開

論文の主要部分である本論は、研究課題に対する説得力のある回答を体系的に展開することを本質的特徴とする。この部分の構成とアプローチは、課題論文を作成する個々の教科の規定によって定められる。一部の教科では、本論の中に幾つかの大きな節を設け、それに小見出しを付ける必要がある。例えば、科学的調査では、通常、方法の節と結果の節を別に立てる。但しその他の教科では、論文の流れと統一性が妨げられるので、小見出しを避けるべき場合もある。

結論

結論は以下の要件を備えなければならない。

- ・ 明確に述べられている。
- ・ 調査を行った研究課題に関連している。
- ・ 提示されている証拠に基づいて導かれている。
- ・ 研究から発生した課題、未解決の疑問、新たな疑問が説明されている。

形式的体裁

課題論文は、トピックを選択した教科に相応しい、明確で正確で、フォーマルな文体によって書かれていなければならない。タイプライターまたはワードプロセッサの利用が推奨される。

課題論文の長さ

あらゆる課題論文において、長さは4000ワードを上限とする。この上限の語数には、序、本論、結論、および引用文を含めるが、以下のものは**含めない**。

- ・ 要旨
- ・ 謝辞
- ・ 目次ページ
- ・ 地図、チャート、図、注釈付きの図、表
- ・ 参照資料／参考文献の一覧

・ 付録

4000 ワードを超える論文はペナルティの対象となり、評価員は語数の上限を超える部分を読む義務を負わない。

課題論文を日本語または中国語で執筆する志願者は、次の計算式を用いることとする。

日本語：1 ワード＝日本語で約 2 文字

中国語：1 ワード＝中国語で約 1.2 文字

タイトル

タイトルは、論文の焦点がわかりやすいように付ける。タイトルは正確でなければならない、また必ずしも疑問文の形を取らなくともよい。

要旨

300 ワード以内の要旨を付けなければならない。要旨は序の役割を果たすものではなく、課題論文の概要を示すものであり、したがって最後に作成するべきである。

要旨を付ける目的は、課題論文の中で意見がどのように展開されているか、また到達した結論が妥当であるかを詳しく検討するように志願者を促すことにある。また、課題論文の読み手がその内容をすぐに理解できるようにするためのものでもある。

要旨の最低要件は以下のものを明確に述べることである。

- ・ 調査された研究課題
- ・ 調査の範囲
- ・ 課題論文の結論

要旨は、1 枚の用紙の片面を使い、タイプライターまたはワードプロセッサで打ち、タイトル・ページの次に置くこととする。

目次ページ

目次ページは課題論文の冒頭に置かなければならない。論文のすべてのページに番号を振ることとする。インデックスは必須ではない。

図解

体裁と全体が整然と仕上がっていることは重要である。図解を使用する場合は、そのデザインにも配慮し、効果的に使用する。グラフ、図、表および地図は、適切な表示を付け、理解しやすくなっていなければ、効果的にならない。課題論文に取り入れる図などの素材は、すべて直接本文に関連付け、適宜出典を記さなければならない。写真とはがきの利用は、キャプションまたは注釈を付け、課題論文の中で行われている具体的な主張をわかりやすく示すために使用する場合に限り、認められる。

参照資料／参考文献

他人の言葉の直接的または間接的な利用を行う場合は、その言葉が書かれたものか、口頭で行われたものか、または電子的手段によるものかにかかわらず、他の資料から論文に転載するビジュアル素材の場合と同様に、適切に出典を記さなければならない。志願者がこの要件を守らなかった場合は盗作と見なされる。したがって、それは不正行為として扱われる。

参考文献または参照資料のリストは、志願者が参考に利用した書籍・雑誌などの作品のみを掲載するものとする。資料の引用と参照は、必ず承認された形式に則って行うこととする。文献参照の方法は大きく2つのグループに分けられる。本文中に挿入して表示する方法と番号を付ける方法である。いずれを利用しても良いが、終始同じ方法を用い、明確に表示しなければならない。志願者が参考文献のリストを上手に作るができるように、課題論文の教科に相応しい有名なスタイル・ガイドを参考にしよう志願者に求めることは、良い方法である。

参考に利用した各作品は、それが参照文献として本文中ですでに引用されているか否かにかかわらず、参考文献のリストに含めなければならない。参考文献のリストは以下の項目を明示しなければならない：著者、タイトル、発行日と発行地、出版社名。これらを1つの標準的な参考文献リスト作成方法に従って示す。例えば次のようにする：

Peterson, A. D. C. *Schools Across Frontiers: the story of the International Baccalaureate and the United World College*. La Salle, Illinois: Open Court, 1987.

Peterson, A. D. C. (1987), Schools Across Frontiers: the story of the International Baccalaureate and the United World College, Open Court: La Salle, Illinois.

Institute for Aerospace Research (IAR). Flight Research. *In National Research Council of Canada (NRC)* [オンライン]. 1996 [1996年07月11日引用]ウェブから利用可能：<URL: http://www.iar.nrc.ca/iar/fr_general-e.html>

Zieger, Herman E. "Aldehyde." *The Software Toolworks Multimedia Encyclopedia*. Vers. 1.5. Software Toolworks. Boston: Grolier, 1992.

Bruckman, Amy S. "MOOSE Crossing Proposal." mediamoo@media.mit.edu (1994年12月20日)。

但し、個人的なeメールのリストではアドレスを記載してはならない。

付録

付録は課題論文の不可欠の部分ではなく、評価委員は付録を読む義務はない。したがって、分析と意見に直接関係する情報はすべて論文の本論に盛り込むように注意すること。生データの完全なり

ストは、不可欠であると判断しない限り、課題論文に含めてはならない。

課題論文では、付録に記載されている資料を頻繁に参照すると論文の連続性が妨げられるので、これは行うべきではない。

他のメディアと素材の使用

図版を除き、紙以外のメディアに記録した素材は、補足的付録としてのみ提出することができ、紙面に記された課題論文の価値を損なっていない。

コンピュータ

コンピュータは、課題論文の教科に関連するデータの分析に適したツールである場合に、利用することが好ましい。コンピュータ出力のハードコピーなどの素材は、課題論文に含めることができるが、使用したプログラムの参照については参照を表示し、またオリジナル・プログラムについてはその複製を付録としてのみ添付することとする。

プログラムは、コンピュータ・サイエンスおよび物理（特定の状況において）に限り、課題論文の一部として含めることができる。

ビデオテープ

ビデオテープを補助素材として使用することは認められない。

オーディオテープ

オーディオテープを補足的素材として使用することは認められるが、**推奨はされない**。課題論文の補足としてオーディオテープを取り入れても、特別な得点にはならない。デジタル・オーディオテープは**受け付けない**。

標本

調査で使用または作成した標本は、課題論文の一部とならないので、提出してはならない。そのような素材の代わりとして証拠写真を提出することはできる。

課題論文の評価

評価基準の利用

すべての課題論文は、IBO が任命する評価委員によって外部評価が行われる。すべての課題論文に 0 点から 36 点までの得点が付けられる。満点は、各論文に適用されるすべての基準に関して最高レベルが付けられた場合の合計点である。基準は一般評価基準と教科評価基準に分かれ、その配点は 2 : 1 である。各課題論文の基準ごとのレベルは、ベストマッチ・モデルによって判定される。評価委員は、各基準に評価対象の課題論文がレベル記述子の特徴を 1 つでも満たせなくなるまで、低いレベルから高いレベルへと評価を進めていくのではなく、その論文にもっとも相応しい（つまりベスト

トマッチ) レベル記述子を見つけるように求められる。ベストマッチ・モデルは、一般評価基準と教科評価基準の両方に適用される。

一般評価基準

一般評価基準は 8 つある。これらは、課題論文の一般的特徴、つまり要旨と結論の執筆、情報とデータの利用、および全体的体裁などを志願者がどの程度のレベルで処理しているかを判定するものである。

各一般評価基準に数段階の質的レベルが一連の到達度記述子によって定義されている。特に重要な基準がいくつかあり、それについては到達度の段階も他の基準より細かく分けられている。一般評価基準についての課題論文の質は、8 つ基準の各々について到達度を判定し、それを合計することにより測定する。課題論文の一般評価基準での最高点は 24 点である。

不適切な研究課題

一般評価基準 A、C および D は、不適切な研究課題を判定するものである。不適切な研究課題は 2 つの主なタイプに分類される。その 1 つは、あまりにも範囲が広く、課題論文の長さの制限内では表面的な記述レベル以上の効果的な処理ができない研究課題である。教科ガイドラインに、そのような調査問題の例が多数示されている。そのような調査問題では、基準 A に関してレベル 1 より高い到達度に達しない。また、他の一般評価基準および教科評価基準についても、適切な成果を得ることができないだろう。

その他の不適切な研究課題のタイプとして、あまりにも単純すぎるもの、範囲が狭すぎるもの、推測的要素が強すぎるものなどがある。それらは、容易に完了してしまうもの、あるいは無意味な結果に終わるもの、あらかじめ予測されて当然の自明の結果に終わるものである。そういった課題論文は、基準 A に関してレベル 0 と判定される。また、基準 C および D に関しても理論上は要件を満たすことが容易なので、どちらの基準についても最高でレベル 2 と判定する。

この第 2 のタイプの研究課題は、課題論文作成に関して体系的調査が行われないものとして定義される。以下に幾つかの例を挙げる：

生物学	光がないと光合成がどのような影響を受けるか。
生物学	遺伝病の原因は何か。
古典言語	キケロの最初のカタロニア語による演説における絶対奪格構文の使用頻度。
コンピュータ・サイエンス	インターネットを使って CD を購入する方法。
環境システム	ペットのスナネズミが 1 年間に産む子供の数。
地理	ジャガイモ-ジャガイモの作付け面積と利用法。
地理	シドニーには中心的ビジネス街があるか。
歴史	クラウディウス皇帝はなぜ足が不自由だったのか。
歴史	もし最初に火器を発明したのが北米の原住民であれば、

歴史

彼らは白人との戦いに勝利していただろうか。

アフリカのリフト・バレーにおける人類の進化を地球外の起源にまでさかのぼって辿る。

数学

12 進法。

社会人類学

San X の文化は彫刻を利用せずに分析することは可能か
(このコロンブス以前の遺跡から発見された彫刻以外には、この文化について何も知られていないことがすぐに明らかになる場合)。

演劇

舞台照明に効果があるかどうかの調査。

重要なことだが、こういった研究課題の適切さをタイトルだけに基づいて判断することはできない。タイトルから判断すると些末な問題のように思われる研究課題でも、扱い方が優れていれば価値ある発見につながる可能性もある。したがって、課題論文のタイトルは 1 つの目安として役立つが、研究課題の適切性基準に関する到達度を判定するには、必ず論文全体を判断しなければならない。

教科評価基準

教科評価基準は、選択したトピックを、課題論文が登録されている教科の文脈の中で志願者がどのように扱っているかを判定するものである。

各教科にそれぞれ独自の評価基準セットが定められている。各課題論文は、それが登録されている教科の教科評価基準に照らして評価される。

各教科評価基準に、それぞれ数段階の質的レベルが一連の到達度として定義されている。一般評価基準と同じように、特に重要な基準がいくつかあり、それについては到達度の段階も他の基準より細かく分けられている。教科評価基準についての課題論文の質は、各教科評価基準について到達度を判定し、それを合計することにより測定する。課題論文の教科評価基準での最高点は 12 点である。

提出される教科に相応しくない課題論文は、教科評価基準の得点が 0 と判定される。

総合的評価

0 から 36 点までの間で決定された総合点を用いて、課題論文が以下のどのクラスに属するかを判定する。ここに示すクラスを知識の理論で使用するクラスと総合して、課題論文と知識の理論に関して付与されるディプロマ・ポイントが決定される。詳細は後出の「ディプロマ・ポイントの付与」を参照。

クラスは次のように分類されている：

A 優秀

B 良

C 可

D 普通

E 初歩的

クラスの定義は、課題論文の要件に関する各志願者の成績を学校に報告するための基礎として用いられる。

ディプロマ・ポイントの付与

課題論文は知識の理論と総合してポイントが与えられ、そのポイントはディプロマの総合点の一部として計算される。志願者の課題論文と知識の理論の両方での総合成績に応じて、最大で3ポイントが与えられる。

知識の理論と課題論文の作品は、いずれも公表されている評価基準に基づいて成績判定が行われる。公表されている評価基準の適用により作品の質が判定されると、それに応じて、志願者の課題論文と知識の理論の成績が上述の5つのクラスのいずれか1つに分類される。

志願者に付与されるポイントの総数は、志願者が課題論文と知識の理論の両分野で到達した成績レベルを総合し、それを次ページのマトリックスに当てはめて決定される。

ディプロマ・ポイント・マトリックス

課題論文と知識の理論

		知識の理論					
		優秀	良	可	普通	初歩的	未提出
課題論文	優秀	3	3	2	2	1	N
	良	3	2	1	1	0	N
	可	2	1	1	0	0	N
	普通	2	1	0	0	0	N
	初歩的	1	0	0	0	落第	N
	未提出	N	N	N	N	N	N

一例として、課題論文が**良**で知識の理論の成績が**可**と判定された志願者には、1ポイントが与えられる。また課題論文が**普通**で知識の理論の成績が**優秀**と判定された志願者には2ポイントが与えられる。

課題論文を提出できなかった志願者は、課題論文がNつまりポイント無しとなり、ディプロマを取得できない。

課題論文と知識の理論の両分野で**初歩的**レベルの成績であると、ディプロマの授与は認められない。

第3章 知識の理論 (TOK)

IBOが求める3つ要件はIBプログラムを特徴づけるものであり、高い評価を受けているものである。この章では「知識の理論」(Theory of Knowledge: TOK)をとりあげ、どのような内容でIBではどのように評価をしているかを明らかにする。

TOKは国際バカロレア独自の学習コースで、生徒が知識を吸収するだけでなく、学際的な観点から個々の学問分野の知識体系を吟味して、理性的な考え方と客観的精神を養うことを重視している。さらに、言語・文化・伝統の多様性を認識して国際理解を深め、偏見や偏狭な考え方を正すことを目指している。ディプロマ取得を目指す生徒は、2年間にわたり最低100時間、TOKの学習を義務付けられている。

1 外部評価と内部評価

TOKの評価は外部評価(External assessment)と内部評価(Internal assessment)によりなされる。

外部評価はTOK小論文を対象とした評価である。ディプロマ取得を目指す生徒は、IBOが年度毎に作成する10の表題のリストの中から1つの表題を選び、1200語から1600語の範囲で小論文を書いて、外部の試験委員(Examiner)の評価を受けなければならない。小論文の書き方については、IBOで発行しているTOKのガイドブックに詳しい説明がある。また、評価基準もそのガイドブックに示されている。評価基準を公表して、それを生徒に意識させながら小論文を書かせる指導が特徴的である。

小論文の表題のリストは次のようなものである。

TOK 規定タイトル (2004年11月および2005年5月 受験者用説明)

TOK小論文は、小論文を自分が書いたということを証明するために、あなたの先生に提出すること。小論文は、下記の10のタイトル(質問)の中の1つについて書かれたものであること。どのタイトルを選んでもよいが、あなたの先生に相談することを勧めます。あなたの小論文は、6つの領域での習熟度について採点されます。その領域は、TOKガイドブックに載っている評価基準の中で述べられています。知識の問題を論文の中心に据えることを忘れないように。さらに、適切な箇所で、あなたが受けたIBOプログラムのほかの部分や、知識者(knower)としてのあなたの経験に触れるのを忘れないこと。必ず述べたことには納得のいく説明をし、あなたの主張を説明する当を得た例を挙げなさい。あなたの主張が含んでいる意味に注意を払い、それらにどのような反対意見があるかを考えるのを忘れないように。外部の資料を用いるならば、承認された取り決めに従って引用すること。

試験委員は決められたタイトルに対する小論文を採点します。タイトルは与えられた通り正確に用い、決して変えないこと。

論文の長さは、1200 語～1600 語でなければなりません。

- 1 ある人々にとっては、全ての知識の形の中で、科学は最も優れたものである。この観点は正当か、もしくは、科学や知識への誤解を伴っているか。
- 2 「偽りの衰退を経て、どうにか真実が残るのは、最後のことなのだから。」(John Lukacs) 異なる知識の領域や、あなた自身の経験で、これはどの程度当てはまるのか？
- 3 「他の全ての知る方法 (Ways of Knowing) は言語によって支配されている。」この言葉は何を意味しているのか。そしてこの言葉は、概念・感情・理性・言語の間の関係の正しい描写だとあなたは思うか。
- 4 知識の一つの定義は、確固たる証拠に基づいた正確な考えである。何が証拠を十分「確固たる」ものとし、いかにその限度が定められ得るのか。
- 5 「正しい行いをするには、正しいことを知ることから始まる。」責任ある行動は、正しく、批判的な考え方にどのようにかかっているか。
- 6 「私は間違いないと確信している」と「それは間違いはない」との違いはなにか、また、知識を正しいものと証明するのに、いかなる場合も強い信念があれば十分なのか。
- 7 どの程度、知覚の主観的性質は、芸術家には利点と見なされ、一方科学者には克服されるべき障害と見なされるであろうか。
- 8 証拠を科学的に分析する能力、又は、創造的なイマジネーションを用いて証拠の解釈を展開する能力：歴史学者のより重要な資質はどちらか。
- 9 「全ての倫理的意見は相対的なものである。」この意見を主張することの正しさ—そしてこの意見を主張することの意味—を検討することにより、あなたはこれに賛成か反対かを決めなさい。
- 10 数学および他の知識の領域 (Areas of Knowledge) における知識は、同じ程度に、そして同じように、文化に左右されるか。

TOK 小論文は次の A～F の 6 つの評価基準に照らして評価される。各基準で最高レベルの内容であれば 40 点 (40 ポイント) を獲得する。表 1 は 6 つの評価基準とそれぞれの達成度を一覧にした TOK 小論文外部評価基準である。

表1 TOK小論文外部評価基準

基準A 知識に関する点：知識に関する諸問題は、認められ、理解され、主張されているか。						
	10	8	6	4	2	0
認識と理解	卓越	優秀	充分	乏しい	とても乏しい	なし
TOKと筆者との関連性	一貫して関連し、目的性がある。生徒の意見を反映している。	一貫して関連している。生徒の意見を反映している。	概ね関連している。大部分は意見を反映している。	概して関連がない。	関連がない。	関連がない。
基準B 分析の質：知識の問題／反対意見は批評的かつ思慮深く扱われているか。						
	10	8	6	4	2	0
批評的意見と洞察	卓越した批評的意見と洞察。	優れた批評的意見と洞察。	充分な批評的意見。いくらかの洞察。	低レベルの批評的意見。	非常に低いレベルの批評的意見。	なし。
反対意見の認識	反対意見が示され、徹底的に評価されている。	反対意見が示され、評価されている。	反対意見が示されている。	なし。	なし。	なし。
論法	詳細で効果的な、説得力のある論考。	詳細で、説得力のある論考。	適切に詳述され、概ね説得力がある。	表面的であるか、説得力に欠ける論考	完全に表面的であるか、説得力に欠ける論考。	なし。
基準C 広がりに関連性：異なった知識の方法および異なった知識の領域の認識とつながりは。						
	5	4	3	2	1	0
知識の方法／領域の認識	卓越した認識。効果的なつながりおよび／または適切な比較。	優れた認識。適切なつながり、または比較。	充分な認識。適切なつながり、または比較。	認識に乏しい。つながりや比較が必ずしも適切とは限らない。	非常に認識に乏しい。つながりや比較が不適切。	認識がまったくない。
基準D 構成、明確性、論理的一貫性：(ここでは言語能力は問わない)						
	5	4	3	2	1	0
構成	卓越した構成。簡潔な導入と効果的な結論。	優れた構成。簡潔な導入と明確な結論。	充分な構成。主要な論点は伝わる。	構成が稚拙。	構成が非常に稚拙。	構成がなされていない。
明確性と論理的一貫性	明確で論理的に一貫している。概念と特質の明確な定義が簡潔になされている。	明確で論理的に一貫している。概念と特質の明確な定義がなされている。	適切な明確性および論理的一貫性。	明確性および論理的一貫性に乏しい。	明確性および論理的一貫性に大変乏しい。	不明確で論理的一貫性に欠ける。課題との関連性がない。
基準E 例証：小論文は、様々な資料から引用された適切な例証の裏付けがあるか。						
	5	4	3	2	1	0
質	一貫して簡潔、適切、効果的。	一貫して適切。	概ね適切。	ほとんど適切ではない。	不適切。	関連がない。
範囲	広範な種類。自身の経験。高度な文化的多様性。	多種の例証。自身の経験。ある程度の文化的多様性。	充分な多種の例証。	限られた種類の例証。	種類に乏しい例証。	関連した例証がない。
基準F 事実の正確性と信頼性：「事実」は正確か。資料は正しく引用されているか。						
	5	4	3	2	1	0
事実の正確さ	卓越している。	優れている。	充分である。	低レベル。	非常に低いレベル。	なし。
資料	信頼できる。承認された取り決めに則って一貫して正しく引用されている。	優れている。承認された取り決めに則って正しく引用されている。	概ね信頼できる。大部分は承認された取り決めに則って正しく引用されている。	ほとんどが信頼性に欠ける。承認された取り決めに則って正しく引用されていない。	信頼性に欠け、そのうえ承認された取り決めに則って正しく引用されていない。	どの資料も信頼性に欠ける。もしくは正しく引用されていない。

内部評価は、生徒の口頭発表と自己評価レポートを指導教官が評価することによってなされる。TOK ガイドブックに内部評価の方法や基準が明確に示されている。A～D の4つの評価基準に照らして評価され、各基準で最高レベルに到達していれば20点になる。表2は4つの評価基準とそれぞれの達成度を一覧にした TOK 小論文内部評価基準である。

表2 TOK 小論文内部評価基準

基準 A 知識に関する点：知識に関する諸問題は、認められ、理解されているか。						
	5	4	3	2	1	0
認識と理解	卓越	優秀	充分	乏しい	とても乏しい	なし
TOK との理念の関連性	一貫して関連している。	一貫して関連している。	概ね関連している。	概して関連がない。	関連がない。	関連がない。
創造力と独創性	双方とも高いレベル。	どちらも認められる。	いくらかの創造力。	なし。	なし。	なし。
基準 B 分析の質：知識の問題／異なる観点は批評的かつ思慮深く扱われているか。						
	5	4	3	2	1	0
批評的意見と洞察のレベル	卓越した批評的意見と洞察。	優れた批評的意見と洞察。	十分な批評的意見。いくらかの洞察。	低レベルの批評的意見。	非常に低いレベルの批評的意見。	なし。
問題との取り組み	問題と徹底的に取り組んでいる。	問題とある程度深く取り組んでいる。	適切に取り組んでいる。	概ね表面的。取り組みは不適切。	まったく皮相的。取り組みは不適切。	なし。
多様な観点の識別	明確に識別され、完全に認識されている。	ある程度識別され、認識されている。	いくらかの識別と認識。	ほとんど識別されていない。	ほとんど意識されていない。	まったく意識されていない。
論法の論理的厳密さ	論理的説得力がある。適切な正当化。	論理的説得力がある。一貫した正当化。	概ね説得力があり、正当化されている。	あまり説得力が無い。主要点が正当化されていない。	主張が無いか、もしくはまったく根拠に欠け正当化されていない。	なし。
主要点の含みに対する関心	綿密で考え抜かれている。	考え抜かれている。	いくらかの意見がある。	なし。	なし。	なし。
基準 C 作品における知識：発表は、現代の問題に TOK の知識をどの程度まで応用しているか。						
	5	4	3	2	1	0
現代の問題への応用	卓越。抽象的原則の明確で効果的な応用。	優秀。抽象的原則の明確な応用。	充分。抽象的原則が問題に関連している。	乏しい。抽象的原則を問題に関連づける努力がいくらか見られる。	非常に乏しい。抽象的原則を関連づける努力がほとんど無い。	問題と TOK との関連がまったく無い。
基準 D 明確性：発表は明確で論理的に一貫しているか。(ここでは語学能力は問わない)						
	5	4	3	2	1	0
明確性と論理的一貫性	卓越	優秀	充分	乏しい	とても乏しい	なし

2 TOK の得点 (ポイント) とクラス

TOK 小論文に対する外部評価 (最高点 40 点) とその小論文についての口頭発表等の内部評価 (最高点は 20 点) との合計、0 から 60 点までの間で決定された総合点を用いて、TOK 小論文が以下のどのクラスに属するかが決められる。

クラスは次のように分類されている：

A 優秀 B 良 C 可 D 普通 E 初歩的

TOK 小論文は外部の評価を受けるために IB が指定した試験委員 (Examiner) のもとへ期日までに届ける必要がある。例えば、5月に IB の試験を受ける北半球の IB 校であれば、2ヶ月ほど前の3月15日までに届ける決まりである。内部評価の提出物に関しては、生徒の TOK プレゼンテーション (口頭発表) の成績と予想評点を英国のカーディフにある IBCA (IB カリキュラム評価・学術部門) に送付することになっている。5月の試験のおよそ3週間前の4月10日が必着である (表3を参照)。

表3 送付先及び到着日

	試験実施期間	送付先	到着日
志願者の TOK 小論文の提出	2006年5月/ 2006年11月	試験委員	2006年3月15日/ 2006年9月15日
志願者の TOK プレゼンテーションの得点と予想評点の提出	2006年5月/ 2006年11月	IBCA	2006年4月10日/ 2006年10月10日

なお、TOK で得たクラス (A~E) は、課題論文で得たクラス (A~E) と総合して、知識の理論と課題論文に関して付与されるディプロマ・ポイントが決定される (最大で3ポイント)。詳細は第2章の「ディプロマ・ポイントの付与」を参照。

3 評価の詳細と評価基準

以下、TOK ガイドブックから「評価の詳細 (Assessment Details)」と「評価基準 (Assessment Criteria)」について翻訳して紹介する。

評価の詳細
<p>パート1 指定された課題について的小論文 (1200 - 1600 語)</p> <p>概略</p> <p>各受験者は、IBO が試験ごとに指定する 10 の課題のうち一つを選んで小論文 (essay) を作成し、外部評価に提出しなければならない。</p> <p>課題は、知識に関する包括的追究を伴い、本質的に学際的なものである。これらの課題は、知識の理論 (TOK) のプログラムの一つ以上の部分や特定の科目に関して、又は学校内外で知識について得られた意見に関して対応する。</p> <p>課題は抽象的に論じられるものではない。常に主張は正しいことが証明され、当を得たものであり、可能ならば、反対意見と独自の例が議論を明確にするために言及されていること。</p> <p>選択した課題は、いかなる変更もなく、与えられたとおりに正確に用いられなくてはならない。指定された課題の見地から採点する評価者によって、課題を修正した小論文は的外れとみなされるため、受験者の得点はとても低いか零点となることもある。</p> <p>小論文はきちんと提出され、はっきり読み易く、適切な場合、参考資料と文献目録を付けなければ</p>

ならない。

自認と参照資料

受験者は、評価のために提出された作品に、他者の作品や思考、アイデアを取り入れた場合、それに関して完全かつ詳細に認めること。さらに、印刷物又は電子媒体どちらの形でも、他の受験者の作品として評価に提出される可能性を知りながら、当該受験者に自分の作品を与えることは絶対にしないこと。標準的な形式に基づいて一貫して用いられている承認された参照事項の書式を、引用の出典を認めるに際して必ず使用すること。

文献目録

TOKの小論文は研究報告ではなく、特定の資料を用いた場合には、文献目録に認められなければならない。文献目録は（本・ジャーナル・雑誌・オンラインなど）受験者が参考にしたものだけを載せなければならない。

適切であるためには、文献目録は以下のことを特定しなくてはならない：

- ・ 著者名（共著の場合は複数）、題名、出版日、出版地
- ・ 出版社名、若しくは URL (<http://...>)
- ・ 資料を集める標準的手段の一つとして、ホームページにアクセスした日

小論文の長さ

指定された課題の小論文は、1,200～1,600字の長さでなければならない。文字数には、以下が含まれる：

- ・ 小論文の主要部分
- ・ 引用文

以下は文字数に含まれない：

- ・ 謝辞
- ・ 参考資料（例えば、脚注・巻末の注）
- ・ 地図、グラフ、図、注釈のついたイラストや表
- ・ 文献目録

受験者は文字数の表示を求められる。

教師の役割

受験者の指定された課題の小論文に関連して、4つの主要な責任が教師に求められる。

- ・ 受験者が小論文を書くのを力づけ、励ますこと
- ・ 受験者に必要な技量について助言し、指導すること
- ・ 小論文が確実に受験者自身の作品であること
- ・ カバー・シートの作成

指定された課題を受験者と検討することは推奨されるが、最終的な課題の選択と、自分の着想の展開は受験者にまかせなければならない。

下書きができた場合、教師は読んでコメントできる。しかし、受験者のために手を加えることは許

されない。間違いを修正し、改善することは受験者の責任である。

真正さ

教師は確実に受験者自身の小論文を作品として提出させなければならない。疑いが生じたならば、提出小論文の内容について受験者と討議し、さらに以下の事項一つ以上による精査をもって真正さを調べなければならない。

- ・ 受験者の最初の提案とアウトライン
- ・ 小論文の最初の下書き
- ・ 適切な場合、受験者の参考資料と文献目録
- ・ 相違が明確に示されるものである文体

小論文提出時に宣言書にサインを求められることを、受験者に明確にしておかなければならない。これは、作品が自分自身のものであることを裏付けるためである。さらに、教師も宣言書の主張の証明を求められることを、受験者に承知させておかなければならない（手続き便覧を参照のこと）。

パート2 発表

概略

- ・ 生徒は、一人以上の個人と／もしくは小グループを作り、授業の中で口頭発表を行い、自己評価レポートを作成しなければならない。
- ・ 口頭発表の題目は生徒が教師の承認を得て選ぶか、もしくは教師が与えてもよい。発表は、評価規準の必要条件に合致可能であれば、TOKに関連するどんな題目でもよい。しかしながら、「指定された課題」は、発表の題目に決して使わないこと。
- ・ 発表は、講義やスキット、シミュレーション、ゲーム、脚色した音読（*dramatized reading*）、インタビュー、ディベートといった、多様な形態がとれる。しかしながら、いかなる状況でも、小論文をクラスで単に音読することを発表とは認められない。
- ・ 生徒が1つ以上の発表をした場合、評価のためには最も良いもの（もしくはその生徒が参加したグループ発表の最も良いもの）を選ぶこと。
- ・ 生徒がグループのメンバーとして発表を行っても、教師は、得点は個人に帰するものとみなすこと。
- ・ 生徒は自己評価報告を書かなければならない。書式は「便覧」に載っている関連のものを用い、発表の簡潔な描写と、以下のような質問に対する短い答えを含むこと。
 - － どのようにその題目は知識の課題を与えましたか。例えば、真実に達したり、証拠を集めたりといったような。
 - － 発表の主な目的は何でしたか。簡潔に説明しなさい。
 - － 課題の発表にはどのような方法を使用しましたか。それを選んだ理由は。
 - － 発表はよくまとまり、考えさせ、注意を引きつけるものでしたか。
 - － 発表の良かったところ、悪かったところはどこですか。もしまたするならば、もっと良くするために、なんでもよいですが、どう変えますか。

- ・ 各発表が行われる日は、生徒が題目を選び、準備する時間が充分取れるように、かなり前もって伝えておくこと。
- ・ 最も興味のある題目を、生徒が指定すること。変化に富み、プログラム全体をカバーさせるために、各題目を取り扱うのは1回のみ。
- ・ 教師は生徒を促したり、きっかけの質問を出したりすること。
- ・ 発表後にディスカッションの時間を取っておくこと。
- ・ クラス・ディスカッションの時間を除き、各発表は概ね 10 分間。関連する個人発表、及び相互に関連するグループ発表が推奨される。さらに、評価規準の適用に全生徒を含められるだけ十分な時間が取れること。
- ・ グループ発表が予定されている場合、全ての生徒が同じだけの時間話す必要はないが、全員が貢献し、積極的に関わることが望まれる。
- ・ 発表を準備する前に、「便覧」にある自己評価用紙を生徒に与えること。

発表題目例

効果的なことが判明している例を以下に挙げる。これらは、この個所において適切であると思われる題目の類型について参考になるとともに、今日の問題や出来事が知識の問題と関連すると思われる事柄を例示して、深く考えることを促す機会を与えることを意図している。教師がこれらの例を全て、または、どれかを使わなければならないわけではない。

- ・ 自然科学と社会的責任の関係は何か。最近の科学的又は技術的發展を一つ焦点に選び、その倫理的含意を考察せよ。そのような知識の發展を導いたり、制限したりする道徳的責任は誰が負い、その責任が正当とされる根拠は何か。
- ・ 人文科学は、どのようにグループや民族間にしばしば起こる誤解や軋轢の多くを理解する助けになるのか。複数グループ（例えば、民族的、人種的、社会経済的、又は宗教的グループ）のインタラクションを含む今日の問題を挙げ、心理学や人類学、経済学によって得られた知識を考察せよ。どのようにそれらの学問が、問題の原因や特性を解明できるのか。さらに、考えられる解決とどのように関連するのだろうか。私たちが、その問題をもっと理解できる学問は他にあるか。
- ・ 歴史は真実を語っているか。歴史上の出来事を一つ選び、それを使って歴史的眞実の本質と複雑さを探求せよ。この過去の探求が、現在を理解するのにどのように関わっているのか。それによって浮かび上がる今日の出来事があるか。
- ・ 私たちは「良い」行動や「道徳的」行動をしていると、どうして分かるのか。倫理的問題を何か選び、2 つ以上の考え得る倫理的観点から検討せよ。目的は、どちらかが正しいかを証明するためではなく、行動が道徳的に正しいと主張している相異なる見地を見出すことにある。
- ・ 宗教的信条は何に帰するのか。特定の信条を一つ選び（例えば、世界の創造、又は死後の生の性質）、無神論と最低 2 つの主要な宗教の観点から考察せよ。それぞれの場合に、信じているものを納得させる正当な根拠を挙げること。あなたの目標は、ある宗教が正しいか間違っているか決めることではなく、信条及び正当とする根拠を探求することである。どの程度まで、宗教的信条は「知識」に分類されるのか。信条を否定することで、知識の威信の価値や重要性は低下するのだろうか。

- あなたの地域で、概念や価値の対立を生み出す興味深い問題（例えば、ドイツの食物遺伝子操作、カナダの先住権問題、チリの水力発電ダム建設、ブラジルのアマゾン森林破壊、又はオランダの麻薬政策）を見つけなさい。対立している少なくとも2つの側がその問題に関して提示している事実や主張、統計データ、映像を検討しなさい。その過程で、相違する推測や正当化、価値、感情をみつけなさい。どこまでが説得力のある議論だと思うか。
- 概念や価値の対立を生み出す地球規模の重要な問題（例えば、エイズや人種的大量虐殺、難民、人権侵害、砂漠化、公害と地球温暖化、地球資源の不平等配分）を見つけなさい。対立している少なくとも2つの側がその問題に関して提示している事実や主張、統計データ、映像を検討しなさい。その過程で、相違する推測や正当化、価値、感情を見つけなさい。問題の真相にどこまで迫れるだろうか。
- 知識の新しい発展を一つ選び、それが発達してきた学問分野に与えた影響と、倫理的な刺激、もしくは、他の知識領域に与えた刺激を考察せよ。例えば、科学や技術ならば、ヒューマン・ゲノム・プロジェクトやクローン、原子力、IT革命などに焦点を当てても良い。芸術ならば、CGアートや電子音楽が考えられる。
- 政治や広告に時折見られるような、社会を意図的に欺くことは正当といえるか。国際的誤報の事例や、科学や芸術、歴史など他の知識領域での誤った主張の事例を考察せよ。

評価基準

評価規準と指標の使用

IBO の評価方法は、基準に拠った絶対評価である。指定された課題による小論文と TOK 発表の評価方法は、他の受験者の成績との兼ね合いではなく、決められた評価規準に照らして行われる。

- 小論文の評価規準は A から F の 6 段階、発表は A から D の 4 段階である。各評価規準には、肯定的な達成に重点を置いた、達成レベルの指標が規定されている。しかし、低いレベル（最低は零点）では、達成できなかった点も指標に含まれることがある。
- 受験者が得た達成レベルを最も適切に表せる指標を、規準ごとに見つけることが目標となる。それゆえ、その手順は、ある種の近似値を求めるものとなる。ある一つの基準に照らすと、高い達成レベルの指標と低い指標に相当する欠点を併せ持っていることがある。最も近い指標を見いだすには、熟練した判断が必要である。
- 評価のために作品を精査するには、各規準の指標を 0 のレベルから始めて、作品に評価が当てはまらなくなるまで達成レベルを上げていくこと。その結果、その作品には一つ前の達成レベルの指標が最も当てはまることになるので、それを記録すること。
- 整数のみを使い、分数や小数点は認められない。
- 最高点は必ずしも完全無欠を意味せず、評価者及び教師は、評価される作品に適した指標であれば、零点も含め、極端な指標を使うのをためらわないこと。
- トータルを出すために最終的に合計されはするが、指標は点数やパーセンテージと見なしてはならない。その他数値的な関連があると推定してはならない。例えば、レベル 4 の成果は必ずしもレベル 2 の 2 倍優れているというわけではない。
- ある基準に関して優れた達成レベルを示した受験者が、必ずしも他の基準に関して同様のレベ

ルを達成しているとは限らない。受験者の全体的評価が、ある特定の点数配分を見せると推定してはならない。

パート1 評価原理

指定された課題小論文は6つの基準に照らして評価される：

- A 知識に関する点 (0-10)
- B 分析の質 (0-10)
- C 広がりに関連性 (0-5)
- D 構成、明確性、論理的一貫性 (0-5)
- E 例証 (0-5)
- F 事実の正確性と信頼性 (0-5)

TOKの小論文の評価は、量的な測定というよりは、質的判断を伴う：ある程度の曖昧さと柔軟性は既定のもので、最適なレベルは、判断することで、決定されなければならない。

小論文は必須のディテールのレベルに当てはめるには変化に富みすぎ、小論文の全体は個々の部分の総計よりはるかに大きいものである、という2つの理由から、高く評価される特質を一つ残らず明らかにするという評価方法は、適切とはいえない。そのような方法は複雑で手に余り、曖昧さのレベルを増すであろう。

一方、ホリスティックなアプローチ、例えば、40 (A-Fの合計点のことか。)の中で一つの「印象的」だけの点を与えるという方法は、主観的に過ぎ、評価にむらが出ることになる。

評価規準は、教師と受験者に小論文の賞賛に値する重要な特徴を示し、評価者がその賞賛を適切かつ一貫して与えるための手引きをすることを意図している。基準の数は、小論文の異なる特徴の数により決定されるが、それらの特徴は(完全に個別のものにはならないことを承知の上で)比較的独立して識別され、分類され、判断され得る。各基準は、明白に他のものと異なっていると同時に、内部的には一貫した判断を伴う。

各基準が伴う達成レベルの指標は、それぞれ個別ではあるが関連した作品の特徴に対応したものである。これらの特徴は、"and" もしくは "or" で繋がっていることがある。しかしながら、評価者は「最も当てはまる」判断を下すよう求められる。小論文のレベルの指標は、その作品に最も適切なものが与えられるのである。当該小論文の文脈において、レベルの指標には様々な特徴があり—小論文によっては、いくつかの特徴が不適切かあまり重要ではないものもある—それらの重要度には評価者の熟練した判断が求められる。

パート1 外部評価指標

A 知識に関する点 (10点)

指定された課題に含まれた知識に関する諸問題は、認められ、理解され、小論文全体で顕著に主張されているか。

「知識に関する問題 (*problems of knowledge*)」というフレーズは、不確実性の含みや、知識もしくは知識の限界へのアプローチの偏り、及び、異なる知識領域に適した証明や正当化の方法に注目さ

せるものである。

適切な場合は、評価者は中間の点数 (1,3,5,7,9) をつけてもよい。

達成レベル

受験者は：

- 0 指定された課題に含まれた、知識に関する諸問題に対する認識がない。
- 2 指定された課題に含まれた、知識に関する諸問題の認識及び理解にとっても乏しい。アイデアの展開は指定された課題と関連がない。
- 4 指定された課題に含まれた、知識に関する諸問題の認識及び理解に乏しい。アイデアの展開は概して指定された課題と関連がない。
- 6 指定された課題に含まれた、知識に関する諸問題を認識及び理解が充分ある。アイデアの展開は概ね指定された課題に関連し、バランスよく調べられ、ほとんどの部分で受験者自身の意見を反映している。
- 8 指定された課題に含まれた、知識に関する諸問題に対する認識及び理解が優れている。アイデアの展開は指定された課題に特に一貫して関連しており、概ね TOK にも関連している。バランスよく調べられ、受験者の意見を反映している。
- 10 指定された課題に含まれた、知識に関する諸問題に対する認識及び理解が卓越している。アイデアの展開は特に指定された課題に一貫して関連しており、概ね TOK にも関連している。バランスよく、目的をもって調べられ、受験者の意見を反映している。

B 分析の質 (10点)

分析、並びに反対意見の取り扱い、指定された課題に含まれた、知識に関する諸問題を述べる際に、批評的意見と洞察を示しているか。

適切な場合は、評価者は中間の点数 (1,3,5,7,9) をつけてもよい。

達成レベル

受験者の論証は：

- 0 指定された課題に含まれた、知識に関する諸問題にまったく関係がない。
- 2 非常に低いレベルの批評的意見。論考が完全に表面的であるか、あるいは論法が論理的に説得力がない。主要な論点のいくつかは評価されず、それらの関連も全く認められない。
- 4 低いレベルの批評的意見。論考が概ね表面的であるか、あるいは論法が論理的に説得力がない。主要な論点のいくつかは論証され、評価されているが、それらの関連がほとんど見られない。
- 6 十分なレベルの批評的意見と洞察力。論考は適切に詳述され、論法は概ね論理的説得力がある。主要点は論証され、評価され、関連性が認められる。反対意見が示されている。
- 8 優れたレベルの批評的意見と洞察力。論考は詳述され、論法は論理的説得力がある。主要点は論証され、評価され、関連性が認められる。反対意見が示され、評価されている。
- 10 卓越したレベルの批評的意見と洞察力。論考は詳述され、論法は論理的説得力がある。主要点は適切に論証・評価され、関連性が適切に認められる。反対意見が示され、徹底的に評価されている。

C 広がりに関連性 (5点)

小論文は、異なった知の方法、及び異なった知識の領域の認識を表しているか。さらに、それらがどのように関連付けられ得るかの認識を示しているか。

「知の方法」及び「知識の領域」という用語は、TOKの構造図の要素に対するものである。構造図に載っていない要素でも、同様に関連があり適切であれば、言及を認めないというものではない。

ここでの「横断 (across)」という語は、構造図の同じ放射型セクションにある要素を横断した関連性と比較を意味している。「またがる (between)」は、構造図の異なる放射型セクションにある要素の間の関連性と比較を意味している。

達成レベル

受験者の論証は：

- 0 異なる知の方法、及び異なる知識の領域の認識が全くない。
- 1 異なる知の方法、及び異なる知識の領域の認識レベルが非常に低い。関連づけることは試みられているが、不適切である。
- 2 異なる知の方法、及び異なる知識の領域の認識レベルが低い。幾つかの関連は横断して、あるいはまたがって見られるが、必ずしも全て適切ではない。
- 3 異なる知の方法、及び異なる知識の領域の認識レベルが充分である。適切な関連性が横断して、あるいはまたがって見られる。
- 4 異なる知の方法、及び異なる知識の領域の認識レベルが優れている。適切な関連性が横断しても、またがっても見られる。
- 5 異なる知の方法、及び異なる知識の領域の認識レベルが卓越している。効果的な関連性が横断しても、またがっても見られる。

D 構成、明確性、論理的一貫性 (5点)

小論文は、体系化された構成を持ち、明確で、論理的に一貫しているか。

小論文が、指定された1,200語以下、あるいは1,600語以上の場合、この規準においては零点となる。

この規準は言語能力を評価するものではない。ここでの意図は、むしろ、主要なアイデアが、どの程度適切に構成された形で明確かつ首尾一貫して表されているかを測ることである。

達成レベル

小論文は：

- 0 構成がなされておらず、不明確で、論理的一貫性あるいは指定された課題との関連性に欠ける。
- 1 構成・明確性・論理的一貫性に大変乏しい。
- 2 構成・明確性・論理的一貫性に乏しい。
- 3 主要な点を表すに十分な構成、適切な明確性かつ論理的一貫性を持つ。
- 4 簡明な導入部を伴った、優れた構成と、結論へと導く明確で論理的に一貫性した主張の展開がある。概念と特質の明確な定義がなされている。
- 5 簡明な導入部を伴った、卓越した構成と、効果的な結論へと導く明確で論理的に一貫した主張の展開がある。概念と特質の明確な定義が簡潔になされている。

E 例証 (5点)

小論文は、様々な資料から引用された適切な例証の裏付けがあるか。

達成レベル

受験者の用いている例証は：

- 0 指定された課題に関連していない。
- 1 とても乏しく（あるいは不適切で）、引用資料の範囲は狭く、小論文の主要点を裏付けていない。
- 2 主張の主要点を裏付けるには乏しく（ほとんど適切ではなく）、引用資料の種類は限られている。
- 3 充分で（概ね適切で）、様々な種類の資料から引用されており、主張の主要点を裏付けている。
- 4 優れており（一貫して適切で）、受験者自身の経験も含まれた様々な種類の資料から引用され、主張の主要点を裏付けている。例証は、ある程度の文化的多様性を表している。
- 5 卓越しており（一貫して適切かつ効果的で）、受験者自身の経験も含まれた広範な種類の資料から引用され、主張の主要点を簡明に示している。例証は高度な文化的多様性を表している。

F 事実の正確性と信頼性（5点）

主張は事実上正確で、資料が使われている場合、信頼できるもので、正しく引用されているか。

評価目的としては、「事実」の概念は定義や専門用語を包含しない。

主張を裏付けるために事実を必要としない小論文の場合、評価者は、規準 C と E の平均を規準 F に対して与えること。主張を裏付けるために事実が必要な小論文で、事実が省かれている場合は、零点とする。

達成レベル

小論文の主張の論証は：

- 0 事実上の正確さに欠け（あるいは指定された課題との関連が無く）、あるいは資料（使われた場合）が信頼性にかけるか不正確に引用されている（もしくは全く引用されていない）。
- 1 事実上の正確性のレベルがとても低く、資料は信頼性に欠けるか、承認された取り決めに則って正しく引用されていない。
- 2 事実上の正確性のレベルが低く、資料はほとんどが信頼性に欠けるか、承認された取り決めに則って正しく引用されていない。
- 3 事実上の正確性のレベルが充分で、大部分が承認された取り決めに則って正しく引用されている。
- 4 事実上の正確性のレベルが優れており、資料は信頼でき、承認された取り決めに則って正しく引用されている。
- 5 事実上の正確性のレベルが卓越しており、資料は信頼でき、承認された取り決めに則って一貫して正しく引用されている。

パート2 内部評価指標

A 知識に関する点（5点）

与えられた題目に適した知識に関する諸問題が認められ、理解されているか。また、受験者のアイデアは、適切で創意に富んだ方法で展開されているか。

「知識に関する問題 (problems of knowledge)」というフレーズは、不確実性の含みや、知識もしくは知識の限界へのアプローチの偏り、及び、異なる知識領域に適した証明や正当化の方法に明白に注目させるものである。

達成レベル

受験者は：

- 0 与えられた題目に適した知識の諸問題を認識していない。
- 1 与えられた題目に適した知識の諸問題の認識及び理解にとても乏しい。発表は TOK との関連がない。
- 2 与えられた題目に適した知識の諸問題の認識及び理解に乏しく、アイデアの展開は概して TOK と関連がない。
- 3 与えられた題目に適した知識の諸問題の認識及び理解が充分あり、アイデアの展開は概ね TOK と関連している。発表はいくらかの創意をうかがわせる。
- 4 与えられた題目に適した知識の諸問題の認識及び理解が優れており、アイデアの展開は一貫して TOK と関連している。発表は創意に富み、受験者自身のアイデアを反映している。
- 5 与えられた題目に適した知識の諸問題の認識及び理解が卓越しており、アイデアの展開は一貫して TOK と関連している。発表はきわめて創意に富み、受験者自身の独創的思考を反映している。

B 分析の質 (5点)

題目の分析と、独創的な観点の扱いは、知識に関する諸問題を述べる際に、批評的意見と洞察を示しているか。

達成レベル

受験者の表現は：

- 0 与えられた題目に適した知識に関する諸問題に全く関係がない。
- 1 非常に低いレベルの批評的意見。発表は完全に表面的であるか、あるいは問題に適切に取り組んでいない。個人あるいは他者の観点に対する自覚も見られない。主張が全くなされていないか、論理的説得力に欠け、主要点が正当化されていない。
- 2 低いレベルの批評的意見。発表は概ね表面的であるか、あるいは問題に適切に取り組んでいない。個人あるいは他者の観点に対する認識も見られない。主張にあまり論理的説得力が見られず、主要点が正当化されていない。
- 3 十分なレベルの批評的意見とある程度の洞察。発表は、時間的制限を考慮しても、適切に問題と取り組んでいる。関連のある個人的観点がいくらか認識されており、さらに、他者の観点が認められる。概ね、主張は論理的説得力があり、主要点は正当化され、それらの含みについて説明がなされている。
- 4 優れたレベルの批評的意見と洞察が題目の分析になされており、独創的な観点が扱われている。発表は、時間的制限を考慮しても、問題との取り組みにある程度の深さが見られる。関連のある個人的な観点が認識されており、さらに他者のものも、ある程度認められている。主張は論理的説得力があり、主要点は評価され、正当化されており、それらの含みについての考え抜かれた説明がなされている。

- 5 卓越したレベルの批評的意見と洞察が題目の分析になされており、独創的な観点で扱われている。発表は、時間的制限を考慮しても、徹底的に問題と取り組んでいる。関連のある個人的な観点、価値観、心理的傾向が明確に認識されており、さらに他者のそれらも、きちんと認められている。主張は論理的説得力があり、要点は評価され、正当化は的を射ており、それらの含みについての綿密に考え抜かれた説明がなされている。

C 作品における知識（5点）

発表は、現代の問題に TOK の思考技量を応用することを、どの程度まで表現できているか。

「TOK の思考技量」という用語は、知識の諸問題を確認し、主張と反対意見を分析・評価し、学際的な関連付けをし、異なる基本的価値を認識することに留意させるものである。これらは、規準 B-分析の質-のレベル 5 に表されている技量に類似している。

達成レベル

受験者の発表は：

- 0 今日の問題への TOK の思考技量の応用がない。
- 1 今日の問題への TOK の思考技量の応用がとても稚拙である。TOK プログラムの抽象的要素を今日の問題と関連づける努力がほとんどない。
- 2 今日の問題への TOK の思考技量の応用が稚拙である。TOK プログラムの抽象的要素を今日の問題と関連づける努力がいくらか見られる。
- 3 今日の問題への TOK の思考技量の応用が充分である。発表は、TOK プログラムの抽象的要素を、具体的な今日の問題と関連づけている。
- 4 今日の問題への TOK の思考技量の応用が優れている。発表は、TOK プログラムの抽象的要素を、具体的な今日の問題と明白に関連づけている。
- 5 今日の問題への TOK の思考技量の応用が卓越している。発表は、TOK プログラムの抽象的要素を、具体的な今日の問題と明白かつ効果的に関連づけている。

D 明確性（5点）

発表は、明確で、論理的に一貫しているか。

この規準は言語能力を評価するものではない。ここでの意図は、むしろ、主要なアイデアが、どの程度明確かつ首尾一貫して表されているかを測ることである。

達成レベル

発表は：

- 0 明確さに欠け、一貫していない。
- 1 とても低いレベルの明確さと論理的一貫性。
- 2 低いレベルの明確さと論理的一貫性。
- 3 十分なレベルの明確さと論理的一貫性。
- 4 優れたレベルの明確さと論理的一貫性。
- 5 卓越したレベルの明確さと論理的一貫性。

第4章 創造性、活動、奉仕 (CAS)

「課題論文」と「知識の理論」に加えてIBプログラムを特徴づけるCASと呼ばれるもう一つの要件がある。CASはCreativity (創造性)、Action (活動)、Service (奉仕)の略称である。CASは教科の学習以外の活動において人生の重要性を理解させるためのものである。CAS活動を通じて、知識や関心を深めたり、他人と協力して作業する能力を開発したり、自己の才能を活かし他と共有する喜びを体験させ、バランスのとれた人間へと成長させたりすることを目指している。生徒は、2年間にわたり、創造性、活動、奉仕のそれぞれについて50時間ずつ(合計150時間)実施することになっている。

この章では、CASとはどのような目的を持って行われる活動であるか、CASのスムーズな実施、運営に欠かせないCASコーディネーターの役割と責任、そしてCASの評価の詳細などについて明らかにする。

1 CASの3つの要素と活動例

創造性、活動、奉仕の3つの要素のそれぞれがどのようなものであるかは、CASガイドブックに次のような説明がある。

創造性

CASのこの側面は、デザインにおける創造的思考や奉仕プロジェクトの実践など、通常のカリキュラムでは行うことのない芸術、その他の活動を、想像しうる限り幅広く網羅することを目指している。

この分野には、ダンスや演劇、音楽、芸術活動などが含まれる。生徒は特に新しい役割を担うことを中心に可能な限りあらゆるところでグループ活動に参加することになる。しかし、目標を設定しその進歩の過程を振り返り、再考するというCAS活動における要件が尊重されてはじめて、芸術学習への関わりが認められることになる。

活動

CASのこの分野には、遠征、個人または団体スポーツ、通常のカリキュラム以外の身体的活動への参加などがある。さらに創造的奉仕活動の実施に関わる身体的活動も含まれる。ここでいう活動とは、スポーツや身体を動かすさまざまな活動に参加することを意味する。例えば、遠征やキャンプ旅行、村に新鮮な水を引くための水道施設用の溝掘りといった活動がある。生徒は新しい役割を担いながらグループやチーム活動に参加するよう奨励されるが、目標を設定し生徒がその進歩の具合を再考していくというCAS活動における通常要件が満たされてはじめて、個人の関わりが認められることになる。

創造性にせよ活動にせよ奉仕という要素を取り入れることによりいずれも強化することができる。芸術及び身体的活動に参加するうちに、それが幼い子どもや在宅の高齢者、ストリートチルドレンの支援という発想に結びついてゆくかもしれない。

奉仕

奉仕プロジェクトや活動というのは同じディプロマ・プログラムの中でも生徒たちに最も変化をもたらす要素であり、グローバルな人間を形成・育成していく可能性をもっている。奉仕は社会の個人や団体との関係を樹立するような相互作用的な活動に関わる。社会とは学校や地域社会の場合もあるし、国や世界レベルで存在する場合もある（開発途上国の支援活動など）。奉仕活動には他者のために行動することばかりでなく、他者と共に行動し、彼らと本当の関わりを築いていくことも含まれる。従ってその関係は他者の尊厳や自己尊重意識を尊ぶ態度を示すものでなければならない。

CAS 活動の具体例を挙げると、表 1 のようなものがある。() 内に、これらの活動が創造性、活動、奉仕のどれに分類されるかを示している。なお、IBO の CAS ガイドブックには、これら以外の活動例もたくさん掲載されているので、後で翻訳して紹介する。

表 1 CAS の活動例

- ・泳げない児童への水泳指導（活動・奉仕）
- ・下級生にギター指導（創造性・奉仕）
- ・学校新聞の作成（創造性・奉仕）
- ・地域の学校における他の生徒との美術・音楽交流（創造性・奉仕）
- ・高齢者への物理的な支援（奉仕）
- ・児童の野外キャンプの組織化（活動・奉仕）
- ・海の流油汚染、くずや捨て荷の清掃（活動・奉仕）
- ・CAS のホームページを創作・運営（創造性・奉仕）

CAS の要素は 3 つあるが、それぞれが独立したものであると考えるべきではない。表 1 に示した例でもわかるように要素が絡み合っている場合の方が多い。それぞれの要素が相互に影響しあって CAS の豊かさが創造されるということが出来る。したがって、各要素についてきっちり 50 時間の学習時間を確保することにとらわれるのはあまり意味をなさない。時間の確保よりも重要なのは上記のガイドブックの説明にもあるように、目標を設定しその進歩の過程を振り返り、再考するという CAS 活動における要件を尊重することであることを強調しておきたい。

なお、CAS ガイドブックによると、自分の意図している行動が CAS として適切であるかどうかを判断する指針は次のことであるという。

- ・ この活動は自分にとって経験のない役割か
- ・ 今しようとしている仕事は本当に挑戦的か
- ・ これは他の人や私に本当に何かよい結果をもたらすのだろうか
- ・ これに関わることにより私は何を学ぼうとしているのか
- ・ この活動は他の人にどのように役立つことができるのだろうか
- ・ この活動で私は何に影響を与えることができるのか

2 CAS の評価

CAS の評価方法は、知識の理論 (TOK) や課題論文 (EE) の評価方法とは異なる。CAS には知識の理論や課題論文のように外部評価はないし、IBO は IB 証明書の中で生徒が行った CAS 活動を正式に認めることはしていない。つまり、学校の教師や指導者などによる評価や生徒による自己評価などの評価はなされるが、知識の理論や課題論文のように成績をクラス (A-E) に分けポイントが与えられることはない。

CAS についての生徒による評価は、①活動や取り組みの記録、②自己評価、③最終自己評価を伴う最終まとめ報告書、からなる。学校による評価は、①監督者の評価 (監督した活動や取り組みに対するコメントを含む)、②CAS コーディネーターの評価 (CAS 活動中に与えた指導も含む) である。

知識の理論や課題論文の評価と CAS の評価のもう一つの違いは、CAS の評価には IBO の地域事務所が大きくかかわっていることである。日本の場合はシンガポールにある IBAP (アジア・太平洋地域事務所) が CAS 活動の指導助言や監督を行っている。CAS 活動はポイントにはならないものの、教育上の観点から IBO では 3 つの要件 (DP のコア) の一つとして位置づけている。CAS 活動がされなかったり、CAS 活動の時数が不足していた場合には、教科や他の要件を満たしていたとしてもディプロマ資格は与えられないことに CAS 重視の考えを見ることができる。

IB 地域事務所では、毎年、いくつかの学校からディプロマ候補生をランダムに各 3 名選び、彼らの CAS 活動のすべての記録 (自己評価記録や CAS の監督者 (supervisor) が書いたそれぞれの候補生についての評価レポートの概要を含めて) を提出することを求めている。CAS 活動を正しく実施しているかどうかを監視するために、IB 地域事務所長または委任者が学校を訪問することもある。したがって、学校では CAS の記録を保管し、要求があればいつでも提出できるようにしておかなければならない。

なお、CAS 活動の報告書等は地域事務所に送付し、5 月に IB 試験を受ける学校であれば 5 月 1 日までに届ける必要がある (表 1 を参照)。

表 1 送付先及び到着日

	試験実施期間	送付先	到着日
新規加盟校のみ： CAS プログラム・質問書の提出	2007 年 5 月/ 2007 年 11 月	地域事務所	2006 年 1 月 31 日/ 2006 年 7 月 31 日
CAS プログラム・終了書式の提出	2006 年 5 月/ 2006 年 11 月	地域事務所	2006 年 5 月 1 日/ 2006 年 11 月 1 日

3 CASの詳細

以下、CAS ガイドブック (IB Diploma Programme Guide: Creativity, Action, Service, August 2001) から「CAS の目標と目的」、「校長及び CAS コーディネーターの役割と責任」、「CAS の評価の詳細」、「優れた実践例」について翻訳し紹介する。

CAS の目標と目的

目標

CAS 要件の目指すところは、生徒の以下の能力を養うことである。

- 人間の心や精神の可能性を高く評価する力
- 知識、技術、理解力
- 世界中の人道的問題を認識する力
- 教育が生涯にわたる倫理的な責任感を植え付けるという認識
- 探求する意思と発見する喜び
- 個人的、また他者と協力して変革を起こす自己の能力に対する自信
- 独立心と自己信頼
- 自分の才能と他人の才能を評価する力

目的

CAS 要件を満たすことにより、生徒は以下を示すようになる。

- 自信と謙虚さ
- 人間の尊厳を尊重し、かつ人種や階級、宗教、性別、政治の壁を超えた態度や価値観
- 人道的問題や環境問題に対する認識、及び地域や国、世界的な観点からの倫理的な位置付けの展開
- 他人と意味ある関わりを持つようとする意思
- 地域、国、世界という社会に存在するすべてのメンバーに対する責任感、及びこれら社会にとって価値ある関わり
- 好奇心や正直さ、自己批判といった個人的資質
- 経験を再考しそこから学ぶ能力
- 探究心、関わり、主導力、決断力、継続力
- 困難なことに挑戦する能力と個人の限界の認識
- 他人への奉仕や将来のキャリア追求に活用できる実践的な技術

校長及び CAS コーディネーターの役割と責任

校長に対するガイドライン

CAS 活動は全人教育を施すことにより生徒の個性の発達に貢献することを目指しているため、ディプロマ・プログラムの必要不可欠な一部となっている。IB ディプロマを取得するためには生徒は CAS 要件を満たさなければならない。IBO と学校との関係は信頼と忠誠によって成り立つ。IBO は学校の CAS 活動を監視するが、生徒が意味深い活動やプロジェクトに参加するよう徹底させるのは、基本的には学校の責任である。IBO は学校管理者に対し、CAS の教育的価値に対する信念を共有し、ディプロ

マ・プログラムにおける CAS の中心的な役割を認識し、スタッフの支持や参加をできるだけ奨励するよう求めている。

CAS を教育的価値の高いものとし、首尾一貫させ、生徒にとって意味深いものとするため、IBO は学校長に対し以下のような推薦を行う。学校長は以下の事項が問題なく管理されるよう徹底しなければならない。

- 管理運営の責任を担う CAS コーディネーターを指名する。指名される者はこの重要な任務を担うにふさわしい経験豊かな教師でなければならない。またこのガイドで概説されている CAS の理念を信頼し、よく理解している者でなければならない。
- CAS コーディネーターには、ガイドラインに沿ってスケジュールを実行できるように十分な実施時間を与えなければならない。立ち上げから監視、評価、カウンセリング、文書作成、及び学校での CAS の継続的な展開といった作業を行う期間であるが、必要となる実施時間は以下により異なる。
 - ・ 関係する生徒の数
 - ・ 学校での CAS の進捗具合
- CAS の運営をスムーズに行うため適切な資金を割り当てること。
- CAS コーディネーターの専門的なトレーニングに適切な資金を割り当てること。
- 学校の教職員募集方針に CAS に対する責任・任務を盛り込むこと。
- ディプロマ・プログラムにおける CAS の理念やその中心的役割について、保護者に十分な情報を提供すること。保護者は必要に応じて活動に関わること。
- 適切な場合、同様の活動の中・低学年の生徒にも広めていくこと。CAS を通じて「全人」となる過程は、中等課程プログラムでの社会奉仕の提供などを通して早くから行うことにより強化される。

CAS コーディネーターの責任

コーディネーターの責任は、CAS に関わる生徒がこのガイドに規定される目標や目的を達成することができるようにすることである。ディプロマ・プログラムの必要不可欠で重要な部分に対して、特殊で重い責任を担うことになる。

可能なプロジェクトや活動を特定するには、学校や社会の資源を評価し、生徒や社会、地域環境のニーズを調査する必要がある。

CAS コーディネーターは以下の通りでなければならない。

- CAS の特質や理念、その主眼とする目標や目的を十分に理解していること。
- 全人教育を目的とするディプロマ・プログラムの主要要素として CAS の重要性を堅く信じること。
- 全ての生徒が CAS の目標や目的、また CAS から何かを得る方法を十分理解できるように、CAS の理論的解釈について十分な情報を提供すること。
- 全ての生徒が IBO ガイドラインに沿って CAS 要件を達成するようにすること。
- CAS 提供に関わる学校運営者及び全てのスタッフがディプロマ・プログラムの欠くことのできな

い一部としての CAS の理論を十分理解し、協力するよう徹底すること。

- 保護者に CAS の重要性や理論、要件について十分な情報を提供すること。
- スタッフや保護者、その他の人々のスキルや興味にあった活動を指導し、彼らに CAS に参加するよう促すこと。
- 生徒と共に、学校内外の価値ある活動を見出すこと。
- 生徒が総合的な目標に適した活動を自分で創造できるようにすること。
- 地域社会との関係を築き、生徒が自分の住む社会について知識を深めることができるようにすること。
- 広範な CAS 活動の枠組みを設け、各生徒が多様かつやりがいのある意義深い活動に参加できるようなチャンスを与えること。
- 変化する生徒層のニーズや興味に対し、CAS 活動全体の範囲の妥当性を常に再評価すること。
- 主な CAS のガイドラインに沿いつつ、かつ学校や社会特有のニーズにあった各学校特有の CAS ガイドの作成を検討すること。
- CAS の記録を作成・ファイルし、安全な場所に保管しておくこと。
- 生徒に対するメンター役（精神的指導者）を引き受けること。

CAS の評価の詳細

評価の詳細

CAS はディプロマ・プログラムの核心である — マリア・ピアギオ

IBO はできるだけ広範な評価方法を適用するよう推奨している。それらは公式・非公式を問わない。

公式評価は、基本的に、各活動に対する学校評価及び自己評価のことである。

非公式評価の一つに、生徒の活動を成人指導者や CAS コーディネーターが直接観察するという方法がある。また、指導者や CAS コーディネーターとグループや個人で直接話し合う方法もある。生徒が自分たちの経験を分かち合うため定期的な会合を設けることも、CAS が自己の発達にとってどのような意味合いをもつかをより一層理解する上で役立つことになる。

CAS は、国際バカロレア・ディプロマの授与を受けるためのその他全ての要件に対する評価と同様の評価を受ける。候補者が CAS 要件を完全に満たすためには、自己評価や学校評価ばかりでなく、質の高いバランスの取れた内容で、有意義な関わりがあったことを明確に示す記録を提示しなければならない。CAS に費やした時間を示すだけでは充分でない。

生徒による評価

以下に重点をおいて評価する。

- CAS 日誌、生徒の関わりを示す文書や視覚的な証拠などを盛り込んだファイルや参考資料
- 企画や組織作りの証拠
- 責任や努力の証拠
- 活動のスタート時点でのスキルや態度、価値観を程度を踏まえた上での候補者の個人的な達成度や成長度

- CAS 活動全般を通しての反省の証拠

生徒による反省及び自己評価

CAS コーディネーターは活動を開始する前に、定期的な活動や取り組みの終了毎に自己評価報告書や反省文を書くことの重要性を、すべての生徒に明確に説明しておかなければならない。生徒は以下のことを銘記しておくこと。

- CAS 活動毎に記録をつけなければならない。
- 定期的活動の一つの活動の終了毎に、また一つの取り組みの定期的な合間毎に反省文を書くこと。
- CAS 日誌やファイル、参考資料の中に記録及び反省文を書き入れなければならない。

個人の活動や取り組みの記録は所定の書式に回答する形で行うことができる（ディプロマ・プログラム・コーディネーターから入手できる）。また、書式にある質問を利用して反省文を書くこともできる。質問はCASの目的に基づき、生徒に以下を考察するよう求めている。

- CAS 活動を通して個人的にどの程度成長できたか。
- 経験を通じてどの程度の理解やスキル、価値観を得られたか。
- 活動がどのように他人の役に立ったか。
- 自分の長所や短所についてどの程度認識できたか。

写真やビデオテープ、オーディオテープを使用してCAS活動を記録したい生徒もいるだろう。これらは正式の評価報告書を作成する際に有用な参考資料となる。CAS活動の最後には、生徒は全ての取り組みや活動を一覽して最終自己評価を行い、全てのCAS活動に関する反省を文書にして作成し、以下の質問に対する回答を添える。これについては所定の書式（ディプロマ・プログラム・コーディネーターから入手）を使用する。最終自己評価報告書を構成するには、指針となる質問を用いなければならない。

自己評価作業は以下の質問や説明文に基づいて行わなければならない。

1. 活動を説明する。各段階で何をしたか関わった日付を明記する。
2. この活動で何を達成したかったのか実際何を達成したか。
3. どのような困難に直面したか。
4. この活動で達成したいと望んでいたことを、いずれかの段階で達成できないかもしれないと感じたことはあるか。
5. この活動から、自分自身について、他人について、教科についてどのようなことを学ぼうとしたか（例：自信、謙虚さ、尊敬心、認識、責任、好奇心、正直さ、客観性、関わり責任、主導性、決断力、新スキル、チャレンジ精神）。
6. この活動の間に支援してくれた人は助けを受けた場合は、それを説明する。
7. この活動が他の人や組織にどのように役立ったか。
8. 同じ活動をもう一度する場合は、どの点を変えるか。
9. この活動を継続する場合は、次にはどのようなことをするか。

学校による評価

監督者からの評価

最低限の責任として、定期的な活動の一つの活動の終了時や一つのプロジェクトの終了時に生徒が作成する自己評価報告書にコメントを記入する必要がある。監督者は、生徒の日誌やファイル、参考資料に手紙を添付することが望ましい。複数の生徒が関わる活動では、要件を満たした生徒に対して成績の優秀さを示す手紙や証明書を提供する。

CAS コーディネーター：記録及び評価

学校はディプロマ・プログラム受講生の CAS 活動記録文書を作成し、保管することが求められる。これらの記録は、大学進学や転校、または地域オフィスの求めに応じて提出する評価書類の作成をスムーズにするものである。

CAS コーディネーターは、生徒一人一人に対する最終成績評価を行わなければならない。評価は生徒が提出した書類による評価ばかりでなく、口頭試験やグループプレゼンテーション、活動現場でのプレゼンテーションなどの評価にも重点を置かなければならない。

成績基準

成績基準の適用

以下の成績基準は CAS 活動中に生徒が示すことが期待される関連する資質や性質の範囲を述べている。これらは CAS の目的と一致する。基準は相互に関連性があり、重複する部分もかなりあるが、CAS コーディネーターが生徒の成績を評価する上で助けとなるよう考案されている。

これらの基準は生徒や保護者にも認識してもらうことが望ましい。

基準 A：個人の達成度

生徒は以下を示す。

困難なことに挑戦する能力、定期的な参加、自分の限界の認識、新たな役割における進歩、経験からの学習、社会問題解決への支援

基準 B：個人のスキル

生徒は以下の能力を示す。

創造的な思考、社会のニーズの調査、企画及び組織化、資源管理、成功と失敗の見極め

基準 C：個人の資質

生徒は以下を示す。

持続性、自信、ある程度の謙虚さ、責任感、時間厳守、関わり、信頼性、指導性

基準 D：個人間関係の質

生徒は以下を示す。

適応性、協調性、他人を思いやる心、尊敬の念、正義感と公正な態度

基準 E：世界的問題の認識

生徒は以下を示す。

地域、国、国際的な視野から活動を選択する上で役立つ、人道的問題や環境問題に対する倫理的評価

優れた実践例

CAS の優れた実践とは、生徒にとって新しい役割、チャレンジとなるような仕事、実際の結果や内省の機会が得られるものでなければならない。新しい役割とは多くの場合新しい活動のことを言うが、生徒が既に経験している活動であっても、手法を変えたり、新たな目標を設定して行う活動も新たな役割に含める。

「CAS の特徴」の部分で提示された質問以外にも、生徒は活動や取り組みを開始する前に以下の指針となる質問を自問してみることも意義深い。これらの質問は、活動期間中や活動の後でも行うことができる。

- ・ 何をしたか、どこでしたか
- ・ 何を学習したかったのか
- ・ どの程度成功したのか
- ・ どのような困難に直面し、それらをどのように解決したか
- ・ 自己について何を学んだか他者の何を学んだか
- ・ どのような能力、態度、価値観を開発したか
- ・ 誰か助けてくれた人はいたか誰と相互活動をしたか
- ・ この活動は他の人に、または組織にどのように利益をもたらしたか
- ・ これをもう一度することになったらどのような点を変更するか
- ・ 学習したことを別の状況でどのように応用していくか

CAS の 2～3 の要素を取り入れた地域奉仕プロジェクト

学校内の活動

泳げない児童への水泳指導（活動・奉仕）

- 【役割】 水泳指導員
- 【課題】 他者への知識や技能の伝達
- 【達成内容】 子どもたちが楽しみ、運動し、泳ぎかたを覚える
- 【反省】 上記の問いかけへの応え

ソフトボールチームのコーチ（活動・奉仕）

- 【役割】 ソフトボール・コーチ
- 【課題】 他者への知識や技能の伝達
- 【達成内容】 子どもたちが楽しみ、運動し、ソフトボールのプレーを覚える
- 【反省】 問いかけへの応え

下の学年にギター指導（創造性・奉仕）

- 【役割】 ギター演奏指導
- 【課題】 音楽と一緒に演奏
- 【達成内容】 個人やグループにおける音楽技能を向上させる
- 【反省】 問いかけへの応え

掲示板のデザインと作成（創造性・奉仕）

- 【役割】 デザイナー
- 【課題】 掲示板作成
- 【達成内容】 メッセージの効果的伝達をはかる
- 【反省】 問いかけへの応え

学校新聞の作成（創造性・奉仕）

- 【役割】 新聞記者
- 【課題】 新聞の期限内作成
- 【達成内容】 制作記事の発表
- 【反省】 問いかけへの応え

地域での活動

養護施設内の壁画作成（創造性・奉仕）

- 【役割】 壁画画家
- 【課題】 壁画の作成
- 【達成内容】 子どもたちの家を魅力あるものとし、芸術的なことに関与する機会を与える
- 【反省】 問いかけへの応え

移民の子どもに対する語学教授（創造性・奉仕）

- 【役割】 語学教師
- 【課題】 授業の準備と指導、教材準備
- 【達成内容】 受入国の言語によるコミュニケーションを学び、教師を通じたつながりが根付く
- 【反省】 問いかけへの応え

地域の学校における他の生徒との美術・音楽交流（創造性・奉仕）

- 【役割】 美術、音楽の教師や学習者
- 【課題】 地域の学校を訪問し、他の生徒と信頼関係を持つ
- 【達成内容】 生徒グループ同士が相互に新しい技術を習得し、合同作品／コンサートの実施も考えられる
- 【反省】 問いかけへの応え

世代間学習と友情（創造性・奉仕）

- 【役割】 友人、筆記者
- 【課題】 地域史（又は家族・地方史）を語ってくれる高齢者を定期的に訪問、記録内容を高齢者の著述として提出
- 【達成内容】 高齢者が地域史記録に貢献することにより、高齢者の存在意義を感じさせる
- 【反省】 問いかけへの応え

山岳探検引率（活動・奉仕）

- 【役割】 探検リーダー
- 【課題】 登頂に必要なすべての課題の計画と実施
- 【達成内容】 共通の挑戦を通して目標を達成する満足感を得る
- 【反省】 問いかけへの応え

児童の野外キャンプの組織化（活動・奉仕）

- 【役割】 子どもの野外キャンプのリーダー
- 【課題】 児童の全活動の計画、実施、引率
- 【達成内容】 キャンプ参加者全員に意義深い経験を提供する
- 【反省】 問いかけへの応え

ストリート・チルドレンの家の基礎工事・簡易住居の建築（活動・奉仕）

- 【役割】 土木・建築労働者
- 【課題】 ストリート・チルドレンと共同しての建物建築
- 【達成内容】 ストリート・チルドレンに住む家を与える
- 【反省】 問いかけへの応え

海の流油汚染、くずや捨て荷の清掃（活動・奉仕）

- 【役割】 環境整備人
- 【課題】 汚染の清掃
- 【達成内容】 環境を改善する
- 【反省】 問いかけへの応え

緊急隊（救命ボート、山岳救助隊）の運営（活動・奉仕）

- 【役割】 救命ボート隊員、山岳救助隊員

- 【課題】 生命救助
【達成内容】 人々を救助する
【反省】 問いかけへの応え

盲導犬提供に関わる寄附金の集めのためのデモ行進（創造性・活動・奉仕）

- 【役割】 企画運営者、デモ行進者、盲人介護者
【課題】 企画、宣伝、盲人との行進、寄付金募り
【達成内容】 盲人に盲導犬を提供する
【反省】 問いかけへの応え

ハンセン病患者の村への水道の供給（創造性・活動・奉仕）

- 【役割】 土木作業員
【課題】 ハンセン病患者の村への水道供給の設計・建築
【達成内容】 村に清潔で安全な水道栓を設置し、川まで歩いたり、ワニやカバの危険にさらされたりしないようにする
【反省】 問いかけへの応え

国際的活動

模擬国際連合参加の企画運営、及び寄附金集め（創造性・奉仕）

- 【役割】 会議運営者／政治家
【課題】 管理運営、寄附金募り
【達成内容】 模擬国際連合参加により、政治的認識や人類愛の認識を強め、ディベートや説得的議論の技術を向上させる
【反省】 問いかけへの応え

アムネスティ・インターナショナル、グリーンピース、世界自然保護基金（WWF）の寄附金集め（創造性・奉仕）

- 【役割】 募金／キャンペーン推進者
【課題】 管理運営と募金
【達成内容】 生徒の人権や環境問題への認識を強め、仕事を遂行するための組織の運営能力を強める
【反省】 問いかけへの応え

CAS のホームページを創作・運営（創造性・奉仕）

- 【役割】 ホームページ作成者
【課題】 他校の生徒に役立つホームページのデザインと更新
【達成内容】 国際的な考え方、態度、価値観を共有する
【反省】 問いかけへの応え

自然災害の犠牲者の支援（創造性・活動・奉仕）

- 【役割】 慈善事業キャンペーン推進者
【課題】 犠牲者に対する毛布、テント、食糧、医療品を募り配布
【達成内容】 自然災害の被害を受けている人々への実際的な支援をする
【反省】 問いかけへの応え

創造性

水彩の風景画を描く

- 【役割】 アーティスト
【課題】 水彩画を描く
【達成内容】 展示する
【反省】 問いかけへの応え

ヴェニヤフスキーのバイオリン練習曲第3番をフェンダー・ストラトキャスターで演奏する

- 【役割】 ミュージシャン
【課題】 楽曲の斬新な解釈
【達成内容】 聴衆を楽しませる
【反省】 問いかけへの応え

活動

陸上部に所属する

- 【役割】 クロスカントリー走
- 【課題】 地域を偵察し、道を決め、走る
- 【達成内容】 健全な身体を作る
- 【反省】 問いかけへの応え

スキューバ・ダイビングを習得する

- 【役割】 スポーツ・ダイバーの資格取得者
- 【課題】 安全なダイビングに必要な技能・知識を身に付ける
- 【達成内容】 安全で楽しいチーム・ダイビング
- 【反省】 問いかけへの応え

米国大使館海兵隊チームとソフトボールの試合をする

- 【役割】 ソフトボール・プレーヤー
- 【課題】 得点を上げる
- 【達成内容】 敗北
- 【反省】 問いかけへの応え

体操

- 【役割】 体操選手
- 【課題】 練習
- 【達成内容】 技術を磨き、健康な身体を作る
- 【反省】 問いかけへの応え

第5章 高大接続プログラムとしてのIBプログラム

国際バカロレア (IB) のプログラムを修了し、IB のテストで合格点をとれば、米国の大部分の大学では大学の単位として認めている。どの教科の成績にどの程度の単位数を与えるかは各大学の判断によるが、大学1年間分の単位まで認めているところが相当数あり、ホームページなどでも IB プログラムの大学での扱いを公表している大学がある。この章では、米国で急増している高校に在籍していながら大学の単位を取得できるという、二重単位 (Dual Credit) としての IB プログラムを類似のプログラム (AP プログラム) と比較して、IB プログラムの特徴を明らかにする。また、大学での IB プログラムの評価を考察する。

1 AP プログラムと IB プログラムの類似点と違いについて

IB プログラムの DP は大学レベルの内容であると認められ大学の単位として認められることがあるが、米国では、カレッジボードが Advanced Placement (AP) というハイレベルの教科内容を有するプログラムを提供している。規模においては、AP プログラムは IB プログラムとは比べものにならないくらい大きいⁱ。

この他にも、高校と大学との接続を考慮したプログラムに、Tech Prepⁱⁱとかミドルカレッジ・ハイスクール (Middle College High School) ⁱⁱⁱ、アーリーカレッジ・ハイスクール (Early College High School) があるが、本章では、高校の教師が教え、高校で大学レベルの内容の授業を実施する AP プログラムと IB プログラムについてのみ考察する。まず、両プログラムの類似点と違いの考察である。

本報告書の資料に国際バカロレア機構とカレッジボード (AP を提供している) が共同で作成した IB と AP の概要を翻訳して掲載しているが、両プログラムには次のような類似点がある。

1. いずれのプログラムとも高度な教育を行うための厳しいプログラムであり、それぞれ生徒と教員に対し高度な能力を求めている。
2. いずれのプログラムでも、専任の創造力豊かな教師が自分の生徒、学習分野、そして仕事のために力を尽くしている。
3. いずれのプログラムとも、高度な学力を身に付け、もっとも入学の困難な大学への進学を希望するきわめて意欲的な生徒達が集まっている。
4. いずれのプログラムとも中等教育カリキュラムとの連携が行われている。IB ではミドル・イヤーズ・プログラムとプライマリー・イヤーズ・プログラム、AP ではプリ AP プログラムと K-12 制度によってこの連携が行われている。
5. いずれのプログラムとも、世界の教育の質を高めるための手段として世界中の教育者、教育政策立案者、並びに一般の人々から注目されている。
6. いずれのプログラムでも、生徒が自力で研究し、考え、そして書くということを重視している。
7. 教育プログラムの補助として、AP と IB のいずれでも、世界中の教師と学校管理責任者のために大規模な専門能力開発の機会を提供している。

他方、AP と IB にはいくつかの違いがある。試験の得点と受験資格については、AP と IB

では次のような違いがある。

- ・ AP の試験の結果が AP の得点になる。IB の得点も IB の試験の成績により決まるが、IB のカリキュラムに基づいた教科等の授業を受けることが条件である。
- ・ 生徒は誰でも AP の試験を受けることができる。特定の AP の教科の授業はあるが、その AP の教科の試験を受ける必要条件ではない。したがって、AP の教科の授業を受けていない IB の生徒でも AP の試験を受けることができる。他方 IB は、IB ディプロマ・プログラムを受けている生徒しか IB の試験を受けることができない。

AP または IB を教える教師の資格については、どちらのプログラムもなんら特別な資格証明を教師に要求をしていないわけではない。教師を任命するのは通常は学校レベルの決定である。高校の教師としての資格以外に特別な資格は必要がないが、研修については両プログラムともに積極的に取り組んでいるようである^{iv}。特に、IB では研修は義務であるとしている。IBO は教師の資格条件や教授スタッフの基準を設けてはいないが、少なくとも始めるに当たって、IB 教師希望者の IB ワークショップ参加が、申し込みのプロセスにおいて必須であるとしている。

さらに両プログラムの違いを挙げるならば、AP プログラムと異なり、IB 教師と IBO 間では意見交換があることである。IB では、全教師が試験ごとに、試験のねらい並びに個々の試験項目の内容・形式についての質問に答える調査票を記入する。結果は IBCA (IB カリキュラム評価・学術部門事務所) により要約され、教師と開発委員会双方に渡され、それが翌年のカリキュラム及び指導の変更を推進し、同時に評価の道具であるそれ自体の変更も推進する。試験の採点後に、各教師は科目レポート (試験に関する世界中の全生徒の反応に関する包括的コメント) と、学校レポート (自校の生徒の筆記試験に関する結果及び内部評価についての具体的コメントと、それに加えて学校の各科目における実地のプログラムに関するコメントと提言) を受け取る。学校と教師に提供されるこれらのコメントは、テストの成績を改善することをねらいとした指導プログラムの変更を活発にするのに役立つ。

2 IB プログラムの大学での評価

高度情報化社会での仕事は大学レベルの学力が必要になっている仕事が多くなっている。したがって、できるだけ多くの生徒に大学の経験をさせる必要があると言われる。しかし、大学では、入学した生徒が大学生としての準備ができていないために、授業に入る前の補講をしなければなかったり、途中で大学の授業についていけなくて生徒がドロップアウトしてしまったり、多くの問題を抱えている。米国の大多数の大学では、予定の年数 (4年間) で学士号を取得している学生は驚くほど少ない。このような問題は、高校と大学とのカリキュラムの接続がうまくいっていないからではないかとの指摘がある。

IB 学習者が高い評価を大学で得ているのは、大学の学術的厳格さに対応できるよう生徒の準備が整えられていることが大きい。ある研究では (Adelman, 1999)、学士号課程を修了できるかどうかの予測変数として、生徒のハイスクールでのカリキュラムの集中度と質が最も強い影響力を持つことを明らかにしている。つまり、GPA や SAT または ACT の成績が良い生徒よりも、AP や IB の厳しいコースに挑戦し、良い成績を取めた生徒のほうが、大学をドロップアウトする率が少なかったということである。AP や IB のような大学レベ

ルの課程に登録すると、生徒は厳しい学習課題に取り組む機会が増えて、大学で優れた成績を収めるために必要になるスキルを身につける可能性が大きくなる。AP と IB のプログラムは、生徒が自力で研究し、考え、そして書くということを重視している。このような訓練を受けたかどうかということは大学での授業について行く上で大きな影響があるものと思われる。

IB プログラムは大学との接続の関係では他にどのような役割を果たしているのだろうか。

まず、モチベーションの働きが挙げられる。つまり、学習意欲の高い生徒に選択肢を与えることでモチベーションを高めることができる。大学の単位を取得する機会を提供すれば、熱心に勉強し、優れた到達度を実現するきっかけとなるだろう。

次に、大学に入学してからのお金と時間の有効利用である。学費の面では、生徒が負担する大学のコストを下げるのが可能である。大学にかかる費用が急激に増加しているので、多くの生徒にとって学士号の取得が経済的に困難になっている。大学に入学する前に大学の単位を取得することができる(場合によってはほぼ1年分に達する)ので、生徒は、学士号の取得に要する時間を短縮し、しかも大学の全体的費用を大幅に節約することができる。卒業するのに4年間かかるところを3年間で済むことば生徒やその保護者だけではなく、社会にとっても負担の軽減になるだろう。実際には、入学時に大学の単位をいくつか取得している IB 学習者は3年間で卒業することよりも、時間的に余裕ができたことで自分の専門とは別にもう一つ専門の学問を身につけて卒業することを選択している生徒も多いようである。大学で基礎的なレベルの講義をとらなければならないと言った制約から解放され、自分の学問的なレベルにあった講義に集中できることも大きなメリットである。

さらに、IB プログラムは大学と高校との関係を強化することになる。IB 教科が何単位として認めるかは大学により異なる。多くの大学ではそのような情報を大学の公式なホームページで公表している。高校の教科であってもどのような内容が教えられているかということに大学側も無関心ではいられないであろう。優秀な生徒を確保する上でも高校との連携が欠かせない。

3 今後の動向と課題

Newsweek (16 May, 2005) がアメリカの優秀な 100 の高校を紹介している。AP と IB のテストの受験数により格付けしたリストであるが、リストの上位に IB 校が集中していることが注目された。このような格付けをすることには賛否があるが、IB 校が注目されていることは事実である。米国での IB 校の数は、全世界の IB 校の半数に近らんとするほどである。米国でのもう一つの特徴は約 90% が公立校で IB が導入されていることである。連邦政府による財政面での支援、温度差はあるものの州政府や学区の支援も年々大きくなっていることで、IB 校の数も年々増加している。

問題は、急激に拡大を続けるプログラムにどのように対処していくかということである。トップレベルの生徒だけではなく、より多様な生徒を受け入れる方向に進んでいるが、彼らの学力を十分に伸ばし DP 資格を取得できるようにできるであろうか。また、IB 教師もプログラムのサイズに応じて増員する必要があるが、これからも良質の教員を確保しつづけることができるだろうか。

IBでは教員の研修のために多くのワークショップを開催しているが、地理的な広がりが多いことで、多くの時間とお金がかかることが難点である。最近ではオンライン・カリキュラム・サイトを開き、最新のカリキュラム情報等を提供しているが、今後も一層の活用が必要になるだろう。

なお、IBOの今後の活動の方向と対策については、翻訳して本報告書の資料として収めたので（戦略計画（資料3）と国際バカロレア北米戦略計画（資料4））、一読頂きたい。

ⁱ IBの2006年5月の段階でのDP実施校は1,443校にすぎないが、APは、2005-06年度は16,000校で実施されている。1,339,282人がAPプログラムで学んでいる。APを受け入れている大学も多く、3,638校に及んでいる。

ⁱⁱ Tech Prepは、1990年のカール・D.パーキンス職業および応用技術教育法の改正法の制定により設けられたきわめて多様な内容を持つプログラムである。Tech Prepの基本は、特定の分野（通常は技術または職業関連分野）でのハイスクールとカレッジ課程の連結とコーディネーションである。この戦略では、ハイスクールでの授業に対して必ずしもカレッジの単位が認定されるわけではなく、生徒は「エスクロ(escrow)」によって単位を取得する。これは、生徒がカレッジに入学してから指定された1つまたは複数の課程を修了した場合に、ハイスクールで履修した課程の単位が認定されるというものである。

ⁱⁱⁱ ミドルカレッジ・ハイスクール(MCHS)は、ハイスクールからドロップアウトする恐れのある生徒が卒業要件を満たし、中等後教育に移行できるように支援する目的で設立された。通常はカレッジのキャンパスに設けられ、ハイスクールとカレッジの両方のカリキュラムを実施している。生徒達はハイスクール課程を履修し、準備が整ったときに、MCHS学習の一環として二重単位を取得できるカレッジ課程の履修を開始する。ミドルカレッジ・ハイスクールは、一般的に地方が行うプロジェクトだが、ミドルカレッジ・ハイスクール・コンソーシアムなど幾つかの全国的組織も会員校に対してリソースを提供している。

^{iv} ほとんどの教師は、学校にもどれば教科内で唯一のAP教師、あるいはIB教師なので、ワークショップなどで他の教師たちと知識や経験を分かち合ったり、ディスカッションをしたり、ネットワークができたことが有益であったとの感想を参加した教師たちから聞いている。

^v IBプログラムを州法で位置づけている州と記載箇所は次の通りである。

アーカンソー(Ark. Stat. Ann. § 6-16-804; Ark. Stat. Ann. § 6-16-803; Ark. Stat. Ann. § 6-16-802; Ark. Stat. Ann. § 6-16-1206; Ark. Stat. Ann. § 6-16-805; Ark. Stat. Ann. § 6-15-2006; Ark. Stat. Ann. § 6-15-902; Ark. Stat. Ann. § 6-16-801)、カリフォルニア(Cal. Education Code § 52922; Cal. Education Code § 52921; Cal. Education Code § 52920)、コロラド(Colo. Rev. Stat. § 23-1-113.2)、フロリダ(Fla. Stat. § 1002.20; Fla. Stat. § 1003.43; Fla. Stat. § 1007.22; Fla. Stat. § 1003.02; Fla. Stat. § 1002.23; Fla. Stat. § 1009.534; Fla. Stat. § 1007.27; Fla. Stat. § 1009.531; Fla. Stat. § 1009.535; Fla. Stat. § 1003.429; Fla. Stat. § 1011.62; Fla. Stat. § 1007.261)、ジョージア(Ga. Code Ann. § 20-2-157)、ケンタッキー(Ky. Rev. Stat. § 158.007; Ky. Rev. Stat. § 160.348)、ミネソタ(Minn. Stat. § 120B.13; Board of Trustees MN State Colleges and Universities - POLICY 3.16)、ミシシッピー(Miss. Code Ann. § 37-106-29)、オクラホマ(Okla. Stat. Tit. 70 § 1210.703; Okla. Stat. Tit. 70 § 1210.702; Oklahoma State Regents for Higher Education Policies and Procedures (Section 5), Policy Statement on Admission to, Retention in, and Transfer among Colleges and Universities in the State System)、テキサス(Tex. Education Code Ann. § 42.156; Tex. Education Code Ann. § 29.904; Tex. Education Code Ann. § 28.053; Tex. Education Code Ann. § 28.054; Tex. Education Code Ann. § 28.051)、バージニア(Va. Code § 22.1-253.13:1; Va. Code § 22.1-253.13:3)、ワシントン(Wash. Rev. Code § 28A.300.118)

参考文献

Adelman, C. (1999). Answers in the tool box: Academic intensity, attendance patterns, and bachelor's degree attainment. Washington, DC: U.S. Department of Education, Office of Educational Research and Improvement.

Barbara Kantrowitz. (2005). The 100 Best High Schools in America. Newsweek
<http://www.msnbc.msn.com/id/7761678/site/newsweek/>

Brian Kleiner Laurie Lewis. (2005). Dual Enrollment of High School Students at Postsecondary Institutions: 2002-03 . NCES 2005008. <http://nces.ed.gov/pubs2005/2005008.pdf>

The College Board. (2006). Advanced Placement Report to the Nation 2006
http://www.collegeboard.com/prod_downloads/about/news_info/ap/2006/2006_ap-report-nation.pdf

The College Board. (2006). AP Program Guide 2006-07.
http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/061652APPgmGuide0607_060814.pdf

The College Board. (2006). Bulletin for AP Students and Parents 2006-07.
http://apcentral.collegeboard.com/apc/members/repository/ap06_bulletin_parstud_0607.pdf

Education Commission of the States. (2005). Dual/concurrent enrollment. Retrieved September 23, 2005 from, <http://www.ecs.org/html/issue.asp?issueID=214>

International Baccalaureate Organization. (2004). Diploma Programme assessment Principles and practice, Cardiff: IBO.
http://www.ibo.org/diploma/assessment/documents/d_x_dpvyv_ass_0409_1_e.pdf

International Baccalaureate Organization. (2005). International Baccalaureate North America Strategic Plan Expanding Access: Addressing the IBO Mission in North America, New York
<http://universities.ibo.org/ibo/index.cfm?contentid=D6B2A4A8-AC29-2CD3-76B54F295466BE4F&method=display&language=EN>

International Baccalaureate Organization. (2004). Strategic Plan of the International Baccalaureate Organization, Cardiff: IBO.
<http://www.ibo.org/mission/strategy/documents/sp2004.pdf>

International Baccalaureate Organization. (1998, April). The Extended Essay for first examinations in May 1999.

International Baccalaureate Organization. (2001, August). Creativity, Action, Service for candidates graduating in 2003 and thereafter.

International Baccalaureate Organization. (2000, October). IB Theory of Knowledge

International Baccalaureate Organization.(2006). 21 things you should know about the IBO,

<http://www.ibo.org/facts/documents/21thingsyoushouldknowabouttheIBApr06.pdf>

International Baccalaureate Organization. (2006). A Guide to the IB Diploma Programme for Universities & Colleges.

<http://www.ibo.org/diploma/recognition/guide/documents/UniversityGuideToDP.pdf>

International Baccalaureate Organization. (2006, November). Diploma Programme Statistical bulletin, May 2006 Examination session.

<http://www.ibo.org/facts/statbulletin/documents/DiplomaProgrammestatisticalbulletinMay2006.pdf>

International Baccalaureate Organization. (2005). Diploma Programme Vade Mecum 2006

International Baccalaureate Organization. (2000). Making the PYP happen

International Baccalaureate Organization. (2006, March). IB learner profile booklet.

http://www.ibo.org/programmes/documents/learner_profile_en.pdf

International Baccalaureate Organization., The College Board. (2004). IB & AP.

<http://www.ibo.org/ibna/documents/ibandap.pdf>

Jay Mathews, Ian Hill. (2005). Supertest: How the International Baccalaureate Can Strengthen Our Schools. Open Court

Jennifer Brown Lerner and Betsy Brand. (2006). The College Ladder: Linking Secondary and Postsecondary Education for Success for All Students. American Youth Policy Forum.

<http://www.aypf.org/publications/The%20College%20Ladder/TheCollegeLadderlinkingsecondaryandpostsecondaryeducation.pdf>

Jobs for the Future. (2004). The early college high school initiative at a glance. Retrieved September 9, 2005 from, <http://www.earlycolleges.org/Downloads/ECHSIAtAGlance120204.pdf>

Jobs for the Future. (2005). Early college high school initiative: Core principles.

<http://www.earlycolleges.org/Downloads/CorePrinciples.pdf>

Jobs for the Future. (2006). The Early College High School Initiative in 2007

<http://www.earlycolleges.org/Downloads/ECHS.brief.8x11.pdf>

Katherine L. Hughes, Melinda Mechur Karp, David Bunting & Janice Friedel. (2005). Dual Enrollment/Dual Credit: Its Role in Career Pathways

Katherine L. Hughes & Melinda Mechur Karp. (2006). Strengthening Transitions by Encouraging Career Pathways: A Look at State Policies and Practices, CCRC Brief No. 30

Katherine L. Hughes, Melinda Mechur Karp, Baranda Fermin & Thomas R. Bailey. (2005). Pathways to College Access and Success, CCRC Brief No. 27

Katherine L. Hughes, Melinda Mechur Karp, Baranda J. Fermin, and Thomas R. Bailey, Community College Research Center, Columbia University, Teachers College. (2005). Pathways to College Access and Success. U.S. Department of Education Office of Vocational and Adult Education.

<http://www.ed.gov/about/offices/list/ovae/pi/cclo/cbtrans/finalreport.pdf>

Melinda Mechur Karp, Thomas R. Bailey, Katherine L. Hughes, and Baranda J. Fermin, Community College Research Center, Columbia University, Teachers College. (2005). Update to State Dual Enrollment Policies: Addressing Access and Quality. U.S. Department of Education Office of Vocational and Adult Education

<http://www.ed.gov/about/offices/list/ovae/pi/cclo/cbtrans/statedualenrollment.pdf>

National Academy Press.(2002). Learning and Understanding: Improving Advanced Study of Mathematics and Science in U.S. High Schools, Washington DC.

Peterson, A. D. C. (2003). Schools Across Frontiers: The Story of the International Baccalaureate and the United World Colleges. Open Court Publishing Company

Richard van de Lagemaat. (2006). Theory of Knowledge for the IB Diploma. Cambridge University Press

Tiffany Waits, J. Carl Setzer, and Laurie Lewis. (2005). Dual Credit and Exam-Based Courses in U.S. Public High Schools: 2002-03. NCES 2005009. <http://nces.ed.gov/pubs2005/2005009.pdf>

Tim Pound. (2005). The International Baccalaureate. RoutledgeFalme

Tomkinson, John L. (2006). Study Skills for the International Baccalaureate. Anagnosis

U.S. Department of Education. Fact sheet: Enhanced credit-based transition programs. Retrieved September 23, 2005 from, <http://www.ed.gov/about/offices/list/ovae/pi/cclo/cbtrans/enhanced.pdf>

U.S. Department of Education. (2003). Promoting College Access and Success: A Review of Credit-Based Transition Programs. Washington DC. Office of Vocational and Adult Education

Western Interstate Compact for Higher Education. (2006). Accelerated Learning Options: Moving the Needle on Access and Success.

http://www.wiche.edu/Policy/Accelerated_Learning/report/ALO.pdf

河合 久, (2002), 「北米地域における IB ディプロマの大学での認定について」『国際バカロレア・プログラムの評価基準及び大学との接続に関する調査研究』, 国際カリキュラム研究会 59-72

河合 久, (2001), 「国際バカロレアにおける「知識の理論」(TOK) 教師研修」『国際バカロレア・プログラム (大学入学資格プログラム, 中等課程プログラム, 初等課程プログラム) における評価、研修システム及び国際教育の位置付けに関する調査研究』, 国際カリキュラム研究会 39-43

河合 久, 「テキサス州における国際バカロレア・プログラム」『国際バカロレア・プログラム (大学入

資料

学資格プログラム, 中等課程プログラム, 初等課程プログラム) における評価, 研修システム及び国際教育の位置付けに関する調査研究』, (2001), 国際カリキュラム研究会 45-48

河合 久, (2000), 「カナダ」『諸外国における国際バカロレア機構及び国際バカロレア・プログラム (カリキュラム) の位置付けに関する調査研究』, 国際カリキュラム研究会 47-53

金 泰勲, 河合 久, (2004), 「韓国における外国人学校」『諸外国における外国人学校の位置付け等に関する調査研究』, 国際カリキュラム研究会 1-12

河合 久, (2003), 「西部地区基準協会 (WASC) の評価活動」『インターナショナルスクールに係る評価機関の調査研究』, 国際カリキュラム研究会 1-14

河合 久, (2003), 「客観的な評価をめざすルーブリックの研究開発」, 科研報告書

河合 久, (2005), 「評価の信頼性を高める教師研修用プログラムの研究開発」, 科研報告書

文部科学省大臣官房国際課, (2005), 国際バカロレアの概要



ディプロマ・プログラムのガイド

目 次

まえがき

生涯教育

大学入学資格プログラム（ディプロマ・プログラム）

独自の特色

知識の理論

課題論文

創造性、活動、奉仕

カリキュラムモデル

グループ 1 第一言語

グループ 2 第二現代言語

グループ 3 個人と社会

グループ 4 実験科学

グループ 5 数学

グループ 6 芸術・選択科目

生徒の成績評価

段階評価

卒業資格

公認と学校の役割

大学の認可

総則

ディプロマ・プログラムのいくつかの例

国際バカロレア機構の歴史と運営

専門的サービス

まえがき

国際バカロレア機構は 30 年間に渡り、向学心のある 16 歳から 19 歳の学生を対象に、大学入学に先立つ二年の間厳しいカリキュラムを与え厳格な評価を行ってきた。あらゆる国々の何千という若者が、IB ディプロマを取得し、世界の優れた高等教育施設への入学許可を獲得している。

優れた教授体制も一つの重要な特色であるが、我々のような組織はさらなる貢献を目指している。IB は世界の急増する国家制度の一つに過ぎないのだろうか、あるいは独自の手法をもって境界を越えるものを実際に提供しているだろうか。これらの問いの答えは、我々が何をもって国際的と判断するかということに大きくゆだねられ、またそれをいかにカリ

キュラムに落とし込んでいくかの選択によってくるものである。

私自身の見解では、IBの誠実さは、我々があらゆる学生に、世界のどこにあらうともま
ずは自身の国の本質——言語、文学、歴史、文化遺産など——に迫ることを求めるという
事実によっている。そしてさらに、彼らが相応した他の伝統にも共感することを望む。こ
れは彼らが異なる国の観点を身につけるためではなく、単にそういったものに触れ、理性的
に受け止めることを助けるためである。結果として、お互いを思い合える人々が増え、
寛容に尊重しあう国際的枠組みの中で、国々の多様性を認め合うようになることが望まし
い。理想を言えば、IBの体験が終わる頃には、生徒たちが他人と自分とは異なっていて当
然なことを認めると同時に、自分自身についてもさらに理解を深めてきてほしい。

この最終的な手引きはディプロマ・プログラムを支える教育哲学の概要、カリキュラム
の構成・内容と評価方法、規則や規定、生徒、保護者、教師、学校経営者、大学職員から
の質問への回答、について説明するものである。本書からこの素晴らしい国際的取り組み
への参加に必要な情報はもとより、示唆を得て頂ければ幸いである。

事務局長 Roger M Peel

1997年7月 ジュネーブにて

生涯教育

国際バカロレア機構(IBO)は、スイスに本部を置く非営利的教育団体であり、中等学校
の最終二年の生徒に Diploma Programme(ディプロマ・プログラム)、11歳から16歳の生
徒に Middle Years Programme(中等課程プログラム)、3歳から12歳の生徒には Primary
Years Programme(初等課程プログラム)を提供している。

この組織の教育理念は、1996年に採択された声明文に表されている。「国際バカロレア
機構は、幅広く調和のとれたカリキュラムに革新的な評価を加えることにより、若者の個
人能力の啓発と、彼らに教室内と現実世界の関連を教えることに力を注ぐ学校の支援を目
的としている。厳格な知性と高度な学究的基準、そしてそれ以上に極めて重要な点は、国
際理解、そして責任ある市民になるという理想にある。IBの生徒は最終的に、客観的な
視点と慈悲深さを兼ね備えた思想家となり、終生学びつづけ、学識をもって地域や国の仕
事に携わり、人生を豊かにする文化や意見の多様性を尊重しつつ全人類を結ぶ人間愛を共
有する人となるであろう。」

IBOは組織として、カリキュラムと評価法の開発、教師の育成と情報セミナー、電子ネ
ットワーク、その他の教育サービスを世界90カ国以上の750加盟校に提供している。

大学入学資格プログラム (ディプロマ・プログラム)

知識の広がりや現代社会の変化の速さは、従来の概念による一般教育の達成をますます
困難にしてきた。各分野に関する情報量は大変なもので、百科事典的な広範な学習法は効
果的ではない。学習法や情報を厳しく選別する方法を学ぶことは、その学問分野自体を学

ぶことと同様重要である。

21世紀に向かう生徒たちは、大量のしばしば当惑を伴うような選択を迫られている——全ての段階における教育目標は、若者たちに適切な判断と賢明な選択を可能にする価値観と機会を与えることである。

現代の教育者たちは、世界的なものの見方や、共有しあう人間愛などを育むに足る広義の教育課程の提供と同時に、高度な競争社会において受験や就職の成功に必要な技術や心構えを生徒に教える狭義の教育課程の提供にも尽力している。

国際バカロレア機構は、世界中で、生徒に素晴らしい教育をしようという挑戦に想像力豊かに対応している。IBディプロマ・プログラムは、試験へとつながる難度の高い大学入学前の学習コースで、高い学習意欲をもつ中等学校の16歳から19歳の学生を対象としている。二年間のカリキュラムのなかで、卒業生がそれぞれの国の教育システムに応じた必要条件を満たせるように、プログラムの原型は一つの国の形式に片寄らず、様々な国の長所を取り入れている。このプログラムは現在、英語、フランス語、スペイン語での提供が可能となっている。

世界共通のカリキュラムを行うことで、このプログラムでは国際的な生徒の移動、あるIB加盟校から別の加盟校へということが可能になり、また家のすぐ近くにいながらにして国際的に高く認められたカリキュラムを受けることができる。厳格な査定の実績は、IBを取得した生徒に世界有数の大学への入学と、その後に高い成績を修めるための確固とした基礎を与えている。

独自の特色

このプログラムには幅広い一般教育カリキュラムという伝統的な強みに加えて三つの素晴らしい特徴がある。これらはディプロマ・プログラムの全学生が受講を義務付けられることからディプロマ・プログラム必須要件と呼ばれている。

知識の理論

知識の理論はプログラムに一貫性を与えるものである。これは国際バカロレア独自の学習コースで、ディプロマ・プログラム登録者全員に義務付けられている。二年に渡るプログラムの間、知識の理論には最低でも100時間の授業が求められている。

知識の理論の起こりは、二つの異なる教育的伝統の融合にある——実学的なもの、哲学的教えに重きを置くものである。知識の理論では、ディプロマ・プログラムを通した全ての勉強をあらゆる角度から熟考するよう奨励している。各知識の領域を含むコースの選択が必要科目に配されているので、個々の知識体系の質や目的、強みや弱みについて充分情報を得て討論をすることが可能である。

例えば、生徒たちは文学における詩の真実性の本質について考え、また今度はその真実を他の知識体系と対比するよう勧められる——歴史的事実、科学的事実、数学的証明などと。彼らは個々人が毎日の生活の中で行っているはずの、倫理的・政治的・美的判断の根拠についても考察する。言語と思索の役割、そして生徒が客観的精神を養うことが重要視

される。

生徒がものごとを知るという過程をどのようにして学ぶのか考えるように、また各問題に対して再考するという習慣をつけるように導く、これが結果的には深い知的体験となる。国際的プログラムにふさわしい知識の理論として、文化的伝統の多様性に詳しく、また異なる考え方の長短についても深く考える内容となっている。

生徒の評価は記述の課題に基づいている。生徒は 1,000~1,500 単語の二種類の小論文を提出しなければならない。一つは知識の理論の様々な領域から自由に選ぶことができ、二つ目は前もって学校へ配布される論文の題目リストから選んで書くことになる。この課題は担任によって評価され、その成績は IBO により適切に承認される。

知識の理論は別に選択科目としてある哲学の言い換えではないが、広い意味でその目的は精神の哲学的役割を高め、明晰な考えと正しい判断を伸ばすことにある。知識の理論は国際バカロレア特有のコースであり、そのため機構は教師の育成と模範となる資料の提供にかなりの力を注いでいる。

課題論文

IB ディプロマ・プログラムの生徒は、独自に研究した上で約 4,000 単語の論文も書く必要がある。この論文で、生徒は特に興味のあるテーマについて研究し、また大学レベルの個人研究、論文作成の手法に親しむことになる。このためには約 40 時間を自習と論文作成に割くことが勧められている。テーマは 35 を超す言語を含む IB ディプロマ・プログラムの 60 科目の一つから選ぶことになる。

グループ 1 または 2（第一または第二言語）からテーマを選ぶ論文は、言語論か文学論として書かれることになるだろう。言語を中心にするならば、その構造や体系についての知識、またその言語が使用される地域の文化についても理解を深めることが可能になる。その論文はある社会に関する論点を探求し、その言語を使う人々がいかに考え振舞うかという洞察の助けになるだろう。文学的論文を選ぶなら、独自の批評する力が養われ、あるいは文学的テーマを深く学ぶことになるだろう。中には外国語で書かれたものと自身の国や地域の文学を比較研究する学生もいる。

母国語、外国語のどちらでも言語あるいは文学について論文を提出する資格はあるが、必ず登録した言語で書かねばならない。例えば英語を母国語とする人がスペインの言語と文化について書く際には、スペイン語で書く必要がある。論文において、言語、文学どちらについても創作は認められない。

論文は、ディプロマ・プログラムの公式科目としてカリキュラムに登録が義務付けられている他の四つの科目、歴史、生物、数学、音楽の分野からも提出される。論文のテーマの選択は、生徒にディプロマ・プログラムの勉強をさらに深める機会を与える。例えば上級レベルで選択した学科の一つをテーマに選び、研究、論文作成することによって。また一方で、ディプロマ・プログラムで選択していない学科から選ぶなら、学習経験の幅を一層増すことになるだろう。

学校には IB ディプロマ・プログラムの学生の適切な監督を確実に行うことが求められる。監督者は通常、論文の登録科目を学究的に指導できる教職員である。加えて監督者は、一般的な学習計画の指導と同時に、総体的計画、論文提出までの指導を行い、またその論

文が確実に生徒本人の作品であるようにする。学究的指導は適切な素質と経験を持つ専門家が学校内にいない場合、外部の教職員に委託されるが、生徒への一般的責任については校内の教職員が担う。

論文は一般的基準と学科特定の基準、両方をもって評価される。一般的基準は、研究論点の適切さ、題材の扱い方、分析と論旨の質の高さに関連している。学科特定の基準は、選択したテーマを、登録した科目の範囲内でいかに扱っているかを評価する。論文の目的は、生徒が独自に研究する機会を持つことであるので、一般的評価基準の方が学科特定のそれよりも重く、2対1の比率で評価されている。

創造性・活動・奉仕

頭文字の CAS で知られる創造性(Creativity)・活動(Action)・奉仕(Service)はディプロマ・プログラムの基礎となる部分である。CAS の必修は、学問世界以外の生活の重要性を真剣にうけとめ、厳しい学習環境の中で勉強に埋没しがちな気持ちを新たにさせる。国際バカロレア機構の全人的教育、より慈悲深く活動的な市民の育成という目標は、生徒たちが自身を超え、書物を超えて到達するじかの世界にこそ実るものである。

CAS には三つの重要な要素がある。創造性——芸術的活動はもちろん、生徒が企画から実行までを実際に行う創造力をも含み、広く解釈されている。活動——個人、団体スポーツへの参加のみならず、調査・研究旅行や、地域や国際的計画への参加も含まれる。奉仕——地域や社会の奉仕活動を主催すること。数例をあげれば、助けの必要な子どもたちへの援助、病院の訪問、避難民やホームレスの人々との活動などがある。

ディプロマ・プログラムの学生へ多彩な活動メニューを用意するのは、各加盟校で任命される CAS 監督者の責務である。プログラムは IBO 地域事務所によって監督されることになる。生徒たちは 2 年のプログラム期間中に、週三～四時間に相当する時間を CAS 活動に充てることになっている。自己評価システムのおかげで、生徒は CAS に参加することで自分自身にも他者にも得るところがあることを知り、理解と洞察力が身に付くことを評価するようになるだろう。

カリキュラムモデル

国際的カリキュラムの計画者たちは、機構の教育的目標をプログラムそのものの構造や内容へ具体化しようと努めている。ディプロマ・プログラムは卒業必須要件を核とし、そのまわりを六つの学問分野あるいは科目群が取り囲む六角形の形で表される。これらの科目は並行して教えられ、生徒は二つの偉大なる伝統的学問——人文学と自然科学——に触れることになる。

・言語 A1 (グループ 1)

第一言語、厳選された世界の文学の学習も含む

・言語 A2、B、入門 (グループ 2)

多様な環境、レベルに応じた第二現代言語プログラム

- ・個人と社会（グループ3）

歴史、地理、経済学、哲学、心理学、社会人類学、企業と組織、グローバル社会の情報技術、イスラム世界の歴史

- ・実験科学（グループ4）

生物学、化学、物理学、環境システム、デザイン技術

- ・数学（グループ5）

数学上級レベル、数学的研究、数学的手法、高等数学標準レベル

- ・芸術と選択科目（グループ6）

芸術デザイン、音楽、劇場美術、ラテン語、古典ギリシャ語、コンピュータ科学、第三現代言語、グループ3、4からの第二科目、高等数学標準レベル

IBOの承認を得た加盟校の授業科目

ディプロマ・プログラムの生徒は、知識の主要分野に相当する各六つの科目群から一つを選ぶ必要がある。少なくとも三つ、多くても四つの科目が必要となるのが上級レベル(HL)、他は標準レベル(SL)。HLコースでは240時間、SLコースで150時間の授業が必要と言われる。この方法で調整すると、生徒が幅広く首尾一貫したカリキュラムを2年間で深く学ぶことができる。IB様式は、いくつかの国の制度が好む早期の専門化と、他の国々に見られるかなりの幅広さとの間を熟考した折衷案である。カリキュラムの各分野においては、社会に対する活発な働きかけと世界的視野を育てることに重きがおかれている。

必須条件の分類によって、科学志向の生徒が第二現代言語を学ぶことや、語学の才能に恵まれた生徒が実験の手順に親しむことが可能になっている。上級レベルで集中研究を行う科目の設定が柔軟なので、調和の取れた総体的プログラムの中で、個人的に興味のある分野を深く探求したり、大学入試に必要な特別条件を満たすことが可能になっている。

グループ1 第一言語

ディプロマ・プログラムの全学生は、グループ1の言語で上級レベルまたは標準レベルが必修である。80種を超える第一言語は言語A1と称され、母国語が国際的な学生の資格となるという、IBOの方針を通して試験が設けられている。この方針は会話と記述のコミュニケーション能力を高め、補足的に世界の文学を通して国際的なものの見方を教えると同時に、生徒それぞれの第一言語の持つ文学的遺産を尊重するものである。教えられる教師がいない場合は標準レベルにおいてのみ、独学が認められている。

生徒がA1コースで学ぶ教材はかなり広範囲に及ぶ——多彩な文脈や言語構造の特徴を学ぶうちに、言語の豊かさや奥深さを理解できるようになるだろう。会話と記述のコミュニケーション能力と自信が培われる。言語A1グループの暗黙の目標の一つは、生徒が終生文学への関心と上品で豊かな人間の表現を愛するようになることである。

グループ2 第二現代言語

ディプロマ・プログラムの全生徒は、第二現代言語の試験を受ける。選択コースの多様性は、この課程に登録する生徒の語学的背景の幅広さを物語っている。コースでは、伝達方法の学習に基本を置いている。話し手と書き手の間のコミュニケーションと相互作用に

焦点を合わせているのである。グループ2の科目の主な目標は、生徒が勉強した言語を幅広い状況に応じ、様々な目的で使えるようになることである。

すでにその言語の高い能力を持つ者にとって、言語 A2 コースは会話と記述のコミュニケーション技術を、文学作品に触れて様々な表現法において強化し伸ばすことになる。言語 B は、言語を学習する前段階の体験をしながら、伝達方法の学習を通して外国語を学ぶコースになっている。様々な文学的作品、または他の教材に幅広く触れることで、聞く、話す、読む、書く技術の向上をめざしている。

標準レベルにのみある入門 (ab initio) コースは、全くの初心者のための外国語学習コースである。様々な場面での適切な受け答えを可能にすることを大きな目標としている。二ヶ国語が可能な生徒は、グループ2からの科目のかわりに、言語 A1 の二つ目の言語をとることができる。グループ2の言語コースは、生徒の第二言語の表現力を高め、他の科目の学習方法を提示し、異なる考え方に触れさせるものである。それぞれの言語コースにおける知的啓発は、ディプロマ・プログラムの開始段階における生徒の能力を反映するよう考えられている。例えば、その外国語に触れた経験が全くない生徒は、すでに高い能力を持つ生徒が A2 コースで学習するのと同じように、入門コースが興味をかきたてるように。

グループ3 個人と社会

多数の人文科学、社会科学科目が用意されている。グループ3の学科の大切な特徴は、科目の内容が議論を戦わすことができること、また学習には答えの出ないものを許容することを学ぶ必要性があることである。地域的研究と世界的視野を通して、変化と継続、類似と相違の理解を育む。各分野の主な理論、概念、研究は、客観的に評価され、生徒は各科目の方式で学習を進める。

このグループには以下の科目が含まれる——企業と組織、経済学、地理、歴史、イスラム世界の歴史、グローバル社会の情報技術(標準レベルのみ)、哲学、心理学、社会人類学。筆記試験は、英語、フランス語、スペイン語で受験できる。

グループ4 実験科学

この学科では、一般的な実験科学の方法論を理解しながら、それぞれの分野における概念、原理、応用の知識を学ぶことになる。実践的な実験技術も学び、各分野のグループ研究によって協同研究の学習も勧められる。共通のカリキュラムモデルは、グループ4全科目に適用される。このモデルは、全学生が必要不可欠な核心となる部分を学べるように、上級レベル標準レベル両方で同時に提供されている。そして選択科目によってさらに補われる。地域的、世界的な例証の調査を通して、倫理的、道徳的問題意識を育み、社会的な責任感を養う。

このグループには以下の科目が含まれる——生物学、化学、デザイン技術、環境システム(標準レベルのみ)、物理学。筆記試験は、英語、フランス語、スペイン語で受験できる。

グループ5 数学

全学生は数学コースの修了が義務付けられている。生徒の能力レベルや関心度に応じて

選択ができる。各コースは生徒の数学に対する理解を深め、数学的言語を自信を持って使いこなす能力を育てることを目標としている

数学上級レベルは、数学の能力と優れた予備知識をもった学生を対象にしている。ある生徒たちは数学に対する純粋な関心を持ち、問題に挑むことにおもしろさを見出して選択する。一方で、大学での学習に備えて選択したり、物理学、工学、科学技術を学ぶ関連から数学を必要として選ぶ生徒もいる。

高等数学標準レベル（標準レベルのみ）は、大学で数学を選考する予定の生徒を対象にしている。この科目では相当の能力と関心が求められる。数学上級レベルに加えて選択されることが多い。

数学的手法標準レベルは、数学を上級レベルでとる予定のない生徒に、数学的思考の予備知識やほどよいレベルの技術力を与えている。また、化学、経済学、地理、企業経営などの分野へ進む予定の生徒へ、しっかりした基本的数学を教えている。これは数学のテーマを多く含む厳しいコースである。

数学標準レベルは、現実的にはこのディプロマ・プログラムを除いては数学を必要としない、予備知識、才能共に様々なレベルの生徒が選択する科目となっている。科学技術社会で、数学的に要求される技術を発達させ、実生活の場面での応用が重視されている。このコースでは、共同研究の形でかなりの内容の個人研究が義務付けられている。

グループ 6 芸術・選択科目

グループ 6 の芸術グループ、その他の科目群は、本質的にディプロマ・プログラムの学生が個人個人のプログラムに幅広さや深さを増すためにある。このグループには生徒自身の作品製作や、世界的な創造的作品を幅広く探求することを重要視した、芸術デザイン、音楽と劇場美術の科目がある。またこのグループではコンピュータ科学、古典ギリシャ語、ラテン語も選択可能である。

グループ 6 の科目の代わりに、グループ 1 から 4 の中の科目や、グループ 5 から高等数学標準レベルを選ぶこともできる。グループ 3 から 6 の筆記試験は、英語、フランス語、スペイン語で受験できる。

またこの科目の代わりに、学校独自の授業(SBS)から、一科目を取ることを認めている。この特別な選択科目は、標準レベルにおいてのみ認められ、学校独自の必要性や教師の状況で決められるもので、内部で審査され外部で調整される。IBO の承認が必要なこのようなコースは定期的に調査され、IB 卒業試験を前回生徒が受けた実績のある学校のみが提案できる。SBS は、発行されている案内書記載の該当グループの基準を満たしていれば、グループ 3 から 5 の科目の代わりとして承認される。承認された学科の例としては、世界の宗教、平和と対立の研究、チリと太平洋海盆、アメリカの歴史、アジア美術などがある。

生徒の成績評価

IB の評価で最も大切なのは、世界共通の基準によるという点である。加盟校は世界中にちらばり、試験委員の出身も文化や学問の伝統が様々に異なっている。しかし、機構は確

立した基準をもって生徒の成果を評価している。その基準は場所を変え、時を変え首尾一貫したものとなっている。

生徒の成績について公正な判断を下す責任は、国際的権限をもつ試験委員長に率いられた、2,100名を超す試験委員にかかっている。試験委員は共通の採点法を用い、一定の観点で評価するように養成される。調整——試験委員長による同僚の採点の確認——は同科目の採点者の間で首尾一貫した評価をするために大きな役割を果たしている。

評価法の多様性は、研究成果の中身と過程両方を認め、異なる学習法や文化的形式を考慮に入れることに役立っている。

例によって、コースの終わりには筆記試験がある。筆記試験は第一試験、第二試験の二つに分かれ、時には違う日に実施されることもある。第一試験は一時間半、第二試験は三時間が割り当てられる。従来の外部の試験方式も多様な種類から選ばれている——会話と筆記、長短の応答、資料を基本とする問題、論文、多肢選択問題。

その学科特有の本質にふさわしい専門的な評価方法も用いられる。芸術デザインの生徒は、作品の写真と、才能や技巧の成長を示す文書を入れたファイルを提出する。音楽コースの生徒は演奏を録音したテープを送る。同じように外国語の生徒は、試験委員と交わした会話を録音し、流暢さ、語彙の豊富さ、文法構造について評価される。これは試験の会話部門と呼ばれている。

地方の学校では、外部によるこういった試験方法に加えて、教師が授業全体を通して責任をもって生徒を評価する内部評価も補足される。これはIBの総体的評価方法において重要なことである。なぜなら教師に専門的な役割を認め、生徒には最終試験というプレッシャーの中ではなく、普段の授業の中で自分を発揮する機会を与えることになるからである。内部評価は、学科の最終評価に20%程度加味される。教師による評価方法は学校ごと国ごとに多岐にわたるので、IBOがこの評価を国際的な等価性を維持するための調整を行う。この過程は内部評価の外部調整と呼ばれる。

内部評価には、当然教室での成果、宿題、特別プロジェクト、ノートなどの評価が含まれる。実験科学のような科目では、チームワークを学び、研究過程を管理し、結果をまとめ上げる責任を共有するため、グループで協力する作業もある。

国際バカロレア機構の成績評価システムは、ある基準を参考にしている。これはある学期の試験から次の学期へと首尾一貫した明確なレベルをもって生徒の成果を測るものである。最高点は、与えられる学生の割合が単純に前もって決められているわけではなく、習得した知識や技術が一貫した基準に応じて考慮される。明確な根拠があり、信頼できて、公正なこと、これがIBOの国際的評価戦略のモットーである。

試験委員長は各学期終了後に、各科目の評価の監督と、一群の生徒への成績を確定するために集まる。全ての結果が集められると、IBOでは病気や家族の死、または試験が戦争や不穏状態の最中にあったと報告のあった生徒の成果をもう一度見直す。個人記録が用意され、生徒が結果を達成できる可能性があり、何らかの埋め合わせ措置を取るかどうか審査される。この慈悲深い再調査は、彼らの力ではどうすることもできない理由で、不当に不利な状況となる生徒をなくすためである。

担任と国際試験委員とIBOの専門スタッフが協力して、生徒が知識とコミュニケーション能力を表現できる十分な機会を確保することを目指している。このシステムは複雑で、

あらゆる部署で膨大な作業を伴うが、しかし、このシステムこそが成績評価に将来のかかっている生徒の公正な扱いを生むのである。

段階評価

各試験科目には、1(最低)から7(最高)の段階がつけられる。卒業するためには、明確な基準に照らして、最低でも24点を得た上で三つの卒業要件を満たさなければならない——知識の理論、論文、CAS活動である。

最低点24点は、各科目において段階4を及第レベルにするという見解に基づいている。全体を通して成績に適用される明確な規則は、15ページから始まる総則の項目を参照されたい。最も優れた成績は、各6科目でそれぞれ7点を獲得した場合42点となる。

卒業の最高点は45点である。知識の理論と論文合わせた上で、3点まで与えられるシステムになっているため、この成績の3点が加味されるのである。知識の理論と論文の質は、評価基準をもって審査され、5段階に評価される——初歩的、並、可、良、優。この基準を様々な点から説明している印刷物は、IBO事務所で入手できる。

卒業資格

通常学生は、二年の準備期間を経て最後の学期に試験を受ける。しかし中には、一つ二つの試験を一年目の終わりに受けるものもある。このように二つの学期に渡って試験を受ける生徒は、一回目の試験では先行受験の生徒として分類される。彼らはその科目が標準レベルであり、指定された授業時間を満たしていた場合に、二つまで試験を受けることができる。グループ2入門言語コースの試験は、生徒のプログラム最終年にのみ受験できる。

全生徒は、ディプロマ・プログラムの全てに力を注ぐことを奨励される。必要条件を全体的に満たすことができない生徒、あるいは選択した科目が六科目未満の生徒は、試験を終えたという修了証書のみ授与される。五月の試験期間に大多数の生徒が試験を受ける。それほど多くはないが、主に南半球の学校向けに、十一月の試験もある。年に三万人近い生徒がIBOの評価を受けている。各年ほぼ80%の生徒がディプロマの取得に成功している。

認可と学校の役割

国際バカロレア機構が公認したセンターでのみ、カリキュラムを教え生徒の試験登録をすることができる。IBディプロマ・プログラムの生徒は、公認の加盟校において成績優良であることを求められる。ディプロマ・プログラムは現在世界94カ国の国で約700の学校で提供されている。プログラムの参加に興味のある学校は、管轄の地域事務所を通して自ら調べ相談することになる。正式な申込みには、現場の訪問調査とスイスのIBO本部へ

の書類提出が必要である。学校側は加盟に際してある基準と条件への同意を求められる。IBOの公認校のみが機構の名称、ロゴ、そしてディプロマ・プログラムの称号を使うことが許される。

このプログラムは、加盟校と国際的試験委員団、IB専従スタッフの協力が大きな特徴である。学校側は継続的に行われているカリキュラム改善会議や、地方会議、研究集会を通して、ディプロマ・プログラムの開発に全面的に参加する。科目の段階評価会議や最終評価委員会に教師自らが陪席することで、評価の過程の複雑さをさらに深く理解、認識することが可能になる。

大学の認可

国際バカロレアの卒業生は、世界各地の単科大学や総合大学への入学を許可されている。この中には、オックスフォード大、イェール大、ソルボンヌ大や、ラテンアメリカやアジア・太平洋地域の名門大学もある。さらに最近世界の開発途上地域に創設された施設も含まれている。IBOと多くの教育省庁、民間機関の間には正式な協定が結ばれている。中には、IBでかなりの好成績を修めた生徒に、上級学年での受け入れや、科目の履修単位の認定を与える大学もある。機構は地域別に、正式に承認を得た大学の案内書を、定期的に更新して刊行している。

総 則

これらの規則は、毎年国際バカロレア機構(IBO)によって更新され発表される。1997年9月1日から効力をもち、1998年5月の試験へと至るIBOディプロマ・プログラムへこの規則が適用された。次の告知が出るまでその後の試験全てに適用されている。

第1条 志願

志願者は、IBO公認の加盟校へ登録し、IB試験受験資格を得るために、ディプロマ・プログラムの科目を履修しなければならない。各学生は試験時に学校において優秀でなければならない。

第2条 ディプロマ・プログラム

1項 科目

ディプロマ・プログラムは二年間の学習コースである。学生は六科目を申し込み、通常二年に渡って学習を進める——最低三つ、最高四つの科目が上級レベルで、他は標準レベルで提供されなければならない。通常この六科目は六つの科目グループから一つづつ選択しなければならない。

例外：以下の場合申し込みが可能

- ・グループ 2 の科目の代わりに第二言語 A1 をとる場合
- ・グループ 6 の科目の代わりにグループ 1 から 4 の中から二つ目の科目を選ぶ場合
- ・グループ 5 の数学上級レベルに加えて高等数学標準レベルをグループ 6 の科目としてとる場合

禁止事項：以下のとり方はディプロマの単位としては認められない

- ・同じ科目を上級、標準両方のレベルでとる場合
- ・グループ 1 と 2 で同じ言語をとる場合
- ・環境システムと生物学をとる場合
- ・グループ 5 から二つの科目をとる場合。ただし、数学上級レベルと高等数学標準レベルを除く
- ・学校独自の授業を二つ以上とること

新科目や、学校独自の授業が IBO により承認されて、新たな禁止事項が増えた場合は学校へ通知される。

授業時間

- ・上級レベルで 240、標準レベルで 150 の授業時間が求められる。一授業時間は、60 分である。

2 項 卒業要件

学生は六つの科目の修了に加えて、三つの必要条件を満たさなければならない。

二年間のディプロマ・プログラムで、最低でも 100 時間を占める知識の理論の授業をとり、基準に達しなければならない。

創造性、活動、奉仕(CAS)として知られる特別活動にも従事する必要がある。ディプロマ・プログラムの学生を受け入れた学校は、週に 3、4 時間の CAS 活動を保証しなければならない。CAS プログラムの評価は、IBO の地域事務所が行う。

また、かなり大部の個人研究論文を作成し提出しなければならない。テーマは、論文を書けるディプロマ・プログラムの科目のうちから一つを選び、一般的と同時に科目特有の基準に照らして評価を受ける必要がある。この作業には学校内の適任教師の直接監督のもと、ほぼ 40 時間を費やすことが望ましい。論文提出が可能な科目一覧は、IBO から入手する。

3 項 例外措置

高等教育機関への入学など特別な理由で、1 項で明記した内容と異なる科目の選択が必要な場合、IBO へ適切な証明書類を提出することで、適当な科目の代用が許可される場合もある。

第 3 条 試験の言語

グループ 3、4、5、6 の全ての試験は英語、フランス語、又はスペイン語で受験できる。外部評価を受けるグループ 3、4、5、6 の試験と知識の理論は、通常全て英語、フランス語、又はスペイン語でなければならない。内部評価と外部評価の言語も通常統一されているべきである。文学あるいは言語についての論

文は、テーマに選択した言語で書かなければならない。グループ 3、4、5、6 からテーマを選んだ論文は通常、英語、フランス語、又はスペイン語で書かれる。

第 4 条 先行受験

ディプロマ・プログラムの学生は、通常二年間の最後の学期に全ての試験を受ける。課程一年目の最後には、二つまでの科目であれば、それが標準レベルであり、第 2 条で定義された指定の授業時間を満たしていることを条件に、試験を受けるという選択ができる。このように二つの学期に渡って試験を受ける生徒は、一回目の試験では先行受験の生徒として分類される。先行受験する学生は、翌年の同じ学期に全ての卒業必要条件を完了しなければならない。グループ 2 の言語入門コースの試験は、ディプロマ・プログラム最終年にものみ受験できる。

第 5 条 再取得

第 4 条の適用を受けて、すでに卒業に向けて試験を受けた生徒が、翌年もう一度試験を申し込むことが認められている。これは、前回の結果を改善するため、あるいは新しい科目へ挑戦するためのどちらかである。三回以上の受験は認められない。この場合、どの科目においても獲得した点数は卒業証書の得点に加味される。このような学生は、再取得の学生と分類され、高得点を残した学期の結果が認められる。

第 6 条 試験の遂行

ディプロマ・プログラムと試験運営を管理する規則と委任された手続きは必携便覧に載っている。その中には、問題用紙の郵送と分類、内外的評価活動と試験日程の管理などの業務が含まれている。試験の再日程調整は、例外的な状況があった場合にのみ、事前に IBO の同意を得た上で認められる。規則違反があった場合その学生は資格を剥奪され、ディプロマ・プログラムに参加しているその学校の認定も撤回される。

第 7 条 最終評価

段階評価の最終決定は、各科目の試験委員長、あるいは該当する成績評価委員会の試験委員の責任にゆだねられる。卒業証書は、最終評価委員会から IBO 財団理事会へ託される。

ディプロマの資格を満たすためには、通常、全評価対象が各科目ごとにそろっていないなければならない。最終評価委員会は、不利な状況に影響された生徒の成果については再調査することになる。学校側にはこのような不利な状況が起こった場合、結論を出す前に文書で IBO へ連絡することが義務付けられている。通常、外部の評価構造を少なくとも一つ加味しても評価されたものが 50% 以下だった場合、どの科目においても成績はつけられない。

最終評価委員会は、IBO が発表している方針や手続きに基づいて、不正行為ではないかと疑いがある場合は必ず調査を行う。

第 8 条 結果

ディプロマ・プログラムの科目には、1 (最低) から 7 (最高) の段階がつけられる。通常各科目評価の 20% は教師による内部評価で IBO により外部で調整される。知識の理論と論

文を合わせて、最高3点が与えられる。よって、ディプロマ・プログラム最高得点は45点となる。

成功した学生は正式なIBのディプロマと、総合点、各科目の段階、知識の理論と論文の得点が明記された書類を受取る。

第9条 ディプロマ授与

ディプロマは、24点を上回る得点を残したものに与えられる。

- 1項 段階評価がディプロマ・プログラムの六つの科目に与えられる（第2条参照）
- 2項 知識の理論を修め、評価基準を満たしている
- 3項 論文が提出され評価されている
- 4項 学生は適切な、創造性、活動、奉仕(CAS)の活動に従事していた
- 5項 上級レベルでとった科目に1の評価がない
- 6項 24から27点までの学生の場合、落第条件が一つもない
- 7項 28点以上の学生の場合、落第条件は一つまで
- 8項 最終評価委員会が、学生の評価過程において不正に良い成績を取ろうとした違反行為を確認していない

落第条件 学生が以下の落第条件の一つでも当てはまる場合、卒業証書は授与されない。

- 9項 知識の理論、論文両方とも初歩的という評価だった場合
- 10項 上級レベルでとった科目で2の評価があった場合
- 11項 上級レベルで3の評価をとった場合、他の上級レベル科目での5ないしそれ以上の評価でも埋め合わせにはならない
- 12項 標準レベルで1の評価をとった場合
- 13項 標準レベルで二つ以上2をとった場合
- 14項 3の評価を四つ以上とった場合
- 15項 標準レベルに2がある場合で、3が二つ以上ある場合

第10条 二ヶ国語卒業証書（バイリンガル・ディプロマ）

二ヶ国語卒業証書は二つのタイプの学生に授与される

- 1・・・言語A1で二つの言語を取得した、あるいは言語A1とA2を取得した場合
- 2・・・グループ3または4の最低でも一つの科目の試験を、言語A1で取得した言語と別の言語で受けた場合

第11条 修了証書

卒業証書の授与に必要な条件を完全に満たすことができなかった学生は、個々の科目で得た結果が明記された修了証書を受取る。論文、知識の理論、CASには修了証書は授与されない。

第2条で述べた六つの科目以上に申し込みを望む学生は、追加した科目につき、上級レベル、標準レベルを問わず、追加修了学生として登録される。

ディプロマを求めない学生は、各科目の授業時間(第2条)を満たす条件で、数科目の受

講を認められる。このような学生は修了学生として区別され、獲得した成績が記録された修了証書を受取る。後にこの成績をディプロマの獲得に使うことはできない。

第 12 条 独学

独学の選択が可能なのは、言語 A1 標準レベルにおいてのみである。この選択は 5 人以上の学生が希望した場合は不適切である。以下の状況の場合のみ、学生は独学として言語 A1 の標準レベル試験に登録できる。

- ・その言語を教えられる教師がいない場合
- ・外部の先生、個別教師が、グループ 1 の内部評価要件を満たすほど、頻繁に定期的に生徒に会えない場合

独学の学生は、通常、文学や言語に関する論文を A1 で取得した言語で提出することは認められない。

第 13 条 IBO の所有権

全ての試験、問題用紙、答案、文書、教材、授業概要、フィルム、テープ、ビデオテープ、写真、図画、資料、計画、芸術作品、デザイン、どんなものであれ、採点、調整、評価などのために国際バカロレア機構へ提出されたもの、これらの所有権はすべて IBO にある。

第 14 条 責任ある道徳的行動への期待

知的な厳格さと高い学究的な基準を超えて、IBO は国際理解と責任ある市民という理想を最重要視している。道徳的な行動への期待は、ディプロマ・プログラムに固有成りかつ明白な哲学と価値観から生まれるものである。生徒、教師、校長、そして試験委員がこれらの価値観を模範となる行動で示すように努力してもらいたい。

IBO は、学生が学校によって定められ、要求されるカリキュラムに参加していくことを望む——全科目の主だった規則と学校内の最終期限を守り、二年間に渡るディプロマ・プログラムを完了する。評価のための課題に他の人の作品や考え、着想を取り入れる場合は、それははっきり認めること。異なる評価構造の必要条件(例えば論文と内部評価)を達成するために、個々の課題を提出すること。そして、いかなる形によれ、他の学生の課題として評価される可能性を知りながら、自分の課題を他人に提供しないこと。生徒が試験についての機密情報をやり取りすることは、資格剥奪につながる違反行為である。IBO との全ての連絡は、必ずコーディネーターが仲介することを認識する。

IBO はディプロマ・プログラムの教師がその科目の適切な養成を受け、IB 科目ガイドに提示されたカリキュラムと評価に必要な知識を持つように願う——学生にその科目の現在の内容と必須項目を確実に教えることができるように。そして IB コーディネーターに認められた学校内の最終期限を守るようにしてもらいたい。また、教師は学生の課題見本や内部評価の点数や予想される評価などの、コーディネーターに必要なあらゆる情報を報告し、IB 評価基準に照らして学生の課題を評価し、そして評価を受けるための提出物が確実に学生本人のものであるように努め、不正行為が疑われる場合はコーディネーターに報告する。

IBO はコーディネーターに、教師が現在の各科目のカリキュラムや評価必要条件を確実に把握し、適切な印刷物や資料を入手できるよう手配を望む。また必携便覧手続きマニュアルの全ての項を熟知し、試験の全条件の完全な遂行を確実に行うように求める。IB コーディネーターは全学生の登録を確認し、全ての書類の正確を期し、その情報を IBO、あるいは定められた住所に送り、IBO へ提出した情報のコピーを保管する。学生の学習に影響を及ぼすような何か不利な状況が生じた場合は、生徒の代理として報告を行う。IBO のサービスが行きわたるようにし、また必要に応じて IB 事務所と連絡をとり、試験結果を学生に伝える役も担う。

IBO は学校長に、ディプロマ・プログラムが総則に従って正しく資金提供と援助を受け、効果的に進められ運営されるように望む。また、プログラムの運営のために、豊かな経験をもつ IB コーディネーターと、特別活動の計画、監督のために経験豊富な CAS コーディネーターを任命する。ディプロマ・プログラムのため適任の教師を配置し、彼らに現在のプログラムの内容と必要条件について理解を深める IB 養成講習会へ出席する機会を与える。また授業料の徴収、IBO への支払いについても責任を持つ。

IBO は IB 試験委員に、試験に関するあらゆる機密情報の保持に努めることを望む。生徒の提出物を丹念かつ徹底的に評価し、割り当てられた全ての業務を自ら実行し、IBO により定められた期限と手続きを遵守する。また加盟校や学生と個人的接触がある場合や、職や住所など業務の割り当てに支障をきたすような変化があった場合、IBO へ報告することになっている。

第 15 条 規則違反

IBO は、学生が評価課程において不当に有利になろうと試みることを、不正行為として定義している。共謀は、学生が、自分の課題が他人のものとして提出されることを認める場合。剽窃行為は、他人の作品や考え、着想をそうと認めず自分のものとして提出することと定義されている。

学生が IB 試験についての機密情報をやり取りすることは規則違反である。違反した場合資格剥奪となる。不正行為、共謀、剽窃行為などの恥ずべき違反行為が発覚した学生は、その科目の評価がなされないばかりか、通常今後一切のディプロマ・プログラムの試験を受験できない。

試験委員や加盟校が不正行為に係わった場合は、関係者に警告文書が送られる。試験委員は契約を切られ、違反行為が発覚した学校はディプロマ・プログラム参加認定を取り消される場合もある。

第 16 条 加盟校の基準と条件

加盟校は国際バカロレア機構の目標と実践によって示される教育を通して国際理解の促進を委ねられる。そしてディプロマ・プログラムの根本的重要性とバランスのとれた学究的プログラムを受け入れ、また、知識の理論の中心的役割と CAS 必要条件の重要性、教育と生徒の個人的資質向上の強調、専門的養成講習会や教師や学校経営者のための会議など支援活動への参加をうけいれる。

学校は、教授陣、運営スタッフ、その他 IB ディプロマ・プログラムを効果的に運営す

るために必要な力を備えていることを IBO に示す。IBO では世界各地の学校それぞれが持つ力に大きなばらつきがあると認識しており、例えその準備期間が長期にわたるとしても、この問題についての合意は双方の協議と指導が必要と考えている。申し込みの時点で認められる不備な点は IBO により文書で説明され、予定はそれに従い修正される。

学校は適切な文書によって法的な立場と財政的な実行力を証明する。

学校は IBO への参加について、その地方、地域、国家の関係当局が同意しているという証明を求められる。

学校は IBO 運営委員またはその代理人の訪問を受け入れる。そして、全コース、試験、内部評価の正確な遂行、IB コーディネーター、CAS コーディネーターの任命、全授業料とその他請求金額の速やかな支払い、を含む IBO の全総則の完全な受諾を正式に同意する。

国際バカロレア機構の方針は、全生徒が完全なディプロマ・プログラムに取り組むことであり、従って、応募してくる学校は適正な範囲の教授科目と全てのディプロマの必要条件を提供する準備が整っている必要がある。申し込み段階の準備状況に応じて、学校は次の三つのカテゴリーに分類される。

- ・ ディプロマ・プログラムの授業を認可される加盟校
- ・ ディプロマ・プログラムの完全な提供を控え、IBO 事務局長が定めた暫定期間中ある特定のコースのみ認可される加盟校
- ・ 通常一年以内の間、上記二つのカテゴリーのような教育を可能にするため準備期間を設ける提携校

IBO はどの加盟校についても定期的に再調査を行い、懸念や批判は速やかに文書にして通達している。IBO が不備な点が改善されたと認めなかった場合は、翌年末をもってディプロマ・プログラムを提供するための認可は取り消される。また深刻な不正行為が行われたと執行委員会が判定を下した時点でも取り消される。このような場合、ディプロマ・プログラムをすでに登録した生徒の権利を守るための考慮は、当然必ず払われる。

学校あるいは同じ学校の一部門は別個の存在として認められる。この条件は授業料の支払いについてもあてはまる。

教育は自校の生徒だけに認められる。試験に関しては、何かの事情でもとの学校の試験に出席することができない再取得の学生の場合のみ、他の学校の登録者、あるいは校内の他部門の生徒の受験が許可される。加盟校は非加盟校の生徒を IB 試験に登録することはできない。

IBO に承認された学校のみ、機構名、ロゴ、ディプロマ・プログラムの称号を用いる資格が与えられる。

国際バカロレア機構は、その学校の哲学、方針あるいは実践が IBO のそれにそぐわない場合、加盟を拒否する権利を保有している。

ディプロマ・プログラムのいくつかの例

IB ディプロマ・プログラムは学究的に厳格である。深さ、幅、首尾一貫性、そして国際性を特色とするこの厳しい学習体験を、自発的に求め挑戦する意志を生徒の参加は示して

いる。この課程は、生徒が現在の関心や将来の必要性に応じて科目やレベルを選択できるように、十分に柔軟なものになっている。以下に続く架空の学生の話为例にして、様々な出自の生徒が手にする可能性の広がり説明しよう。

ケイト・エヴァンス

<上級レベル>	評価	<標準レベル>	評価
英語 A1	5	日本語 B	6
ヨーロッパの歴史	5	環境体系	4
美術デザイン	6	数学	3

論文：歴史一良 知識の理論一良 2点
 全 CAS 必要条件取得
 総合点 31点 <卒業証書授与>

ケイトはオーストラリアでウェールズ人両親のもとに生まれ、母親の仕事の関係で数年間日本に暮らした。メルボルン大学で歴史を学ぶことを志していたため、歴史を上級レベルに、地域研究にはヨーロッパを選択。彼女の高校で正式にグループ2の授業として開設されたばかりの日本語 B を標準レベルで選択した。論文はオーストラリアの歴史をテーマに書くことで、歴史の専門知識を増やし、美術デザインの才能を上級レベルにおいて示した。彼女はディプロマ・プログラム一年目末の試験で標準レベルの環境体系と数学を受験。女子ダイビングチームの一員でもあり、近隣清掃の日を地域社会奉仕の一環として主催している。

マリア・ムノス・ロドリゲス

<上級レベル>	評価	<標準レベル>	評価
スペイン語 A1	5	英語 B	4
アメリカの歴史	6	生物	4
哲学	6	数学	3

論文：社会人類学一良 知識の理論一可 1点
 全 CAS 必要条件取得
 総合点 29点 <卒業証書授与>

マリアはアルゼンチン人の学校へ通った。人道主義者で、上級レベルで哲学と歴史を選び、歴史ではアメリカ地域研究も選択した。上級レベルでスペイン語 A1 を選択、英語 B はグループ2の必須条件を満たすために選んだ。グループ3から6の試験解答と論文、知識の理論はスペイン語で提出。論文では、彼女のディプロマ・プログラム科目ではなかったが社会人類学をテーマにした。ホッケーチームに所属し、南半球の慣例で全ての試験を

5月ではなく11月に一回で受けた。

ミッシェル・エドラー

<上級レベル>	評価	<標準レベル>	評価
英語 A1	6	歴史	5
フランス語 A1	6	デザイン技術	4
ドイツ語 B	5	数学	5

論文：英語 A1—良 知識の理論—良 2点

全 CAS 必要条件取得

総合点 33点 <二ヶ国語卒業証書授与>

フランスとオーストリアの二つの国籍を持つミッシェルは、カナダでフランス語を話す家庭に育った。そして二つの言語を上級レベルに選択。ドイツ語 B も上級レベルで習得している。これにはオーストリアに住む父方の親戚と、時々休日と一緒に過ごした経験が影響している。ミッシェルは二ヶ国語卒業証書を授与され、トロントかパリの大学で語学を勉強する予定である。論文では英文学を選びさらに専門分野の能力を実証した。論文と知識の理論両方で2点平均を上回る成績で2点を得ている。六科目全ての試験を一回で登録し、CAS 必要条件も校内の文学雑誌とクラス年報の編集者としての活動で満たしている。

アラル・アル・アシード

<上級レベル>	評価	<標準レベル>	評価
化学	6	アラビア語 A1	6
物理学	7	英語 B	5
数学	5	イスラム世界の歴史	5

論文：物理学—優 知識の理論—並 2点

全 CAS 必要条件取得

総合点 36点 <二ヶ国語卒業証書授与>

アラルは母国ヨルダンあるいはアメリカの大学で、技術者になる勉強を目指している。物理学、数学、化学を上級レベルで取り、論文もまた物理学であった。グループ3から6の試験は英語で受験し、母国語がアラビア語だった彼は二ヶ国語卒業証書を得た。優をとった論文と満足なできであった知識の理論を合わせて、総合点36点のうち2点を獲得した。彼は身体障害をもつ子どもたちへのボランティア活動を続けていく予定である。ヨルダンのCASプログラムを通して、彼はこうした活動を高く評価するようになった。

オリヴァー・トニー

<上級レベル>	評 価	<標準レベル>	評 価
フランス語 A1	5	生物学	4
英語 B	3	数学的手法	4
ヨーロッパの歴史	3	コンピュータ科学	4

論文：フランス語 A1—良 知識の理論—良 2 点
全 CAS 必要条件取得
総合点 25 点 <修了証書授与>

スイス国籍を持つオリヴァーはフランス文学に興味を持ち、上級レベルでフランス語 A1 を選択し、論文もこの科目について書いている。ジュネーブの学校へ通った彼は、第二言語として英語を習得。英語 B を上級レベルで取ったが他の試験をフランス語で受けたため、二ヶ国語卒業証書は授与されなかった。全ての試験を一回で受けた彼は、心配していた標準レベルの科目についても好成績を残した。論文も知識の理論も良を修め 2 点を取得、総合点を 25 点とした。しかし、最低レベルの 24 点を上回りはしたものの、卒業はできなかった——上級レベル科目の 3 の評価を 5 の評価で埋め合わせることはできなかった。オリヴァーはロンドンで一年過ごした後、来年 5 月に再び英語の試験を受ける予定である。彼の評価が 4 あるいはそれ以上に伸びれば卒業証書が授与されるだろう。

ムライカ・アブラハム

<上級レベル>	評 価	<標準レベル>	評 価
経済学	6	マライ語 A1	5
物理学	4	北京官話入門	6
数学	7	高等数学	6

論文：数学—良 知識の理論—並 1 点
全 CAS 必要条件取得
総合点 35 点 <二ヶ国語卒業証書授与>

ムライカの主要な学術的関心は数学にある。彼女は上級レベルで数学を取り、論文もこの科目について書き、さらにグループ 6 からは高等数学を選択している。グループ 3 では経済学を上級レベルで選び、また母語のマライ語に加えて、北京官話入門も選択。語学以外の試験には英語で解答。論文と知識の理論合わせて 1 点を獲得、総合点 35 点となり、二ヶ国語卒業証書が授与された。彼女はクアラルンプールの学校において課程の一年目が終わった後、先行受験をして言語学 A1 の試験を登録した。

スタン・ロサック

<上級レベル>	評 価	<標準レベル>	評 価
英語 A1	5	ポーランド語 A1	5
心理学	5	化学	4
音楽	7	数学的手法	5

論文：音楽一優 知識の理論一可 2点

全 CAS 必要条件取得

総合点 33点 <二ヶ国語卒業証書授与>

スタンは四年前にポーランドからシカゴへ来て、あっという間にジャズに夢中になった。英語 A1 を上級レベルでポーランド語 A1 を標準レベルで取り、ポーランド語の方は学校に正規のコースがなかったので、市のポーランド人会の先生から個人的に学ぶことになった。彼の芸術的関心は、音楽を上級レベルで選び、論文もこの科目で書いたことによく表れている。一年目には標準レベルでの化学の試験を登録している。スタンは二つの A1 言語を習得したので、二ヶ国語卒業証書が授与された。論文の優、知識の理論の可、これを合わせて総合点は 33 点となった。サクスを演奏するスタンは、ホームレスの施設でボランティアにも参加している。

ワンジル・キマニ

<上級レベル>	評 価	<標準レベル>	評 価
英語 A2	7	スワヒリ語 A1	7
アメリカの歴史	7	フランス語入門	7
生物学	6	数学的手法	6

論文：スワヒリ語 A1一優 知識の理論一優 3点

全 CAS 必要条件取得

総合点 43点 <二ヶ国語卒業証書授与>

ワンジルは生来語学の才能があり、グループ 1 から母語のスワヒリ語を標準レベルで、グループ 2 から英語 A2 を上級レベルで、そしてグループ 6 の選択科目からフランス語入門を選択。論文は現代のケニヤとイギリスの著者を比較した文学論だった。A1 と A2 両方の言語の申し込みをしたので、二ヶ国語卒業証書の資格を持った。一年目には先行受験をして数学的手法を標準レベルで取った。知識の理論と論文共に最高点を修め、総合点 43 点という際立った成績を残した。ワンジルはナイロビ郊外の村で子どもたちに英語を教えるかたわら、大学生として地域の奉仕活動も続けていく予定である。

チィ・ラン・シュー

<上級レベル>	評 価	<標準レベル>	評 価
---------	-----	---------	-----

中国語 A1	5	英語 B	6
経済学	6	数学的手法	5
生物学	4	アジア美術	6

論文：企業と組織—良 知識の理論—並 1点

全 CAS 必要条件取得

総合点 33点 <二ヶ国語卒業証書授与>

特別修了証書—包括的社会的情報技術 標準レベル 5

チィ・ランは課程の初めから、彼女自身の将来について決めかねていたため、選択の幅を広くしておくことにした。台湾生まれの彼女は中国語 A1 を上級レベルで、そして英語 B を標準レベルで選択。論文は経済学での研究成果を自然に補う形で企業と組織をテーマに提出した。グループ 3、4 の試験を A1 で取った言語と異なる言語で受験したので、二ヶ国語卒業証書の資格を得た。チィ・ランが選択したアジア美術のコースは、IBO が彼女の高校に設置を許可したもので、学校独自の授業(SBS)として登録されているものである。多才な生徒である彼女は 33 点を獲得し、さらに標準レベルにおいてグローバル社会の情報技術(ITGS)の特別証書を授与された。彼女は友人と一緒にインターネット上でアジア美術を売買する会社を立ち上げようとしている。

サンジヴ・タンドン

<上級レベル>	評価	<標準レベル>	評価
生物学	5	ヒンディー語 A1	4
化学	6	英語 A2	4
数学	5	物理学	5

論文：生物学—初歩的 知識の理論—良

全 CAS 必要条件取得

総合点 29点 <二ヶ国語卒業証書授与>

サンジヴは、ノルウェイのインターナショナルスクールに通うインド人の生徒である。将来は医者になることを希望し、彼が選んだインドの医学校へは三種の実験科学の履修が必要だった。IBO は課程の始めに例外的な措置を取り、グループ 3 の科目の代わりに、三つ目の科学科目の履修を認めた。彼はヒンディー語 A1 と英語 A2 を選択し、二ヶ国語卒業証書の資格を得た。論文は初歩的と判断され、得点は与えられなかったが、それでも総合点は 29 点を獲得した。彼は応急手当クラスのリーダーであり、またパキスタン、ニュージーランド、イギリス、そしてカリブ諸島の生徒たちが作るクリケットの非公式リーグでも活躍している。

スティーブ・ジョンソン

<上級レベル>	評 価	<標準レベル>	評 価
英語 A1	5	スペイン語 B	6
化学	7	歴史	6
数学	6	ラテン語	5

論文：化学一良 知識の理論一優 3点

全 CAS 必要条件取得

総合点 38点 <卒業証書授与>

スティーブは米国南東部フロリダの公立高校に通う意欲的な生徒である。将来の職業をまだ確実に決めてはいないが、公衆衛生と政治の分野に関心を持っている。今のところ彼の目標は一流の大学へ入学することである。彼の高校はスペイン語に特に力を入れていて、彼もスペイン語の能力が将来自分の強みになることを理解している。グループ6ではラテン語を選択。それほど関心はなかったが、一年生の歴史の授業がきっかけとなり、また医学の道へ進む際には実際的に役立つだろうと考えるようになった。テニスには競争心を持つてのぞみ、マイアミにあるエイズ患者のホスピスでボランティア活動も行っている。

国際バカロレア機構の歴史と運営

国際バカロレア機構(IBO)は、スイスの民法典に則った、ジュネーブに本部を持つ財団である。民間の非政府組織である機構はヨーロッパ評議会により承認され、UNESCO(国連教育科学文化機関)の諮問機関でもある。

1960年代に設立したIBOは、地理的に移動する生徒たちに共通のカリキュラムを作り、大学入学の資格証明書を与えようという国際的な学校の努力から生まれた。現実の問題を超えて、国際的教育者たちは理想的未来像を描くことで動機を得た——彼らは客観的な考え方を強める学究的体験を共有させ、多様な観点に触れさせることにより、若者の間に寛大さや相互の文化理解を育てることを目指した。中等学校の最終の二年間に集中する幅広いカリキュラム——バカロレアに導くような——の設置が求められた。それはどんな国でも採用可能であらゆる国の大学で承認されるものとなる。

20世紀基金やフォード財団の助成金、その他の援助によりこの課程は発展してきた。始めは1965年に国際学校試験評議会(International Schools Examination Syndicate)として創設され、独立した団体として国際バカロレアという名称になったのは1967年である。調和のとれたカリキュラムと高い評価基準により、ディプロマ・プログラムは国際社会に貢献するという当初の目的のもとに発展を続け、現在では加盟校は地球規模の広がりを持つ。1992年に中等課程プログラム(Middle Years Programme)、1997年に初等課程プログラム(Primary Years Programme)が加わっている。

IBOは、年に一度開かれる30名からなる財団理事会によって運営されている。会員は管理者側、加盟校、その他の人々から選ばれる。事務局長は執行部役員の長であり、ジュ

ネーブから機構の活動を監督している。カリキュラムと評価活動はイギリス、ウェールズの首都、カーディフに本拠地が置かれている。ニューヨーク、ジュネーブ、ブエノスアイレス、シンガポールの地域事務所ネットワークが各加盟校へ業務の提供を行い、ストックホルム、シドニー、ムンバイ、横浜、アマン、ナイロビ、メキシコシティ、モスクワの代表者が補助している。

専門的サービス

教師の育成と説明会

世界のすみずみに広がる IBO 地域事務所のネットワークは、毎年職員を配置して、教師育成行事や説明会を開催している。この情報は、国際バカロレア機構の機関紙「IB World」に定期的に載せられ、近くの地域事務所でも入手可能である。

印刷物の提供

全科目に対する多様な補助教材一覧の載っている出版物カタログは、機構のどの事務所においても入手が可能である。注文はカーディフの事務所で処理・発送される。学校名簿や年報、広報用ポスターやパンフレットなどの一般的な書類も購入できる。「IB World」は年に三回刊行されている。

進む電子化

IBO は、IBNET といわれる IBO 独自の世界的なコンピュータネットワークを保持している。このネットワークの大きな利点は、各事務所や他の IBNET 加入者への電子メールの送付、試験登録と結果の送受信、報告書や生徒、科目、試験リストの提示、他の IB 加盟校の情報へ直接アクセスが可能になったことである。加えて、インターネット上では機構の Web サイト (<http://www.ibo.org>) を開設、また E メール info@ibo.org の質問にも応じている。

ヘルプ・デスク

試験や IBNET の使用に関する問い合わせには、カーディフの事務所でヘルプ・デスク職員が迅速かつ詳細に対応している。このデスクは、機密データの安全性の維持と同時に、学校側と生徒の要求に応じる責任という顧客サービスの方向性を反映している。加盟校は E メール (help@ibo.org)、または電話 (+44 1222 774 000 fax+44 1222 774 001) でヘルプ・デスクに連絡を取るよう勧められている。

(International Baccalaureate Organisation.(July 1977). Guide to the Diploma Programme の翻訳)

IB & AP

アドバンスト・プレースメント・プログラム® 国際バカロレア®

アドバンスト・プレースメント・プログラム®とは何か

アドバンスト・プレースメント・プログラム® (AP®)は、積極的な高校生を対象に大学レベルの教育課程を実施する意欲的な教育プログラムです。AP プログラムはアメリカの教育団体カレッジ・ボードによって 1955 年に創設されたもので、中等教育機関と大学とが共同で行う教育活動です。AP 課程を修了した高校生は、AP 試験で適切な評点を得ることにより、教科の能力水準が証明されます。

米国では、優れた学力を示す標準として AP が認められていて、中等教育機関のほぼ 60%がこのプログラムに参加しています。試験の評点が適切であった AP の科目は、大半のアメリカの大学で単位、アドバンスト・プレースメント（上級学年生として認められること）、またはその両方の資格要件として認められています。しかも、AP 科目と試験の評点は米国以外の国でも約 300 の大学で入学要件として利用されています。

国際バカロレア®とは何か？

国際バカロレア®ディプロマ・プログラム (IB®) は、厳格な大学前プログラムで、課程の最後に 6 教科で能力評価を行います。IB は 1968 年に創設され、内容の深さと国際的な視野を持つことで定評のある意欲的なカリキュラムを行っています。2 年制の IB ディプロマ課程は、一貫性のある高度な教育経験をフルカリキュラムの全体にわたって提供します。IB 課程を履修する高校生は、高校レベルの課程と試験を修了するのみならず、地域活動、個人による研究、知識の本質の探究を行うことも求められます。

IB ディプロマは、102 カ国で大学入学資格として認められています。更に、IB 試験で高得点を取得した生徒は大学での単位取得や特定のクラスへの参加が認められる場合も少なくありません。IB 課程と試験は 133 カ国、1,217 校で実施されています。

AP®国際ディプロマとは何か？

AP 国際ディプロマ (APID) は、米国並びに外国にいる米国人と各国の生徒で米国以外の国の大学への入学を希望する人たちを対象にしています。APID の取得を希望する生徒は、以下の 5 つの教科分野のうち 3 つについて 4 つの AP 試験を受け、評点 3 以上を取得する必要があります。生徒は 2 つの言語 (分野 I)、科学 (分野 II) または数学 (分野 III) のいずれかと、それ以外の

教科から1科目以上の試験を受けなければなりません。

分野Ⅰ：言語

分野Ⅱ：科学

分野Ⅲ：数学（訳注：正しくは数学とコンピュータ科学です）

分野Ⅳ：歴史と社会科学

分野Ⅴ：選択

AP国際ディプロマは、生徒が取得手続きを行う必要がありません。このディプロマは、米国以外の国に居住していて、ディプロマの基準を満たした生徒に自動的に授与されます。米国内に居住する生徒の場合は、APID基準を満たしていて、AP試験結果を海外の大学に送付するように要求すれば、APID証書が授与されます。APIDは米国内の大学で使用するためのものではありません。

IB®ディプロマとは何か？

国際バカロレア・ディプロマは、世界各国で行われている教育制度の最も優れた部分をベースにしていて、世界中の生徒に、どの国の大学でも通用する教育資格認定書を交付するものです。IB評価は多様で、信頼の置けるものであり、IB教育の全課程を通じて行われます。最も重要な評価は一連の試験であり、2001年には157教科で実施されました。それらの教科は以下の6つの教科グループに含まれています。

言語 A1

言語 B、言語 A2、その他の言語の初級

個人と社会

実験科学

数学

芸術

フルIBディプロマを取得するには、このうち最初の5つのグループの各々から1課程ずつ履修し、さらに芸術課程またはグループ1~5の選択課程を1つ取る必要があります。その他、全てのディプロマ志願者が満たさなければならない重要な要件が3つあります。

1. 知識の理論：6教科分野の全てにおいて知識の獲得方法を比較する課程。外部評価が行われる。
2. 長文エッセイ：6つの教科分野のうち1つにおいて自分の力で研究プロジェクトを行い、4千ワードでそれを説明する。外部評価。
3. 創造性、行動、奉仕（CAS）：地域活動、芸術活動、および運動への積極的参加、150時間以上。

IB評価は1から7までランク付けが行われ、知識の理論と長文エッセイについては、特に優れた答案に対して最大3ポイントまで追加することができます。IBディプロマを取得するには、合計24ポイント以上を獲得する必要があり、失格条件は1つでも該当するものがあってはなりません。

AP の試験問題を作るのは誰か、試験結果の評点はどのように判定されるのか？

AP 試験問題の作成は、熟練の AP 中等教育教員並びに各試験分野を専攻する大学教師で構成される委員会が行います。AP 試験の採点は、多項選択問題ではコンピュータによって行います。自由解答問題は、AP 教師と大学教師が6月の採点期間（1週間）中に採点を行います。試験問題ごとに、出題分野の主任大学コンサルタントが詳細な採点項目を作成し、このコンサルタントが自由解答問題の採点を監督します。主任大学コンサルタントは、生徒が作成した自由解答が公正に評価されるようにするため、採点の正確さと一貫性を確保するように慎重な上にも慎重に監督します。試験の多項選択問題と自由解答問題の点数を合計した総合点が AP 評点の 1（推薦しない）から 5（きわめて優秀）までに分類されます。この結果は、7月中旬に生徒本人及び生徒が選択した大学に通知されます。

国際バカロレアの試験問題を作るのは誰か、試験結果の評点はどのように判定されるのか？

基本的に最終 IB 評点 1～7 の判定は 2 つの大きな要素によって行われます。評点の 20～50% は内部評価であり、IB 課程において教室で行われた作業を IB 教師が公表されている基準に則って評価します。残り 50～80% の評点は、外部評価であり、主任審査官国際委員会が世界中の IB 教師から提供された資料を基に問題を作成します。

基準に基づいて行われるこれらの評価の結果について、訓練を受けた世界中の IB 審査員達が評点の判定を行います。審査員団は大学の教師とベテランの中等教育教師、計 3,500 人で構成されています。審査員団による判定は、試験委員会が適正化します。またこの委員会は、採点が各教科と世界各国で一貫したものとするためにも責任を負います。最終認定委員会会議はウェールズにある IB のカリキュラム・評価センターで教科ごとに行われ、その結果は毎年7月初旬に発表されます。

AP 課程と AP 国際ディプロマに対する大学からの認定状況

北米の大学約 3,000 校が AP 課程とその試験を認定しています。AP 試験の適格評点を大学に提示すると、大学の1年間の履修単位として（1課程について）3～6単位が認められ、また2年間の履修単位が認められる場合もあります。したがって大学の2年生また場合によっては3年生としての資格を認められることとなります。但し、米国と外国では大学の合格認定方針がまったく同じとは言えないので、個別の AP 試験に関する各大学の方針は、AP 履修生徒が直接各校に問い合わせるようにしてください。

また AP 課程と適格評点は、優秀で意欲的な生徒を見つけるために合格認定及び入学許可基準としてこれらを利用する学校が増えています。AP 課程を履修することで、生徒は教科の修了と、高

等教育で求められる学力レベルで勉学するための能力を証明できます。

AP 国際ディプロマを取得した生徒は、オーストラリア、オーストリア、カナダ、エクアドル、フランス、ドイツ、オランダ、スロバキア、スウェーデン、スイス、トルコ、イギリスの多くの一流校で大学入学資格を満たすことができます。

国際バカロレア課程とそのディプロマに対する大学からの認定状況

IB は世界中で大学入学資格として認められることを目標としてきましたが、すでにその目標は実現されています。102 カ国の教育省並びに大学との間で、IB ディプロマを中等教育後の学校への有効な入学資格と認める個別的合意が締結されています。

IB ディプロマは学業の面での将来性と到達度を示す強力な指標であるとの定評が高まっていて、多くの場合、IB 履修生徒は一流校の入学審査で有利な扱いを受けます。しかも、IB 課程と試験は北米の大学 900 校以上で既修認定単位またはアドバンスト・プレースメントの要件として認められています。そればかりか、現在では IB ディプロマを取得した生徒に対し 1 年間の完全な単位を認定する中等後教育機関も 100 校を超えています。

AP プログラムと IB プログラムの類似点

1. いずれのプログラムとも高度な教育を行うための厳しいプログラムであり、それぞれ生徒と教員に対し高度な能力を求めています。
2. いずれのプログラムでも、専任の創造力豊かな教師が自分の生徒、学習分野、そして仕事のために力を尽くしています。
3. いずれのプログラムとも、高度な学力を身に付け、もっとも入学の困難な大学への進学を希望するきわめて意欲的な生徒達が集まっています。
4. いずれのプログラムとも中等教育カリキュラムとの連携が行われています。IB ではミドル・イヤーズ・プログラムとプライマリー・イヤーズ・プログラム、AP ではプリ AP™プログラムと K-12 制度によってこの連携が行われています。
5. いずれのプログラムとも、世界の教育の質を高めるための手段として世界中の教育者、教育政策立案者、並びに一般の人々から注目されています。
6. いずれのプログラムでも、生徒が自力で研究し、考え、そして書くということを重視しています。IB 履修生徒は、IB ディプロマを取得するための正式な要件として 4,000 ワードの長文のエッセイを作成することが求められます。通常、AP 教師と IB 教師は、AP 課程と IB 課程の生徒に対して、一次資料と二次資料の両方を使い、自分の力で考え、分析し、解釈して長文の研究論文、ペーパー、及びレポートを書くように求めます。
7. 教育プログラムの補助として、AP と IB のいずれでも、世界中の教師と学校管理責任者のために大規模な専門能力開発機会を提供しています。

なぜ AP か？

広く認知されている

AP はアメリカの大学約 3,000 校から認定を受け、それらの大学では AP 課程の履修実績と成績の評点によって単位若しくはアドバンスト・プレースメント、またはその両方が認められています。その他に 20 カ国 300 校以上でも AP 課程の履修と成績の評点が入学審査の要件として認められています。大学は、生徒が大学の厳しい教育課程で優れた成績を収められるように準備するために AP が効果的であると認めています。

低いコストと高い柔軟性

AP は低コストです。1 回の試験に 80 ドルが必要ですが、それ以外の費用は一切かかりません。また経済的な事情によって 22 ドルの割引を受けられます。AP は各高校が柔軟に利用できます。実施する AP 課程の数を高校が自由に選ぶことができ、また AP 課程の種類を年によって変えることもできます。教師にとっても AP は柔軟な取り組みが可能で、教師には自分が行うカリキュラムを自分で決める自由があります。

アクセスと公平性

AP プログラムは、1 つあるいは 2 つの学問分野でのみ優れた能力を持つ生徒にも広く門戸が開かれています。AP プログラムは、厳しい大学教育経験に挑戦する機会を全ての生徒に提供するように作られています。

試験の信頼性と大学の水準

AP では試験の統計的な信頼性を重視し、これによって採点の公正さを保証し、採点結果が生徒、高校、そして大学から信頼していただけるものとなるようにしています。AP プログラムでは、定期的な調査と比較可能性研究を行い、課程と試験に実際の大学レベルの学力水準が反映されるようにしています。

なぜ IB か？

高い認知度

102 カ国の大学が IB ディプロマ並びに各 IB 課程を入学審査、プレースメント、及び単位認定の要件として認めています。個々の IB 課程の履修実績は、特定の学問分野で学業を積むために生徒がしっかりと準備したことの証明として認められていて、IB ディプロマは 6 つの学問分野全て、地域社会への奉仕、および国際的視野の形成において、そのような準備ができていることを証明するものです。

国際標準を用いた公正でバランスのとれた評価

IB の評価は様々なタイプがあり、2 年間で標準とする IB 課程を通じて何回も行われます。教室

で授業を行う教師もパートナーとして参加します。IB 履修生徒が行う作業が多くの審査員によって評価され、審査員の評価は国際試験委員会が慎重に適正化します。毎年 IB 教師に対して、生徒の作業をあらゆる面から分析した詳細な正式のフィードバックが送られます。

並はずれた柔軟性

IB のカリキュラムと試験は、IB の正式言語である英語、スペイン語、フランス語の 3 カ国語で行われます。IB ディプロマでは、学校に対して多様な課程が、教師に対して幅広いトピックの選択肢が、そして生徒に対して多様な評価と専攻分野が提供されます。

認定校の義務

学校が IB 課程実施校としての認定を受けるには、厳しい審査を受けなければなりません。認定を受けた学校は、定期的に IB 専門能力開発プロセスに参加すると共に、5 年ごとに地域の IBO オフィスによる再審査を受ける必要があります。



比較データ (2003)

	学校数	生徒数	試験数	参加国
AP	14,000+	1,000,000+	1,737,000+	100
IB	1,200+	55,000+	190,000+	113

AP と IB の概要

AP プログラムの構成要素	IB プログラムの構成要素
コースと試験	コースと試験
教師の職能開発	教師の職能開発
集権的評価	中央調整的評価
優等生賞 (Scholar Awards) /	知識の理論 (TOK) /
優秀校賞金 (School Awards)	創造性・活動・奉仕 (CAS) /
	課題論文 (Extended Essay)
合衆国及び海外での認知	海外と合衆国での認知
AP 国際ディプロマ	IB ディプロマ
プレ AP プログラム	中等課程プログラムと初等課程プログラム
34 種類の試験、19 教科	162 種類の試験、51 教科

戦 略 計 画

国際バカロレア機構 (IBO)

2004 年 4 月

第 1.0 版 - 財団理事会承認済み

©2004 International Baccalaureate Organization

目次

- 第 1 章 序: IBO が戦略計画を立てるまでの経緯
- 第 2 章 IBO: 使命、価値、そして設立証書
- 第 3 章 戦略
- 第 4 章 戦略的行動 (要約)
- 第 5 章 戦略的活動 (詳細)
- 付録 A 戦略的プランニングプロセス
- 付録 B 財務面での影響

第 1 章 序: IBO が戦略計画を立てるまでの経緯

この戦略計画は1年間にわたって続いたプランニングプロセスの成果であり、その間McKinsey & Companyとの密接なパートナーシップが行われた。我々は同社の善意の奉仕に深く感謝している。

このプランニングプロセスの中間報告は、2003年にジュネーブとムンバイ(旧ボンベイ)で行われた財団理事会の会合で行われた。その両会合での議論、および新しい戦略プランニング委員会とIBO理事が参加して行われたその他の会議での議論から得られたフィードバックを元に、戦略計画の最初のドラフトが作成された。そのドラフトは2004年1月の財団理事会に提出された。ドラフトの第2版は、2004年3月に多くの関係者に配付され、その意見が求められた。今回作成された最終版は2004年4月の財団理事会により承認された。

この新計画は、1968年のIBO創設時に始まった長い一連の思索活動の一部である。しかし、ある1つの重要な点でこの計画は他の活動と大きく異なっている。すなわち、急速な成長が常に我々の組織の特徴であったが、今回初めてその急成長を管理するという困難な課題に取り組んでいるのである。

IBOは国際教育分野における世界最高の機関として高い評価を確立している。我々の活動の仕方は数個の基本的価値によって決定されている。

- ・使命に対する意欲：我々は教育を通じてより良い世界を作ることを目指している。
- ・世界に開かれた精神：我々は多様性を受け入れる。
- ・質：我々は教育水準の高さに対する我々の評価を大切にす。
- ・参加：我々は関係者による参加を積極的に求める。
- ・パートナーシップ：我々は共に働くことによって目的を達成する。
- ・教育におけるリーダーシップ：我々は教育の実践活動を革新する。

今日我々が直面している困難な課題は、我々のプログラムとサービスを発展させると共に、そのプログラムとサービスをより多様な生徒、教師、そして学校が利用できるようにすること、この2つを同時に満たすことである。そのためには、想像力、慎重なプランニング、そして新たな資金源の獲得が必要になるだろう。中でも求められるのは、IBOの成長を慎重に管理することにより、我々の仕事の質を高める一方で、同時に、世界中の恵まれない条件の学校と発展途上地域に手をさしのべることである。

この計画は、機構の方向性を定め、2014年までの幅広い目的を定めている基本文書である。この計画は、戦略的プランニング・プロセス（付録Aを参照）の第2段階において、すべての理事が機能別または地域ごとの戦略と詳細な実施計画および予算を作成する（付録Bを参照）ための基礎となるものである。この方法は、持続的で参加型のアプローチを目指していて、我々の戦略を機構の活動のあらゆる部分に組み込もうとするものである。

第2章 IBO：使命、価値、そして設立証書

綱領

インターナショナルバカロレア機構は、異文化間の理解と尊敬の気持ちを通じてより良い、より平和な世界を作ために貢献する、探求心と知識を持つ、思いやりのある若者を育てることを目的としている。

この目的のために、IBOは学校、政府、国際組織と協力し、国際教育と厳格な評価の意欲的プログラムの開発を進めている。

それによって作成されたプログラムは、他の人達がそれぞれに違いを持ち、しかも自分と同じように正しい場合がある、ということを理解する、積極性と優しさのある生涯学習者となるように、世界中の生徒・学生を促している。

基本的価値

使命に対する意欲

我々は教育を通じてより良い世界を作ることを目指している。

世界に開かれた精神

我々は多様性を受け入れる。

質

我々は教育水準の高さに対する我々の評価を大切にする。

参加

我々は関係者による参加を積極的に求める。

パートナーシップ

我々は共に働くことによって目的を達成する。

教育におけるリーダーシップ

我々は教育の実践活動を革新する。

設立証書

初等学校、中等学校、および高等学校レベルの生徒を対象として国際教育プログラムを開発および振興し、あらゆる国における認定校によって採用されることを目指す。

認定校を対象として国際試験を開発、管理および振興し、あらゆる国において高等教育への進学を可能にする。

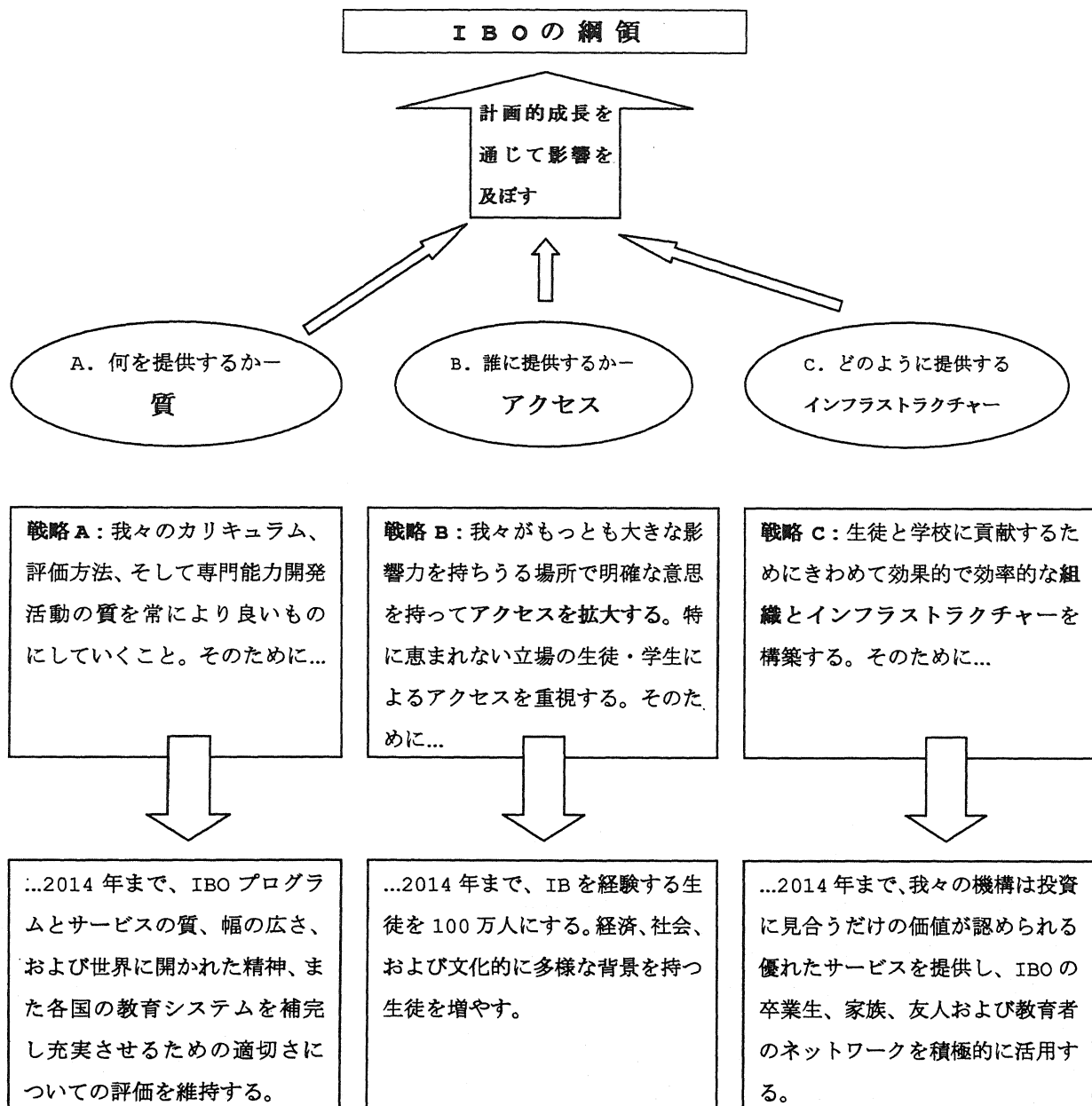
これらの目的を達成するために必要な行動を行う。教育に関する研究、カリキュラムと評価の開発、教師の専門能力開発、コンサルティング活動、カンファレンス、出版、および政府機関、政府間機関、教育機関その他の機関との共同などがその必要な行動に含まれるが、これらに限らない。

1968年に設立され、今日に至るまで IBO は 115 カ国で 1,123 校のディプロマ・プログラム校、259 校のミドル・イヤーズ・プログラム校と 138 校のプライマリー・イヤーズ・プログラム校を認定している。ディプロマ・プログラムに関しては、年間約 60,000 人の生徒が試験を受け、ワークショップとカンファレンスにおいて毎年数千人の教師にトレーニングを行っている。雇用している職員は 300 名、売上げは 4,500 万米ドルである。我々の機構は、過去 10 年間、毎年約 15% のペースで着実に成長してきた。

第3章 戦略

IBO は、資源の許す範囲内で使命を遂行することにより、もっとも効果的な影響を生み出すよう
に行動する責任がある。我々は、3つの要因の間で最適なバランスを達成するように計画を立て
ることにより、これを行う。

- ・何を提供するかー質
- ・誰に提供するかーアクセス
- ・どのように提供するかーインフラストラクチャー



成長はいくつかの次元で考えることができる。たとえば：我々のプログラムの質における成長、
生徒数の増加、この機構の専門家集団としての能力の向上。しかし、我々が重視するのは成長そ

れ自体ではない。可能な限りもっとも効果的でバランスのとれた影響を実現するように成長を計画することが重要であると、我々は考える。

我々は、これら3つの戦略を実行するために役立つように一連の戦略行動を定めた。その戦略的行動について、本書第4章において要約を示し、第5章において詳しく説明する。それらの行動は、3つの区分 (?band?) のどれに対してもっとも大きく貢献するかによって分類されている。ただし、多くの場合どの目的でもすべての区分に利益をもたらすものである。

区分は、国または地域を、強力な学校ネットワークが発達していて IBO がすでに活発に活動している国または地域 (区分 1)、将来的には影響力を持ちうる潜在的な可能性がもっとも強い地域 (区分 2)、および中期的に見てクリティカルマスを達成できるとは思われぬ地域 (区分 3) に分類するために用いられている。この区分は定期的に行われ、我々はその国や地域の教育にどのような影響を及ぼすことができるか、その国が代替の教育システムに対してどの程度開かれているか、IBO が利用できるその国または地域のネットワークとサポート、潜在的な生徒総数、質の良い代替プログラムの利用可能性、および IB プログラムへの資金調達の潜在的な可能性などの要因が考慮される。国と地域の区分を利用することで、我々は影響力を最適化する可能性を高めるように資源を用いることができる。

第4章 戦略的行動 (要約)

	A-質	B-アクセス	C-インフラストラクチャ
総合0 機構全体	A0.1 カリキュラム、評価およびワークショップに適用する主要な質の尺度を定める。	B0.1 国の区分とプロジェクト・ポートフォリオを作成し、定期的に更新する。 B0.2 主要な成長と進歩の尺度をモニタする。	C0.1 効率的で効果的な組織を構築する。 C0.2 信頼できる評価活動を保証する。 C0.3 効果的な地域構造を発展させる。 C0.4 個人会員の IB 会を設立する。 C0.5 主要パフォーマンス尺度を定める。 C0.6 資源開発戦略を作成する。
区分1 IB 世界学校ネットワークを構築する。	A1.1 IBプログラムの国際的次元を強化する。 A1.2 教育内容の質をモニタする。 A1.3 カリキュラムと評価が世界に通用するものであることを保証する。 A1.4 IBプログラムの有効性に	B1.1 既存の学校の成長を支援する。 B1.2 大学および政府による認知度を高める。	C1.1 学校に提供するサービスの質をモニタする。 C1.2 自立したプログラムを保証する。 C1.3 地域オフィスを強化する。

	ついての研究を支援する。 A1.5 IBOの専門能力開発サービスについて世界的水準の質を保証する。		
区分2 将来影響力を持ちうる潜在的可能性が高い。	A2.1 追加的プログラムを開発する。	B2.1 区分に応じた活動を行う。 B2.2 プログラムを提供する言語を増やす。 B2.3 e-ラーニングを含めて革新的テクノロジーを活用する。 B2.4 新たなデリバリーモデルを模索する。	C2.1 他の機関と共同する。 C2.2 コンサルティング能力を発達させる。 C2.3 大口の寄付者をさがし、長期的関係を築く。
区分3 クリテikalマスに達しない。		B3.1 共同のために選択肢を模索する。	

第5章 戦略的活動（詳細）

本章では、戦略計画が提案している個々の行動について説明する。この計画が機構の方向性を定め、2014年までの幅広い目的を定めている基本文書であることを、読者は思い出していただきたい。詳細な計画と予算を作成するプロセスは、付録AおよびBにおいて説明されている。そのプロセスはこの機構が行う通常の管理、意思決定、および予算編成手続に従う。

参考として、それぞれの行動の横にもっとも可能性が高いと思われる資金源を表示する。

1. 2004年予算による（すでに承認済み）。
2. 2005年およびそれ以降に提出される予算案による。
3. 外部からの資金調達または外部での開発。
4. 追加の資金は不要。

投資見通しを理解していただくため、資金が必要になる目標の期間も示した。

- A. 短期（1～2年）
- B. 中期（3～5年）
- C. 長期（6年以上）

最後に、個々の行動のために必要になるとと思われる資金レベルを、以下の区分によって示した。

- x. 小規模

y. 中規模

z. 大規模

A. 質

我々のカリキュラム、評価方法、そして専門能力開発活動の質を常により良いものにしていく。そのために次の戦略的行動を行う。

行動	注	資金源	期間	資金規模
A0.1 主要な質の尺度 カリキュラム、評価およびワークショップの内容の質について、1組の主要パフォーマンス指標を定める。—それにより、我々の中核的活動の質を理解し、測定することができる。	これは、現在のスタッフフィングおよび予算案提出期間中に1回に限り行う活動である。	4	A	X
A1.1 世界に開かれた精神 IBOプログラムの国際的次元を強化し、国際教育の価値と実践活動を普及する。—それにより、IBのプログラムとサービスが綱領に示した価値をより良く実現できるようにする。	これは、我々の活動のあらゆる側面に影響のある、時間をかけて徐々に進めるべきプロセスである。	1, 2	B	X
A1.2 教育内容の質をモニタする カリキュラム、評価およびワークショップの内容の質について、総合的な1組の主要パフォーマンス指標を記録し報告する。—それにより、質のレベルが適切でありかつ一定していること、および発見された問題が速やかに対処されていることを確信できるようにする。		2	A	X
A1.3 カリキュラムと評価 現場の教師（?practitioners?）と試験官が参加し、適切なスタッフの能力開発を行い、委員会を設置し、コンサルタントを活用し、外部機関との連携を行って、定期的なレビュープロセスを確実に進行。—そ	現在の実践活動を基礎として、この活動を行う。	2	C	y

<p>れにより、カリキュラムと評価が最新の考察を取り入れて改良され、変わり続ける世界の中で我々のプログラムの質の高さに対する評価が維持されるようにする。</p>				
<p>A1.4 研究を支援する IBプログラムの有効性および国際教育の本質についての研究に対する支援を増強する。－それにより、我々の使命が成果をあげていることを示す証拠が研究によって明らかにされ、それが公表される。また、国際教育分野の研究の発展に IBO が貢献し、またその分野の研究から学ぶ。</p>	<p>先頃、優先的研究プロジェクトを続けるために、準備金から追加の資金が配分された。</p>	<p>1, 2, 3</p>	<p>B</p>	<p>y</p>
<p>A1.5 専門能力開発 質保証の枠組みを通じて、また外部機関による認定を受けることにより、ワークショップの質について世界的水準を保証する。－それにより、ワークショップに対する教師の満足度を向上させる。またワークショップの有効性を改善する。我々は、教室において IBO の使命が達成されるために教師が重要な影響力を持っていることを認める。</p>	<p>B2.3 と関連づけて行うこともできる（例：教師のトレーニングを改良するため、OCC[オンライン・カリキュラム・センター]テクノロジーを開発する）。</p>	<p>1, 2</p>	<p>B</p>	<p>y</p>
<p>A2.1 プログラム開発 一連のプログラムを元に、綱領に沿った追加のプログラムとプログラム集またはプログラムの部品を作成し、IBO がそれを推奨する（たとえば、職業教育ディプロマなど、あるいはヨーロピアン・プラットフォームで行われているようなプログラムの部分使用）。－それにより、IB プログラムがより広い範囲の学校の組織的構造と生徒によるニーズに対応できるようにし、また IBO の使命がより広い範囲の生徒グループと共に達成されるようにする。</p>	<p>この行動の潜在的な範囲がどれほどの広がりを持つかを考えると、行動を定量的に規定できるようにするには、その前に詳細な研究が必要であると思われる。</p>	<p>2, 3</p>	<p>C</p>	<p>Z</p>

B-アクセス

我々がもっとも大きな影響力を持ちうる場所で明確な意思を持ってアクセスを拡大する。特に恵まれない立場の生徒・学生によるアクセスを重視する。そのために次の戦略的行動を行う。

行動	注	資金源	期間	資金規模
<p>B0.1</p> <p>地域と国の区分、およびプロジェクト・ポートフォリオ</p> <p>戦略目的に基づいて資金提供の可能なプロジェクトのポートフォリオを作成するため、地域と国の区分を行い、それを定期的に見直す。それにより、次のことが可能になる：我々の資源を、もっとも大きな影響力を発揮できるように特定のプロジェクトに集中させる。学校に対し短期的な準備活動支援を提供する。開発プロジェクトのために資源を集める（たとえば、ドイツ語で行われる特定の科目をディプロマ・プログラムに導入するためにドイツ政府から資金提供を受けている）。</p>	<p>各地域オフィスにおいて、コミュニケーションとマーケティングを行えるスタッフを一層充実させることが必要になるだろう。これは2005年の予算案の中で審議される予定である。</p>	2	B	y
<p>B0.2</p> <p>成長と進歩をモニタする</p> <p>1組の包括的な予測、成長の結果についてのモデル、および報告プロセスを作成する。—それにより、アクセスを拡大するという目標に向かっての我々自身の進歩を確認しながら、成長計画を立て、成長を管理することができる。</p>	<p>戦略プランニング部門と経営管理情報部門が現在の予算の枠内でこの活動を行う。</p>	1	A	X
<p>B1.1</p> <p>既存の学校の成長</p> <p>既存のプログラムを推進および拡大するために認定校を支援する。それにより、我々はより多くの生徒を認定校に集める。また学校がより強力なプログラムを作るために支援する。</p>	<p>学校によるIBプログラムの販売を支援すること、およびwww.ibo.orgを改良して、国と学校の詳細な情報をサイト上でわかりやすく表示することに費用をかける。それらの費用はコミュニ</p>	2	A	X

	ケーション予算の中で管理される。			
B1.2 社会的認知の向上 我々のプログラムに対する大学と政府による認知度を上げる。－それにより、我々のプログラムが国の教育プログラムと比較して公平に認められるようにする。	地域オフィスのスタッフの活動を活発化し、それによってこれらの活動により多くの時間が投入されるようにするために費用をかける。それらの費用は地域オフィス予算の中で管理される。(B0.1を参照)	2	B	y
B2.1 地域と国の区分 地域区分の結果に応じて活動する。－それにより、我々がもっとも大きな影響力を持つところに資源を集中的に投入する。	地域オフィスは、それぞれの地域で様々なパートナーとの関係を発展させ、区分2の諸国においてIBプログラムを普及させるために、目標を絞った活動を決定しようとするだろうし、我々はそのように予測している。それらの費用は地域オフィス予算の中で管理され、また外部からの資金調達オプションを求める。	2, 3	B	y
B2.2 プログラムを提供する言語を増やす IBプログラムをより多くの言語で提供するために選択肢を研究し、同時に質とデリバリーを保証する。－それにより、IBOの業務言語を通常使用していない国においてもIBプログラムが利用できるようにする。	ドイツ語プロジェクトの価値が十分に認められれば、資金を外部から調達できるので、言語を増やすという目的(ドイツ語の科目をディプロマ・プログラムに導入する)は達成される。	2, 3	B	y

<p>B2.3 テクノロジー オンライン・カリキュラム・センター (OCC) などの革新的テクノロジーを導入する。－それにより、資源、時間または地理的な制約のある生徒・学生と教師に機会を提供することが可能になる。</p>	<p>現在、いくつかの分野で研究とパイロットプロジェクトが進行中である（たとえば e-マーケティング、電子評価、OCC 関連活動）。</p>	<p>1, 2, 3</p>	<p>A, B</p>	<p>Z</p>
<p>B2.4 新たなデリバリーモデルの追加 新しいデリバリーモデルの影響を研究し、モデルの導入を検討する。－それにより、既存のプログラムを提供するための新しい選択肢を研究する。</p>	<p>現在、いくつかの選択肢について調査が進行中である（例：職業教育ディプロマ）。しかし、この分野でどのような提案を行うにしても、その提案が推薦される前に、教育委員会による詳細な検討が必要になるだろう。</p>	<p>2, 3</p>	<p>C</p>	<p>Z</p>
<p>B3.1 共同 潜在的クリティカルマスが小さい地域または学校にプログラムを提供する目的で、インフラストラクチャーを持っている政府その他の組織との共同作業の選択肢を模索する。－それにより、資源を共有することができるので、我々の持つ資源だけでは手の届かない世界の地域にいる生徒にも、プログラムを提供することが可能になるだろう。</p>	<p>必要な資金量は、共同作業の内容と目的によって異なるだろう。最初に行うべきことは選択肢の評価である。</p>	<p>2</p>	<p>A</p>	<p>X</p>

C-インフラストラクチャー

生徒と学校に貢献するためにきわめて効果的で効率的な組織とインフラストラクチャーを構築する。そのために以下の戦略的行動を行う。

行動	注	資金源	期間	資金規模
<p>C0.1 効率的で効果的な組織</p>	<p>この行動は、機能別ま</p>	<p>2</p>	<p>A, B</p>	<p>Z</p>

<p>我々の組織内部の構造、パフォーマンス、および能力（財務、コミュニケーション、人材、ファシリティマネジメント、経営管理情報、情報通信テクノロジー、プロジェクトサポート、戦略プランニング、および資金調達）を改良・改善する。－それにより、組織が成長し、発展し、我々を取り囲む世界が変化するのに伴って発生する将来の困難な課題を克服することができる。我々のパフォーマンスと資源の活用は類似の組織と比較して優れている。我々は他の分野で確立されたベストプラクティスの経験を新に作りかえ、活用する。</p>	<p>たは地域別の戦略を作成して、慎重に遂行する必要がある。</p>			
<p>C0.2 信頼できる評価活動 変化と成長の圧力を受けながらも信頼性と完全性を維持するため、包括的な計画を持つようにし、それによって、我々の機構の評価が守られるようにする。我々は、これからは新しい評価アプローチを研究し、実現していく。我々は、これからは質の高い試験チーム（?examining team?）を集め、維持する能力を持ち続ける。</p>		2	B	y
<p>C0.3 効果的な地域構造 地域構造と準地域構造を見直す。－それにより、地域の自立性を高める。また IBO の活動範囲が世界に広がっていることを踏まえて資源の最適な利用を保証する。</p>		2	B	y
<p>C0.4 IB 会 IBO への関心を抱き続けている個人（卒業生、保護者、教師、試験官および友人を含む）を集めて団体を作る。－それにより、我々の機関の目的達成を支援するコミュニティを構築する。</p>	<p>2004年と2005年の費用は、この提案の実現可能性を検証するための調査およびパイロット事業に投入する。McKinsey & Company が善意によるコンサルティングサービスを提供している。パイロット</p>	2, 3	C	z

	ト事業の段階を終了すると、その後は外部からの資金調達が必要になるだろう。			
C0.5 パフォーマンス尺度 定義されたサービスについて、そのデリバリーのパフォーマンスを測定する一連の主要パフォーマンス指標を作成する。－それにより、我々が行うサービス・デリバリーの最も重要な特徴を理解すると共に、パフォーマンスの測定に利用可能なデータを集める能力を身につける。	これは、現在のスタッフィングおよび予算案提出期間中に1回に限り行う活動である。	4	A	X
C0.6 資源開発戦略 インフラストラクチャー整備のために資金調達戦略を作成する。－それにより、質の高い最新のインフラストラクチャーを確保するために必要な資源を得る。	この活動は開発オフィスのプロジェクトとして行われる。	4	A	X
C1.1 サービスの質をモニタする 学校その他に対するサービス・デリバリーに適用する総合的な1組の主要パフォーマンス指標を記録し報告する。－それにより、質のレベルが適切でありかつ一定していること、および発見された問題が速やかに対処されていることを確信できるようにする。	この活動により、C0.5で定めたパフォーマンス尺度を実際に使用する。	2	A	X
C1.2 自立的プログラム 個々のIBプログラムがそれぞれ財政的に自立するように、活動原価評価プロセスと行動計画を導入する。－それにより、長期的に見てプログラム間の相互補助を解消する。	この行動にとって重要なことは詳細な原価データを利用できるようにすることである。したがって、最初の段階として、活動ベースの原価評価制度を導入する。2004年度の予算から1%が戦略的プランニングに割り当てられ	1, 2	B	X

	ており、現在その予算の枠内でこの評価制度の導入を行うためにいくつかの選択肢を検討している。			
C1.3 地域オフィスを強化する 学校向けサービスの提供の質を保証する。そのため、成長機会を判定して国と地域の区分を決定し、作業習慣を改良し、追加資源を投入する。－それにより、効果的で質の高いサポートを学校に提供し、限られた資源によって強い影響力を実現し、その結果、アクセスを拡張する機会を追求することができる。		2	B	y
C2.1 他の機関と協力する ユネスコの「万人のための教育」などのプロジェクトを通じて、高等教育などの分野で我々と同じ価値と目的を共有するパートナーおよびその他の国際機関を見つけ、それと協力する。－それにより、発想と資源を共有して能力を拡大することができる。		2, 3	C	X
C2.2 コンサルティングサービス コンサルティング能力を確立することにより、国の教育制度と共同して国の教育プログラムの開発に参加できるようにする。その結果、国の教育制度その他の関係者が国際的な視点を活用できるようになる。IBOが国のベストプラクティスを活用できる。IBOが知的財産権を責任をもって管理できる。	この長期的目的を達成すると、最終的に我々の機構にとって新しい収入源ができる。	2	B	X
C2.3 長期的関係 大口の寄付者と支持者を開拓し、関係を確立する。－それにより、我々の仕事を支援する長期的貢献を確保することができる。	これは、開発オフィスが従来から行っている活動であるが、それを強化する。	1, 2	B	X

付録 A 戦略的プランニングプロセス

この計画は、機構の方向性を定め、2014年までの幅広い目的を定めている基本文書である。この計画は、戦略的プランニングプロセスの第2段階において、すべての理事が機能別または地域ごとの戦略と詳細な実施計画を作成するための基礎となるものである。

この段階的アプローチは、以下のことが確実に行われるように設計されている。

- もっとも基本的なレベルの目標に基づいて、機構が行うべき詳細な活動を定める。
- 計画のオーナーシップはその計画の実施に責任を負う者の中で割り振る。
- 適切なレベルの権限を行使することにより、目的の達成方法に柔軟性を持たせることができる。
- すべての行動に対して適切な委員会と専門家が細かい点まで監督することができる。
- 予算が詳細なプロジェクト計画に基づいて作成される。
- 資源調達と資金調達がどの程度可能かに応じて段階的に計画が作成される。
- 戦略的プランニングは IBO の単なる一部門あるいは一委員会ではなく IBO の中核を構成する。

	第1段階 組織の戦略	第2段階 機能別および地域別戦略	第3段階 実行計画
主要文書	綱領、IBO 戦略計画	機能別および地域別戦略計画	プロジェクト計画と作業スケジュール
活動の焦点	影響、計画的成長、IBO の戦略的行動	IBO の戦略的行動に対応する。	機能別および地域別戦略を実行する。
承認者	戦略的プランニング委員会の推薦に基づいて、財団理事会が承認する。	各種委員会と RAC の推薦に基づいて、財団理事会が承認する。	理事が承認する。
財務の枠組み	長期的財務プランニング	3年の財務計画	年次予算
執行役員	理事長	理事	マネージャまたはスタッフ
支援者	戦略的プランニング担当理事	戦略的プランニング部門のメンバー	適宜プロジェクトサポート・オフィス
期間	5年以上。レビューを行う。	1年から3年。レビューを行う。	1年未満
モニタリングとレビュー	戦略的プランニング委員会が財団理事会に報告する。	財団理事会または RAC の各種委員会が戦略的プランニング委員会に報告する。	財団理事会または RAC の各種委員会に理事が報告する。

我々の機構は、この計画を実行し、モニタし、策定し直す能力を、戦略的プランニング委員会と戦略的プランニング部門を通じて、および関係者達の積極的な関与を通じて発展させる。

プロジェクトマネジメント方法論（PRINCE2、PMBOK などプロジェクトマネジメント分野における国際的ベストプラクティスを基礎とする）の開発が現在進められており、戦略的プランニング部門の新プロジェクト支援オフィスがこの開発活動を支援している。この方法論により、明確な目標、オーナーシップ、予算、タイムスケール、レビュープロセスなどを計画のために定めることが要求される。上級マネジメントチームがプロジェクト委員会を設立した。これは理事長を委員長とし、すべてのプロジェクトのマネジメントとその優先順位決定を管理する。

付録 B 財務面での影響

この計画は機構の成長を前提としている。計画的成長は IBO の将来を決定する 1 つの鍵である。成長があつてこそ、発達と革新を実現するための柔軟性が得られるのである。計画の成否は、我々の活動と成長によって生み出される資源以上に、外部の資金源から資金を調達する我々の能力によって左右される。

現在定められている「行動」は基本的綱領に基づいているもので、詳細な行動計画によって定められた行動ではない。たとえば次のような行動が定められている：

- ・ 大学および政府による認知度を高める。
- ・ 効果的な地域構造を発展させる。
- ・ 協力のために選択肢を模索する。
- ・ 新たなプログラムを開発する。

この戦略計画は、将来のプランニング—現在のものに代わる意思決定プロセスではない—の方向性と枠組みを明確に定義するものであるということを強く述べておかなければならない。詳細計画は、当機関の通常のマネージメント、意思決定、および予算編成プロセスの範囲内で策定、承認される。

この段階的アプローチでは、計画の財政規模をどの程度にするかの詳細な検討は第 2 段階において行われる。したがって、個々の活動の想定される規模と資源調達レベルを第 5 章に暫定的に示した。

財団理事会は、この計画を全体的方向性と意図の表明として承認した。この計画を実施するための短期的財源が 2004 年および 2005 年度の通常予算編成プロセスの中で要求されているし、また今後要求される。

外部からの資金調達が確保できるかどうかによって、多くの活動が影響を受ける。外部からの資金調達は IBO の発展に必要な資金を賄う上で、ますます重要な役割を果たすようになるだろう。

第 2 段階の進展に応じて、通常年次予算案をバックアップする詳細な 3 年財務計画（2006 年から 2008 年）を作成することができるだろう。このこと自体が IBO の長期プランニングプロセスの非常に有意義な改良と言えるだろう。

国際バカロレア北米戦略計画 アクセスを拡張する：北米における IBO の使命への取り組み

2004 年 7 月 - 2009 年 12 月

2005 年 3 月更新

IBNA 理事会承認済み

1. 序

IBO 戦略計画が 5 月の財団理事会会議で採択されたとき、IBNA はすでに IBO が提案したビジョンと方向性を承知して、その数ヶ月前から独自の新たな計画に取り組んでいた。IBO はその新しい戦略的プランニングプロセスにおいて、各地域の理事（およびその他の理事）に対し、IBO の目的を実現するためにそれぞれ独自の計画を作成するように明確に求めている。

この新しい IBNA 戦略計画は、2004 年 1 月のリーダーシップトレーニングから生まれたものである。IBNA 委員会、RHRC メンバー、IBNA 常設委員会委員長、上級 IBMA スタッフ、理事長、財団理事会議長、IBO 財務部長、および IBO 戦略計画担当理事が一堂に会して、組織ガバナンスとプランニングに豊富な経験を持つコンサルタント、Glenn H. Tecker 氏の指導により 2 日間のセッションが行われた。

トレーニングの課題は、北米の環境、北米 IB スクールによる期待、北米 IB スクールが持つ資源、および資金調達の潜在的可能性を踏まえ、IBO の成長管理戦略の中心を占め、IBNA の影響を最大化するには、どのようにすればよいかを決定することだった。

そこで行われた活発な議論から組織の目的が定められ、またそこから具体的な目標が導かれた。それらの目的と目標は、今後数年間の IBNA の方向性を決める計画を策定するプロセスにおいてその基礎となった。IBNA 理事会の委員会は、基本的な価値、目的と目標をより良いものに高め、北米環境を精査して様々な傾向と条件を調査し、そうすることで計画構築のための枠組みを提供した。次にスタッフが目標の達成に必要な戦略を考案し、さらに具体的なタスクを設定することでその戦略に肉付けをした。そういった活動の全体は、IBNA 理事会が検討し承認した。

IBNA の戦略計画は「未来に目を向けた」ものであり、2001 年から北米地域における活動はこの計画に則って進められてきた。また、当時 IBO が発表していた目的および優先課題と調和するように、この計画に基づいて IBNA の目的と優先課題が定められた。新しい地域計画では、あらゆるレベルでの戦略策定が、IBO 文書の同様の戦略との連携を確保することを目指して行われるようになった。その結果、IBNA の計画は、IBO の計画を大半の具体的な項目に関して広範囲に補足するものとなり、しかも、この地域は何をもっとも必要としているのか、何がもっとも得意なのかも見失われていない。IBO の指示と IBNA の広い経験、国際組織としての IBO のビジョンと北米地域の希望、IBO 参加各地域に共通の

価値と米国、カナダおよびカリブ海諸国に固有の要求事項が INBA の計画に盛り込まれている。

戦略計画の期間としては 5 年が予定されていたが、具体的な戦略の多くが IBNA の活動にすでに組み込まれていたため、それらの完了時期は、当初の予定より大幅に早まるだろう。この計画は、重要目的が発表されている 6 つの分野のそれぞれにおいて、活動の焦点とプロセスを定めるものと見なされている。この計画はその設計上、少数の例外を除いて、定量的な成果を指定しない。戦略をどのように続けていくべきかを詳細に判断する根拠となる主要な活動は四半期ごとに見直しと更新が行われ、毎年 1 回、大規模な見直しが行われる。

この戦略計画は、現在進行中の活動である。この計画は委員会委員とスタッフとの密接なコラボレーションの成果であり、計画の期間中を通じて、コラボレーションがモニタリング、評価および拡充のために重要な活動であり続けることが計画によって定められている。

2. IBNA の基本理念

IBO の綱領

国際バカロレア機構は、異文化間の理解と尊敬の気持ちを通じてより良い、より平和な世界を作るために貢献する、探求心と知識を持つ、思いやりのある若者を育てることを目的としている。

この目標のために、IBO は学校、政府、国際組織と協力し、国際教育と厳格な評価の意欲的プログラムの開発を進めている。

それによって作成されたプログラムは、他の人達がそれぞれに違いを持ち、しかも自分と同じように正しい場合があるということを理解する、行動力と優しさのある生涯学習者となるように、世界中の生徒・学生を促している。

IBNA の基本目的

良い教育を受け、探求心のある、そして思いやりのある、そして世界中の人々が共有する人間の条件をより良いものにするために自分の持つ才能と資源とエネルギーを活用する市民を育てること。

IBNA の基本的価値の声明

我々は、すべての学齢の生徒・学生が学業において優れた成果を収められるように支援する教育者のコミュニティである。

我々は、あらゆる人種的、民族のおよび社会的背景を持つ、あらゆる場所にいる生徒・学生が、優れた教授法、適切で厳格なカリキュラム、そして優れた評価を享受できるようにするために努力する学習者のコミュニティである。

我々は、教師、学習者、ボランティア、あるいはその他の支援者であるかを問わず、すべての関係者による積極的な関与を尊重する、活動する者のコミュニティである。

我々は、個人も社会も、質の高い教育を通じて、またグローバルコミュニティに生きるために力を注ぎ、またそのことへの理解を通じてより良い存在になっていくという我々の理念を共有する政府系機関、非政府系機関、企業、その他の団体と協力して、我々の教育的目的を達成するために活動する協力者のコミュニティである。

我々は、教育を通じてより良い世界を創造すること、そして我々のプログラムを絶えず改良しそれをより広く普及するために、自分達の持つあらゆる人的資源と経済的資源を捧げることを目指す非営利のコミュニティである。

我々は、共通の人間愛を讃え、多様な視点、文化および経験の持つ価値を大切にする、インクルーシブなコミュニティである。

3. IBNA の描く未来

IBNA の目的

国際バカロレア・プログラムを、実績の認められた、価値を認識された、そして高く評価された、しかも北米地域のどこにおいても誰でも利用できる、21世紀の優れた存在の1つとするために責任を負うこと。

IBNA の目的の概要

2005年、国際バカロレア北米（IBNA）は30周年を迎える。IBOは、1997年にモントルーにおいて30周年の祝賀式典を行ったが、IBNAも同じようにこの記念すべき年に祝典を行うために準備を進めている。しかし、それと共に1つのチャレンジも準備している。2005年、IBNAは野心的な新しい戦略計画を導入する。その新しい計画は、北米およびカリブ海諸国のIBコミュニティのあらゆる地区から参加したメンバー達が数ヶ月間に渡って努力を続けた成果であり、2つの基本概念を軸として構築されている。第1に、IBNA地域において認定IBスクールに対して現在我々が提供している質の高いサポートサービスを、さらに幅広くそしてさらに深いものにしていく必要がある。同時に、この地域内のあらゆる地区にいる、あらゆる状況の生徒達にとってIBの教育プログラムをより一層アクセスしやすいものにするにより、より多くの人達に我々の活動に参加してもらえるようにする必要がある。

長年にわたって国際バカロレアにかかわってきた教育者として、我々は我々が奉仕する青少年が教育によって変容するというIBのビジョンに魅力を感じている。自ら世界にかかわり、思慮に富み、思いやりのある、そして異なるものの見方や文化的伝統が理解されない、あるいは軽んじられるとき何が危険にさらされるのかを理解する市民によって世界が満たされる時、世界はどのようになりうるのだろうか。我々は、そのことについて1つのビ

ジョンを共有している。あらゆる地域の学習コミュニティにおいて、チャレンジする機会、そしてチャレンジを受ける機会をすべての生徒・学生が持てるようになるとき、教育はどのようなものになりうるのだろうか。我々はそのことについて1つのビジョンを共有している。実際、クリフ・アデルマンの「ツールボックスの中の答え」などの最近の研究は、生徒が中等後教育において優れた成果を収められるように準備するため我々がなし得る最も重要なことは、生徒達に豊でチャレンジングな学校カリキュラムを提供することであると断言している。IBプログラムは、複雑さを増していく世界の中で知るべきこと、理解すべきことは何かを生徒達に伝えている。生徒が自立的で責任ある生涯学習者となるためのスキルと態度を、IBプログラムは育むのである。

これはIBが獲得した評価であり、またIBはこの評価によって存在を認知されている。2001年4月25日号の“*Education Week*”誌は、IBディプロマ・プログラムを「大学準備プログラムのキャデラック」と称した。この評価はなんとしても守らなければならない。過去において、この評価が真実であることを保証するために、教育者達は戦ってきた。そしてこれからそうすることがこの地域の使命である。そのためには、既存の学校のために新しい適切なサービスを作り出すべきである。たとえば、革新的な専門能力開発機会、大学と政府からIBプログラムの認知を取り付ける新たな努力、IBを教育コミュニティにおいてより存在感のある参加者とするための新しいパートナーシップなどである。

しかし、こういったことだけではない。IBプログラムにはある1つの視点を取り入れる余地がある。IBOは、そのカリキュラムと評価システムがいずれも世界に通用し高い評価を受けようとするため、熱心に努力してきた。しかし、それと同時に、生徒の考え方と行動が生徒自身の未来、そして他の人達の未来に影響を与えるのだという認識を彼らに伝えようともしてきた。IBプログラムに参加する生徒には、周囲の社会に前向きな影響を及ぼすために自分の知識と経験を活用するように促している。IBOが3つのプログラムを構築し、自らの教水準と全体としての使命に自信を持てるようになるまでに30年以上かかった。今IBOは、大きな影響力を教育界に及ぼすために、かつて無いほど適した状況にある。したがって、理事長ジョージ・ウォーカーの問いかけ「IBが最良の教育プログラムを提供するのであれば、そのプログラムはすべての生徒が利用できるようにするべきではないだろうか」に、今こそIBNAが積極的に答えるべきときである。

したがって、アクセスは新IBNA計画の第2の主要な概念である。パートナーシップを構築し、外部からの資金調達を求めることにより、IBNAがIBプログラムを我々の地域における新しい学校や人の集団に広げることが可能になるものと期待されている。この努力は、従来からIBサービスを受けている参加校の到達度を下げること为目标としているのではなく、現在のIBコミュニティを一段と豊かで多様なものにすることを目標としている。あらゆるコミュニティに積極的に活動を広げ、インクルーティブであるための新しい方法を模索し、この地域のより多くの人達と共に我々の経験と専門技能を共有することにより、IBNAはIBOがその綱領の中で表明している理想に真正面から取り組むのである。こういった努力は、IBプログラムに向けて根強く行われている「エリート主義」批判への最良の

回答である。IBOは、すべての教育プログラムに高度な教育水準を設定し、維持することについて、弁解はしていない。しかし、それらのプログラムは、優れた教育にチャレンジしようとするあらゆる生徒が参加できなければならない。

2015年、IBNAが40周年を祝うとき、IBプログラムへの参加者がこの地域の豊かな多様性を反映していることを、我々は期待する。我々は、これまで生徒達に充実した教育サービスを提供できなかった地区にも、テクノロジーによってIBプログラムが導入できるようになることを期待している。我々は、この地域の学校で活動する教育者達がIB教育者によって提供される専門能力開発機会を享受できるようになることを期待している。我々は、IBプログラムとサービスを基礎とするカリキュラム・モデルがこの地域のあらゆる州（provinces, states）とあらゆる国で利用されるようになることを期待している。我々は、IBプログラムと教育における優れた存在としてのIBの使命が、特別ではなく、当たり前のこととなるように期待している。

IBコミュニティは強い力を秘めている。一度は克服不可能と思われた困難な課題でも解決の可能性があることを繰り返し証明してきた。我々の新しいチャレンジ既存のサービスの質を高めつつ、同時に参加の機会をより多く提供すること—をやり遂げるには、慎重な計画立案と一致団結した努力が必要である。我々は、IBコミュニティがこれらの目的を達成するために協力して活動することを、今一度期待する。

計画立案について

概要

IBNAの今後の発展を期待するとき、いくつかの特に重要な経済的現実と人口動態予測を踏まえて戦略を考えなければならない。たとえば、生徒集団の多様性が進む、北米社会における移動性が高まる、世界のどこからでも情報にアクセスできる可能性が向上する、教育の民営化傾向が進む、テクノロジーへの依存が強まる、資金的裏付けのない政府からの要求による影響が拡大する、そして、高い資質を持った教師を見つけることは常に困難である。

IBNAは、こういった人口動態の傾向、社会の変化、および財政的予測に沿って計画立案と資源の割り当てが行われるように保証しなければならない。その目標のため、IBNAは戦略計画を準備する中で次の作業を行う必要があると考えた。

- ・プログラムとサービスを生徒に提供するためにテクノロジーをこれまで以上に重視する。
- ・新しい学習方法に対応できる革新的で柔軟なモデルを開発する。
- ・カレッジと総合大学、および企業または実業社会との連携をより緊密に発達させ、生徒がキャリアパスにスムーズに入っていけるように保証する。
- ・プログラムに参加する学校区および学校を増やせる可能性を高めるため、財団、企業、および政府からの大規模な資金援助をアグレッシブに求める。

- ・あらゆるプログラムと事業に参加する生徒と教員の多様性の増進を粘り強く追求し続ける。
- ・教員を集め維持するために、独創的で多様化したアプローチを開発し、特に準備、革新および継続的専門能力開発を重要な焦点とする。
- ・IBNA が社会からより広く認知されるように宣伝キャンペーンを行い、その結果、競争の激しい教育環境において IB プログラムがしっかりと成長し発達できるようにし、IBNA のステータスを高める。
- ・国および州レベルで、立法プロセスと公共政策の立案プロセスに参加し、学校改革にとって重要な貢献を行う存在として IBNA が認められる可能性を高める。

今 IBNA は、その発展過程の中で重要な瞬間にいる。過去 30 年間、IBNA が北米とカリブ海諸国の教育界において占める位置は重要性を増してきた。優れた存在として次の段階に進むため、そして特に影響力をさらに強めるため、IBNA はその長所を分析し、どのようなプロジェクトと事業を追求していくべきかを慎重に判断しなければならない。地方、州および連邦の教育者達が考えている改革予定がどのような傾向と条件によって推進されていくかをしっかりと理解し、その上でこの判断が行われなければならない。

IBNA の戦略計画は、様々なテーマと目標を追求する中でこれらのあらゆる問題に取り組んでいる。下の表は、戦略計画に含まれている具体的なテーマと目標をまとめたものである。各テーマと目標はそれぞれ上述の重要な傾向と条件に対応している。

傾向と条件	テーマ	目標
プログラムとサービスを提供するためにテクノロジーをこれまで以上に重視する。	サポートサービスとインフラストラクチャ	I.2, VI.3
革新的で柔軟なモデル	サポートサービス	I.2, I.4
カレッジと総合大学、および企業または実業社会との連携をより緊密に発達させる。	社会的認知とパートナーシップ	IV.4, V.1
財団、企業および政府からの支援	社会的認知とパートナーシップ	IV.2, V.1, V.2, V.5
あらゆるプログラムと事業に参加する生徒と教員の多様性を高める。	アクセス	III.1, III.2
教員を集め維持するための独創的アプローチ	専門能力開発	II.1
IBNA がより広く社会から認知されるように、宣伝キャンペーンを行う。	社会的認知とパートナーシップ	IV.1, IV.3, V.1, V.2
立法プロセスと公共政策の立案プロセスに参加する。	社会的認知	IV.2, V.2

課題と影響

多様性

観察：社会は急速に多様化が進んでいる－民族と多民族、国籍、言語、文化、および家族の構造、並びに経済に関する多様性。

影響：カリキュラムとプログラムの開発および専門能力開発事業を推進するときに、生徒の人口集団の中での文化的多様性の課題に IB カリキュラムが敏感にならなければならない。

観察：都市部の学校では、生徒の人口集団における多様化が進み英語学習者（ELL）に分類される生徒が増えている。

影響：英語の理解と会話に困難な時期を経験する生徒に、IB はどのように対処すればよいか。ELL 生徒の排除は解決策になるだろうか。それは IB にとって好ましい選択ではない。

移動性

観察：社会は地域間の移動性がますます高まっている。生徒は学校から学校に移動する。米国内において、「落ちこぼれを出さないための法律」（No Child Left Behind Act）が「学校を選択する」権利を生徒に認めたことで、移動性の課題に新たな次元が加わった。

影響：IB プログラムは生徒の移動性にどのように対処すればよいか。IB は、プログラムのオンラインデリバリーとテクノロジー援用学習の規定を正式に定めることを検討すべきである。

グローバルゼーション

観察：生徒はこれまでより広い範囲の情報、学術的経験、および影響に従来より若い年齢でさらされる。

影響：IB は、生徒がグローバルコミュニティの中で学習し、情報を集め、知識を広げる新しい方法に対処するため、ダイナミックで革新的なアプローチの開発を検討すべきである。

学校の選択

観察：米国では、教育の民営化が進むのに連れて、州の資金提供方法と法的規制が進化を続けている。民営化の形態として、米国のチャータースクール、カナダの独立学校、学校券プログラム、および自宅学習などがある。

影響：この動きは、生徒と学校の資源を公立校から遠ざける可能性がある。しかし、公立校の生徒は IB プログラムに参加する生徒の中で大きな割合を占めている。

観察：連邦と州の要求のために資金需要が増える一方であり、しかも予算は減っているの
で、学校区および学校委員会では、新たなプログラムを実施するために使える資源が減っ
ている。

影響：IB は、IB プログラムを支えるために企業や政府とのパートナーシップなど新たな収
入源を求めなければならない。たとえば米国内では、連邦初等中等教育法のタイトルIの
資金を獲得することが可能だろう。さらに、上級課程を発展させるために米国内で利用で
きる連邦資金を最大限に獲得する機会を活用するよう、学校区に対し IB がアグレッシブに
働きかけるべきである。

観察：社会は優れた教育を受けた労働力を必要としている。

影響：IB は、中等後教育または職業課程をプログラムに追加することができるだろう。そ
れにより、IB 卒業生が容易に中等後教育への進学および就職できるようにする。学校、学
校区または学校委員会、中等後教育機関、および地域の企業との間でパートナーシップを
確立することで、IB 生徒は、希望する中等後教育機関に入学し、より高度な職を得るため
に一層大きな機会を持てるようになるだろう。

観察：生徒の学習到達度の測定結果をデータベース化することが、今後一層重要視される
だろう。

影響：IB は、IB プログラムの成果を文書化するために包括的評価プロセスを開発し、大学
進学や就職する IB 卒業生の追跡調査を行うべきである。

テクノロジー

観察：我々の社会は、ますますテクノロジーへの依存を強めており、テクノロジーの活用
については、教師の多くより生徒のほうが卓越している。また、テクノロジーの進歩によ
ってバーチャル教室、遠隔学習、自宅学習などの分野で新しい教育法方法が可能になった。

影響：IB は、このような傾向を最大限に活用するため、テクノロジーに熟達し、この新し
い環境に適応するべきである。また、このような環境に対応するために教師にテクノロジ
ー・トレーニングを提供する必要も生じるだろう。

教師

観察：教師の高齢化が進み、多くの教師が退職時期にさしかかっている。

影響：IB 課程を教えるには、どの学年であろうとも教授法の能力と内容面での知識が優れ
ていなければならない。教師が優れた成果をあげるために必要なスキルと経験を身につけ
ていることを、どのようにすれば IB が保証できるだろうか。特に地方部と都市部において

どのようにすればよいか。No Child Left Behind Act の規定に従って、教員が「高度な資質を備えている」ことを、どのようにすれば IB が保証できるだろうか。経験豊かな教員の不足は、教師が 1 人でいくつもの学科を担当する中級学年において大きな影響が出るだろう。この専門能力開発を学校にとって財政的に実現可能にするには、IB はどのようにすればよいか。

米国の No Child Left Behind (NCLB) による規定

観察：学校では、読解、数学、および理科の補習によって生徒の到達度を向上するためにより多くの資源が費やされるようになっており、提供されるプログラムのタイプが削減される動きが強まっている。

影響：NCLB がカリキュラムの範囲を狭めているので、学校環境における IB プログラムの実施がより困難になるだろう。

観察：この法律が読解、数学、理科などの基本的学習分野における生徒の到達度を高めることを目指しているので、あまり成績の良くない生徒が IB プログラムを履修する機会を持たなくなるだろう。

影響：これは、IB が到達度の高い生徒のための「エリート主義」的プログラムであるという認識を増幅しかねない。

観察：厳格なプログラムを履修する生徒が大学で良い成果を収める確率が高いということが調査によって示されている。

影響：IB プログラムを推進するため、連邦の資金提供制度をより巧みに活用すべきである。IB は、NCLB 法の強い影響力を利用して、試験の得点を上げるための方法として学校区に IB をアピールすることができるだろう。

4. 戦略目的と目標

I. サポートサービス

IB プログラムを開発、実施、および維持するために完璧なサポートと支援を学校に提供する。

目標 1：生徒の学習到達度向上を促すために必要なサービスのレベルとタイプを判定する。

目標 2：地域全域でサポートサービスについての関係者の満足度を高める。

目標 3：IB プログラムの実施を考えているかまたは現在実施している学校に対して行うサポートのレベルを引き上げる。

目標 4：学校に提供するフィードバックと分析のタイプを改良し質を向上する。

II. 専門能力開発

IB ネットワークに参加する教育者は、IBO の哲学と価値観に沿った内容を持ち、内省的な実践者を育成する、アクセスの容易な、タイムリーな、適切かつ効果的なトレーニングを受ける。

目標 1 : 経験レベルごとに、適切な時期に、適切なトレーニングの機会を教師に提供するため、専門能力開発活動の量とタイプを増やす。

目標 2 : 内容、方法論および教授法を改善し、その結果を参加者の満足度を尺度として測定する。

目標 3 : 参加者によって報告される教育行動の前向きの変化を増やす。IB 専門能力開発を通じて、生徒の学習到達度を高め、良い教え方を強化することを含める。

目標 4 : ワークショップの中で、リーダーが IBO の哲学をより一層強調する。

III. アクセス

北米地域のどこにいる生徒でも IB プログラムを利用できるようにする。

2005 年 3 月 31 日における状況。

目標 1 : 初等学校、中等学校、および高等学校レベルで IB プログラムを提供する学校を増やす。

目標 2 : 社会的弱者の通っている IB 校の数を増やす。

目標 3 : すべての IB プログラムにおいて、特殊なニーズのある生徒に対応する計画を立てる。

IV. 社会的認知

IBO は、すべての生徒がアクセスできる、質の高い教育プログラムを提供する最高の組織として認知されるようになる。

目標 1 : IB プログラムの利用を正式に認定し奨励する教育界のリーダーとポリシーメーカーを増やす。

目標 2 : 地域、州および国のポリシーメーカーと教育界のリーダーから IB プログラムを拡張するための支援を受けられるエリアを増やす。

目標 3 : 国際教育の重要性を認識する保護者、企業および教育団体を増やす。

目標 4 : 大学が学生募集、入学許可、単位、プレースメントおよび奨学金に関して IB のディプロマ・プログラムを認定する方法を多様化する。

目標 5 : 他の教育機関との関係を増やし、またその有効性を高め、そして IB を広めるためにその関係を活用する。

V. パートナーシップ

IB プログラムは、教育機関、政府、企業その他の多様な団体から支持と資金提供を受ける。

目標 1 : IBNA とパートナーシップを組み、IB プログラムのアクセスの可能性を広げるために資金とサービスを提供してくれる企業と財団を増やす。

目標 2 : IBNA と明確な関係を築く州を増やす。

目標 3 : 質の高い専門能力開発サービスを提供する業者を増やす。

目標 4 : IB の哲学と教授法を取り入れる中等後教育プログラムまたは教育機会を開発する。

目標 5 : 各国の政府および全国的組織との提携活動を増やす。

目標 6 : 学校および学校区との提携活動を開始する。

VI. インフラストラクチャー

IBNA は、IB プログラムを振興し支援するサービスを効果的に提供できるようにするため、組織構造を拡大し改良する。

目標 1 : ボランティアネットワークを強化する。

目標 2 : 北米地域の学校が直面する課題と傾向に対処するため、調査能力と対応能力を増強する。

目標 3 : 戦略目的の遂行を支えるオフィスのテクノロジー能力を拡張する。

目標 4 : IBNA の目標を実現するために準地域構造の整備計画を立てる。

目標 5 : 専門スタッフの能力開発機会を拡張し改善する。

目標 6 : 各関係者が適切に代表される状況を維持しながら、効果と効率性を上げるために、組織の統治と構造を見直す。

ディプロマ・プログラムの評価プロセス

IBO は 2004 年に「ディプロマ・プログラム評価 原則と実践」(Diploma Programme assessment Principles and practice)で評価についての考え方や評価プロセスを明らかにしている。原稿は 5 章 (1. 序文と概要、2. 評価の原則、3. ディプロマ・プログラム評価—目的とアプローチ、4. ディプロマ・プログラム評価の構造、5. ディプロマ・プログラムの評価プロセス、付録) からなるが、以下は、5 章のディプロマ・プログラムの評価プロセス及び付録 B の翻訳である。

5. ディプロマ・プログラムの評価プロセス

5. 1 試験問題の準備

高度なコンストラクトの妥当性 (つまりバランス良く選択された課程内容の全体について課程目標によって定められた必要なスキル範囲を適切に表している) があり、知的な要求水準が適切であり、可能な限りバイアスを排除した試験問題の準備は、困難な任務です。この任務を実行するため、試験問題は試験セッションごとに毎回新たに準備され、外部コンサルタントから協力を得て、長い期間をかけて、上級試験官と IBO スタッフのチームによって問題が作成されます。まず最初に、試験の実施時期より 18 ヶ月ないし 2 年前に、1 つの課程で試験問題セットの準備が開始されます。準備プロセスの最も重要な段階を、受験者数が多く、上級試験官チームが参加する典型的な教科の場合について以下に説明します。受験者数の少ない教科では、「責任試験官」が 1 人ですべての段階を実行する場合もあります。

最初のステージは、試験問題の委託です。1 つの教科について、上級レベル (HL) と標準レベル (SL) の両方の完全な問題セットが必要になりますが、上級試験チームの各メンバー (主任試験官、主任試験官代理、および適宜その他の熟練試験官) は、それぞれそのセットの中の 1 枚または複数枚の試験問題を準備する責任を与えられます。上級試験官は、担当する試験問題を全部作成する場合もあり、また他の試験官から提出された問題を編集して試験問題を作成する場合があります。コンストラクトの妥当性を維持するため、各試験問題には仕様があり、質問の数とタイプが定められています (第 3.5 節を参照)。こうして構造を固定することにより、試験問題の連続する複数の版を通じて要求の比較可能性が確保されやすくなります。上級試験官は、認知的要求の多様性が適切に保たれ、またあまりにも予測可能性が高くなりすぎないように問題を設定するため、常に注意を払っています。どの試験問題でも、受験者が過去に経験したものとは何らかの意味で違う質問やタスクに取り組むようにするという、重要な要件が満たされなければなりません (生徒は試験に登録すると受験者と呼ばれます)。どの課程でも、問題として出せる質問のタイプには限りがあります。しかし、質問の少なくとも一部は、創造的に問題を解決するかまたは創造的に考えること、十分に練習をしたスキルを使って問題を解くだけでなく、新しい文脈で自分の知識を応用すること、あるいは知識を別の形で表現することを受験者に要求することを意図したものでなければなりません。

各試験問題に添付される採点スキームの準備にも、同様に努力が払われます。自由解答型のタスクまたは質問は、各セッションで同じ評価基準に従って採点が行われますが（第5.4節を参照）、そのようなタスクまたは質問が含まれている試験問題でも、採点に関する説明書が作成され、これにより、各質問の文脈の中で基準をどのように適用すべきかについての指示が試験官に提供されます。採点スキームは、評価プロセスの完全性にとって試験問題と同じように重要なものです。各採点スキームは、単なる模範解答のセットではありません。受験者が質問に解答するためにとるかもしれない一般的な代替可能なアプローチをどのように採点すべきかについての指示、および一般的に受験者が示す可能性のある誤りまたは誤解をどのように処理するかについての指示を提供するものです。

試験問題のセットの初回ドラフトが準備された後、上級試験チームと該当する教科分野マネージャ（SAM）またはカリキュラム分野マネージャ（CAM）が試験問題編集会議を開いて、作成されたドラフトを検討します。この会議では、レベルごとに試験問題のセットを全体的に検討し、課程内容と課程の目標が試験問題セットの全体を通じてどのように取り入れられているかを確認します。またこのグループは、質問を1つ1つ検討し、適切さ、正確さ、および曖昧さやバイアスの可能性について批判的に検討します。すべての質問とそれに付属する採点スキームについて、正しく機能するかを徹底的に調べます。この会議の前後で、安全な電子的環境を用いて上級試験チームの内部で試験問題についての議論を続けるとができます。

ドラフトの改訂について合意が成立すると、「ポスト・ミーティングドラフト」が外部アドバイザーに送られます。このアドバイザーは、試験問題準備プロセスと関係のないコンサルタントです。外部アドバイザーは、各試験問題のセットごとに課程の内容が適切に取り入れられているか、過去の試験問題セットと比較した難易度、受験者が所定の時間内に問題を解けるか、および試験問題編集会議ですでに取り上げられたあらゆる事項について、誰にも影響されずに意見を提出します。外部アドバイザーは試験問題についての報告書を書き、SAMまたはCAMおよび上級試験チームは、その報告書を検討しなければなりません。外部アドバイザーが指摘した課題に対しどのように対応するかの決定は、試験問題の作成者とSAMまたはCAMが協力して行い、適宜主任試験官がこれに加わります。

試験問題および採点スキームの内容について最終的に合意が成立すると、試験問題作成部（EPPD）が責任を引き継ぎ、試験問題の各セットについてフォーマットの設定、活字組、印刷、および各校への発送を行うためスケジュールを作成し、それらの作業を管理します。SAMまたはCAMおよび試験問題を作成した上級試験官は、適切な段階で試験問題の点検、校正、および情報の提供を行います。高度な技術的内容を含む試験問題用紙は、特別なチェッカーが最終校正原稿を誰の影響も受けずに読み、すべての質問の答えを作成し、採点スキームに照らして解答を点検します。こうすることにより、専門用語、記号または数字の間違いが無いか、それが見過ごされていないかを確認します。特別チェッカーは、試験問題の内容を知りすぎていると細部まで目を通すことが難しくなるので、この段階まで試

験問題の作成にかかわらなかつた熟練の試験官でなければなりません。

典型的な試験問題の準備で行われるすべての段階を示したリストを表 1 に示します。グループ 3～6 の教科については、フランス語とスペイン語に翻訳するための時間を見込んでおく必要があります。翻訳は、通常は英語版の試験問題について試験官の校正が完了し、ほぼ最終的な完成が間近になった時点で、初めて開始されます。翻訳プロセスで明らかになった課題、特に想定外の曖昧さや教科に固有の専門用語などに関する課題は、試験問題の英語版にフィードバックすることができます。

表 1：グループ 4 または 5 向け試験問題の典型的作成スケジュール

作成段階	所要時間 (単位:週)
1. 試験問題の委託、および最初のドラフトの準備。	14
2. プレ・ミーティングドラフトを EPPD に提出、フォーマットを設定する。	5
3. 試験問題編集会議、および見直し。	4
4. ポスト・ミーティングドラフトを EPPD に提出、修正を行い点検する。	4
5. ポスト・ミーティングドラフトを外部アドバイザーに提出、報告を求める。	5
6. SAM または CAM による追加のコメント。	3
7. 試験官から EPPD、SAM または CAM に最終ドラフトを提出。	9
8. 最終ドラフトを SAM または CAM が点検。	3
9. SAM または CAM による最終修正、フォーマットの設定、および点検。	4
10. EPPD による校正とクロスチェック。	3
11. 試験官による最終校正。	4
12. SAM または CAM による最終修正および校正。	4
13. 特別チェッカーによる見直しと適宜修正。	7
14. 様式と整合性の最終点検。	1
15. SAM または CAM による承認と印刷所への入稿。	3
16. 印刷業者からの校正刷りの返送、点検。	1
17. 試験問題の印刷、各校への発送のための荷造り。	12
総所要時間	86 週

EPPD-試験問題作成部

SAM-教科分野マネージャ

CAM-カリキュラム分野マネージャ

表 1 に示したスケジュールは、いくつかの重要な要素が反映されるように作成されています。第 1 に、高品質の試験問題を作成するためには、プロセス内の多くの段階で慎重な検討、議論、および反省が必要です。第 2 に、参加する主な担当者（SAM、CAM、上級試験官）は、他にも様々な仕事があつて、試験問題の準備が 1 つの段階から次の段階に移れる状態になつても、すぐにはその準備作業に取りかかれません。第 3 に、準備プロセスの

重要な段階では、1組の試験問題セットに含まれるすべての試験問題が揃わなければ、次の段階に進むことができません。したがって、1枚の試験問題が遅れただけで、その用紙が含まれる試験問題セットが保留されることとなります。第4に、準備しなければならない試験問題の枚数が多いので、EPPDスタッフが必ずしも1つ1つのセットを迅速に処理できるとは限りません。5月のセッションでは、翻訳を含めると700枚もの試験問題を準備しなければなりません。11月のセッションでも約400枚あります。年間2回の試験セッションがあり、準備スケジュールが長期にわたるので、試験問題準備部のスタッフはいつでも最大2,000枚の試験問題の作業を進めることになりかねず、したがって1つの段階から次の段階に進める準備ができた試験問題を逐一スタッフがすぐに処理することは不可能です。同様に、異なる試験問題が多数あり、しかもその中の一部の試験問題は印刷枚数が大量にあるので、印刷業者がすべての試験問題を印刷し、正しく揃えるために相当な時間が必要になります。作成スケジュールは、試験問題が試験スケジュールの開始より3週間程度前に各校に到着できるようにすることを目標としています。これは、世界の配送ネットワークに遅れが生じる可能性、特に通関の遅れを考慮しています。また、学校が届けられた試験問題を点検し、ずれを修正するための時間も含まれています。

必要な資源が多く、また適切なトライアルグループを決定することが困難なので、試験問題を用いた予備テストは行われません。

5.2 試験

各セッションの試験は、それぞれ5月と11月に約3週間にわたって行われます。試験対象の教科数を考えると、2教科または3教科をスケジュールの同じグループに入れて試験を行わなければ、このスケジュールは実行できません。このようにして同じグループに入れる教科の選択は、1人1人の受験者にとって受験科目の衝突が最も少なくなるように、行われます。ただし、受験科目の衝突が多少発生することは避けられず、その衝突への対処手続は便覧(Vade Mecum)(便覧はDPコーディネーターおよび教師向けの手続マニュアル)で説明されています。

試験のスケジュールは、可能であれば通常の場合で1日の試験時間が6時間を超えないように設定されます。金曜日の午後は、試験を行わないように空けてあります。これは、授業日が月曜日から金曜日までではない学校に多少でも配慮しようという考えによるものです。1つの課程での通常の試験パターンは、2枚または3枚の試験問題を連続して行い、ある日の午後に開始し、翌日の午前中に終了するように計画されます。以下の理由から、このパターンは、1つの課程のすべての試験を1日に行うパターンより好ましいと言えます。

- 大半の受験者にとって、3週間の試験期間全体に均一に試験が配置されます。受験者がある1つの試験で十分に力を発揮できなかったと思っても、立ち直る機会を持てます。
- 受験者が病気またはやむを得ない理由によりある1日の試験を欠席しても、その翌日ま

たは前日の試験問題は受けとることが可能です。状況によっては、十分な評価コンポーネントに解答すれば、その受験者にグレードを授与できる可能性もあります。

- ・異なる解答用紙（スクリプト）を複数の日に分けて試験官に送付するので、輸送中にすべてのスクリプトが紛失する危険を減らすことができます。

ただし、金曜日の午後を使わずに3週間のスケジュールを完了するため、すべての試験を上記の要領で行うことはできません。言語 A1 と言語 A2 の試験は、試験問題 1 と試験問題 2 の間に数日間の間隔を置いて行われる場合があります。それらの試験問題は、内容的にはまったく独立している上に、用いられる言語は受験者が得意とするものなので、他の教科で試験問題の間隔を開ける場合に比べれば影響が小さいものと思われます。

学校は、便覧で説明されている厳格な規定に従って試験を実施しなければなりません。これらの規定は、試験資料の受け取りから、試験の実施、そして試験官へのスクリプトの送付に至るまで、あらゆる問題に関して取り決められています。試験期間の間は、学校の運営手順とセキュリティ態勢を点検するため、IBO 地域オフィスのスタッフとコンサルタントが無作為に学校を選んで立ち入り検査を行います。

特別な学習障害、行動障害、身体、感覚器または医学的な条件、あるいは精神衛生上の問題など個人的な配慮を必要とする受験者がいる場合、学校がそのような受験者のためにどのようにして特別な評価態勢を準備すればよいかについての情報は、便覧と評価に関して特殊なニーズのある受験者が抱く不安についての説明書によって提供しています。

5.3 内部評価およびその他の試験以外のコンポーネント

内部評価には様々な形式があります。例えば、短いものでは言語 B 課程での個人で行う口頭発表と 10 分間のディスカッション、長いものでは視覚芸術での調査ワークブックがあります。このワークブックは、各生徒の芸術的な成長を記録するもので、HL では 72 時間（課程の約 3 分の 1）をこれに充てるのが推奨されています。中間的な長さのものとして、実験科学（グループ 4）の内部評価があります。これは、HL ではポートフォリオから選択した 60 時間の実践的作業単位（pieces of work）で構成されます（総授業時間の 25%）。評価タスクの特徴には内部評価の目的が反映されます。特に、評価の重点と使用されるプロセススキルのタイプがタスクに反映されます。中でもグループ 4 では、ポートフォリオ全体の中から一定の基準を満たす特定の実践的作業単位が選択されなければなりません。

内部評価の形式は様々ですが、すべての内部評価に共通する手続上の特徴がいくつかあります。第 1 に、内部評価は可能な限り普通の教室での授業の中に組み込まれなければなりません。内部評価は、教科内容ではなくスキルが焦点となりますが、教師または生徒が内部評価の対象として選択する活動は、多くの場合、規定の課程内容を教授するための手段として利用することも可能です。内部評価のために採用される活動は、スキルの向上のため

めに、つまり形成的に利用することもできます。また、累積的に用いれば最終評価結果を得るためにも役立ちます。ある1つの活動を形成的評価から最終の累積的评价の一部として用いるように変更するかは、多くの場合、教師の決定に委ねられます。内部評価は、1つの課程の授業がすべて終わった後に実施される、授業とは別の「追加的」活動と見なすべきではありません。

第2の共通の特徴は、実際に最終評価に反映される活動のために教師が生徒に提供する規定のサポートレベルです。その活動から最終的に作り出される結果が比較的形式的な文章作品である場合、一般的に教師が生徒と共に主題とアプローチについて議論し、最初の下書きを読んで限定的な範囲で助言を提供することが許されています。その後に行う原稿の修正あるいは編集は、生徒が行わなければなりません。それにより、内部評価のために提出される最終作品が生徒自身のものとなります。内部評価の対象作品を作成するベースとしてグループ活動が認められる場合もあります。ただし、文章作品を提出する場合には、必ず生徒1人1人の個人制作でなければなりません。

第3に、内部評価を実行するときには課程ごとに定められている評価基準セットを適用します(第5.4節を参照)。この基準は、内部評価の対象とすべきスキルの種類とレベルを定めたものです。教師は、生徒が内部評価基準を良く理解していること、また内部評価の対象となる作業単位がそれらの基準を効果的に取り入れていることを保証しなければなりません。特に、グループ4の実験科学においてこのことは重要です。このグループでは、実践的作業のポートフォリオの中に評価基準に照らして判断すれば内部評価に適さない作業単位がいくつか含まれている場合がありますし、それはまったく当然のことなのです。グループ4の内部評価基準は、ある特定のスキルセットを対象とするように考えられていて、一部の標準的科学的実験室作業ではそのスキルが重要であるとは限りません。

外部で採点が行われる試験以外のコンポーネントでも、少数のコンポーネントについては、上記の特徴のうち最後の2つが当てはまります。そのようなコンポーネントとして、課題論文、知識の理論の論文、言語A1の世界文学の課題、言語A2の筆記タスク、および音楽的調査があります。これらの作業単位は、採点のために試験官に送付され、教師が採点するものではありませんが、生徒と共に作業についてディスカッションをし、助言を行い、評価基準を検討する上で教師が果たす役割は、教師が採点を行う内部評価コンポーネントの場合と非常によく似ています。

5.4 採点

すでに、採点者の信頼性がいかに重要であるかについて述べましたが、信頼性とは、ある1つの作業単位について、その採点を行う試験官が誰であろうと、またいつその採点が行われたかにかかわらず、ほぼ一定の点数を付けることができる評価プロセスの能力を言います。この信頼性を確保するために行われている主な方法は3つあります。第1に、一貫性を持ってまた客観的に採点を行うことができる試験官だけを任命し継続採用することが重要です。DP試験官はほぼ全員がこのプログラムの経験を積んだ教師です。そのような

試験官は、教授されている課程と評価要件についてあらかじめ熟知していること、および期待される水準についてもある程度の知識があることから、採点というタスクにとって理想的です。第2に、個々のコンポーネントの最上級試験官を除き、すべての試験官は試験セッションごとに毎回自分の採点について点検を受けます。過去に良くできたからと言っても、次のセッションではどうなるかわかりません。この手続は、適正化と呼ばれ、第5.5節で説明いたします。第3の方法については、ここでより詳しく解説します。それは、採点をどのように行うのかについて試験官に総合的な指示を行うことです。これは、事前のトレーニングによって可能になります。IBOでは、この分野の活動について、近い将来電子的手段を利用して大幅に改善する計画です。ディプロマ・プログラムの試験官に対しては、適正化を成功させるために従うべき運用上の手続についての詳細な指示と、どのように配点を行うかについての十分な情報が提供されます。

IBOは配点に関して試験官に指針を示すため、主に2つの方法を用いています：分析的採点スキームと評価基準（得点帯域と呼ばれる改良版があります）。

5.4.1 分析的採点スキーム

分析的採点スキームは、受験者に対し特定の種類の解答または最終解答を期待する試験問題のために作成されています。この採点スキームは、ある1つの質問に割り当てられている総点数を解答の各部分にどのように配分するかについて、試験官に具体的な指示を示すものです。上級試験チームが解答の各部分の重要性を定め、それに従って点数の配分が決まります。受験者は、1つの質問の様々な部分について、正解する場合も間違える場合もあります。また、長い構造化された質問は、受験者がその質問の最初の部分で間違えると、その後の部分に正解できないように作られています。このため、科学や数学など理数系の教科では、構造化された質問を採用して、試験官が部分点を認めることができるようにしています。複雑な質問を構造化しないと、解答の早い段階でわずかな間違いを犯したり、ちょっとした誤解をしてまったく見当違いの方向で考えてしまったために、多くの点を失う受験者がいるかもしれません。最も高度に作られた分析的採点スキームは、数学で用いられているものです。その採点スキームでは、特定の種類の誤答をどのように採点するかについて、また受験者が1つの質問の一部分で間違えている場合に、どのようにしてその解答を最後まで採点するかについて、具体的な指示が示されています。

高度に特殊な解答を期待している構造化された質問でも、受験者が取り得る多様なアプローチの中の主な種類について、また受験者が犯すと思われる共通の誤りについて、一貫性のある採点を行うため、採点スキームにより十分な情報を試験官に提供しなければなりません。また、予想外の解答や模範解答とは異なるけれども有効な解答に点数を付けるため、試験官の専門的な判断が必要になる問題が、試験問題には必ずいくつか含まれています。しかし、採点スキームはそのような判断をどのように行うかについて、可能な限り多くの指針を提供しなければなりません。

試験官助手は、採点スキームと評価基準の提供を受けますが、採点期間中にはその他にも

電話や e-メールによって上級試験官から助言を受けることができます。

上級試験チームは、試験問題とその採点スキームを作成するとき、受験者が書くあらゆる種類の解答を予測できるとは限りません。受験者が書きそうな種類の解答を予測するためにあらゆる努力がなされますが、世界には、教育に関する文化も教授スタイルも様々なものが存在するので、世界規模でこの予測を行うことはきわめて困難です。この問題に対処するため、そして、試験官によって異なったものになる可能性のある判断への依存をできる限り減らすため、受験者の多い教科では、試験問題ごとに担当の上級採点者が試験終了後直ちに会合し、一部の受験者を抽出してスクリプトの検討を行います。この会議は標準化会議と呼ばれ、ある人数の受験者が書いた実際の解答を踏まえて、採点スキームに少数の最終的な追加と修正を行い、さらに、採点スキームがどのように適用されるべきかについて上級採点者達が合意していることの確認を目的としています。この会議は適正化を適切に行うために不可欠であり、会議の席上で指摘された問題点は直ちにすべての試験官助手に伝えられます。

5. 4. 2 評価基準

評価タスクが自由解答式で、有効な解答があまりにも多様になるものと推測され、分析的採点スキームを作成できない場合は、代わって評価基準が適用されます。評価基準は、ある特定の種類の教科内容の知識を示すように受験者に求めるものもあり得ますが、受験者の解答に含まれるべき具体的な内容を指定するものではありません。評価基準によって定められるのは、むしろ受験者が示すことが期待される一般的なスキルであり、解答の特殊な個人的特徴は問題になりません。例えば、言語 A1 の試験で、初めて見る 2 つの文章の抜粋があり、そのうちの 1 つについて意見を書くように求めている場合、その問題に適用される 5 つの評価基準には、それぞれ次の名前が付いています：テキストの理解、テキストの解釈、文学的特徴の評価、外観、言語の正式な使い方。1 つ 1 つの基準は関連するスキルのセットで構成され、受験者はそのスキルを一定の範囲の完成度で示すことが求められます。また言語 B（主たる第 2 言語課程）では、選択したタスクに対する解答を文章で作成するよう求める試験問題について、次の 3 つの評価基準が用いられます：言語の流暢さと正確さ、文化的相互作用（想定されている読み手にとってスタイル、言語レベル、手段、および構造が適切か）、メッセージの伝達。第 3 の例として、学習テーマを選択して、それに関する哲学的論文を求める質問に適用される 4 つの基準は次のとおりです：表現の明晰さ、哲学的問題についての知識と理解、関連する問題の認識と分析、および展開と評価。

自由解答式の問題の他に、内部評価と外部で評価される非試験タスクも高度に多様化する性質を持つため、評価基準を適用して採点が行われます。グループ 4 のすべての実験科学では、内部評価のために次の 8 つの評価基準が用いられます。

- 調査のため最初の計画立案（問題の定義、仮定の作成、変数の選択）
- 道具の選択と方法の設計

- ・ データ収集
- ・ データの処理と提示
- ・ 結論と評価
- ・ 操作的スキル（技術を実行し、指示に従う）
- ・ チーム作業のスキル
- ・ 意欲と倫理的な活動

これらの基準と第 3.5 節で示した課程の目標との間には密接な関係があり、高度なコンストラクト妥当性がそれによって支えられています。

評価基準が適用されるあらゆる場合において、受験者の到達度にどのような差があると得点に差が出るかは、各基準ごとに定められている到達度記述子によって定義されます。この記述子は、受験者の解答を基準に照らして測定するための典型的な方法を記述するものです。ある 1 つの作業単位の得点は、すべての基準に関して最高到達度が得られている場合に、それぞれの到達度の点数を合計して、満点になります。より重要性が高いと考えられている基準にはより大きな重み付けが行われ、より高い到達度が設定されます。

基準到達度記述子は当然ながら階層構造になっていて、多くの場合、それは Bloom et al (1956) が定義している認知スキルの階層構造と関係のあるものですが、その 2 つの階層構造は独立しているということ指摘しておかなければなりません。より低いレベルの記述子が「より単純な」認知スキルにだけ割り当てられるとは限らず、またより高いレベルの記述子が「より高次の」認知スキルにのみ用いられるとは限りません。1 つ 1 つの認知スキル領域の中で、到達度には一定の範囲があるということが認識されています。

一例を示すと、言語 A1 の論評問題 (written commentary paper) (IBO, 1999, p.44) で「テキスト解釈」基準には以下の到達度が設定されています。この基準は、テキストについての受験者の考えの適切さ、受験者がその考えをどれだけ良く掘り下げたか、受験者が自分の主張をどれだけ適切に説明しているか、受験者がどの程度まで自分の適切な態度を表現しているかを測定するものです。この到達度は、第 3.5 節に示した言語 A1 の最初の目標と、課程の最後に行われる評価プロセスとの間にある非常に密接な関連を示しています。第 3.5 節で示したその目標とは「…受験者は、文学に対する自分自身の態度を示すように、独立の文学批評を行う能力を証明することが期待される」というものです。

到達度

- 0 受験者はレベル 1 に到達していない。
- 1 テキストをほとんど解釈していない。
 - ・ 受験者の考えは、ほとんどが無意味かまたは当を得ていない。または
 - ・ 論評が主としてテキストの内容を記述しているか、または繰り返しているだけである。
- 2 テキストを多少解釈している。
 - ・ 受験者の考えは、時々当を得ていない場合がある。

- ・ 論評が主として根拠のない一般化で成り立っている。または
 - ・ 論評は主としてテキストの言い換えである。
- 3 テキストを的確に解釈している。
 - ・ 受験者の考えは、おおむね妥当である。
 - ・ 分析が的確であり、また関連性のある例をいくつか引いて適切に説明されている。
 - 4 テキストの解釈が良くできている。
 - ・ 受験者の考えは明らかに妥当であり、適切な自分自身の態度がその中に含まれている。
 - ・ 分析が全体的に詳細であり、また妥当な例を引いて巧みに説明されている。
 - 5 テキストの解釈が優秀である。
 - ・ 受験者の考えに説得力があり、また適切で熟慮された自分自身の態度がそこに含まれている。
 - ・ 分析が終始詳細であり、慎重に選ばれた例を用いて説得力のある説明が行われている。

DP 評価の到達度基準の適用において用いられているアプローチは、「最適」モデルです。評価基準を適用する試験官または教師は、採点対象の作業単位に全体として最も良く適合する到達度を選択しなければなりません。ある1つの到達度を認定するために、そのレベルの詳細な特徴がすべて満たされている必要はありません。また、分析的採点スキームでは満点がつけば完璧な解答であると言えるでしょうが、評価基準の最高レベルは完璧さを表すわけではないということに注意してください（分析的採点スキームは評価基準に比べ使用する点数の範囲がずっと広がっています）。

どの試験セッションでも毎回同じ評価基準に従って採点される試験タスクがいくつかあります。そのようなタスクの一般的な性質（通常は論文または長作文）はどの試験セッションでも同じだとしても、個々の質問に固有の要件によって評価基準がどのように適用されるかが影響を受けます。その場合、分析的採点スキームは適しません。一般的には、試験問題を準備した上級試験官が採点の注意事項を作成します。その採点の注意事項は、試験官助手に対し、1つ1つの質問にどのように評価基準を適用するかについての指針を示すものです。評価基準が内部評価に用いられる場合は、教師とモデレーターの両者が公表されている教師用参考資料を参照する必要があります。この資料には基準の適用方法がいくつかの例によって説明されています。

5. 4. 3 得点帯域

ある1つの特定の作業単位に適用できるいくつかの異なる評価基準を分離することが適切ではないと判断される場合があります。評価基準は、互いに比較的独立したやり方で適用され、受験者がある1つの基準に関して示したパフォーマンスが他のパフォーマンスに影響を与えないようにすることが最も適切です。実際には、そのようなやり方が完全に実現できることはほとんどありません。別々の評価基準を分離できない状況では、違うアプローチを採用します。これは、評価対象の作業が非常に多様で、1つ1つの基準はすべての解答に容易に適用できるにもかかわらず、それらの基準をセットにして取り出すことができない場合にも、必要な措置です。そのような場合、個別の基準ではなく得点帯域を用い

ます。実際のところ、得点帯域はある作業単位が1つの総体として評価されるとき、その作業単位に適用される単一の総合的基準であると言えます。受験者のパフォーマンスに点差を付けるために合理的な得点範囲の要件が必要なので、各得点帯域レベル記述子は、それぞれがいくつかの得点に対応します。

記述子自体は、かなり長いものになる場合が多く、受験者の作業の中に含まれている潜在的な質の証拠を広い範囲で取り上げます。また、この記述子も課程の目標に直接連動しています。得点帯域の実例は、「ディプロマ・プログラム歴史ガイド」(Diploma Programme History guide) (IBO, 2001a)をご覧ください。評価基準の場合と同じくこの記述子にも「最適」アプローチが用いられます。ただし、1つのレベル記述子に設定されている得点の範囲からどの得点を与えるべきかについては、受験者の作業がその記述子にどの程度適合しているかによって採点者が判断を行います。例えば、ある1つの得点帯域に6点から10点までが設定されているとします。試験官は、受験者の作業が当該のレベル記述子にどの程度適合しているかを得点帯域スケールによって判断し、その範囲から1つの得点を付けます。採点法として総合的(特定帯域)方法と評価基準法のいずれも利用可能な論文があるとして、その両方の採点法を実際に適用して採点すると、採点の信頼性に関して両者にはほとんど差がないことが調査によって示されています(Wood, 1991、第5章)。

5. 4. 4 採点スケジュール

試験官によって行われる外部採点は、厳しい時間的制約の中で行われます。最後の試験日から結果発表までは6週間です。ある1つの試験が行われる日の翌日からその6週間の間に、採点スキームを最終的に決定し、受験者のスクリプトが世界中の様々な場所にいる試験官のもとに到着し、そのスクリプトの採点が行われ、そしてIBCAに返送され、各試験官が採点したスクリプトのサンプルがより経験の豊富な試験官のもとに送られ、その試験官がサンプルの適正化を行い、IBCAに返送し、グレード判定会議が開かれ、そして採点のやり直しが必要であると判断されたスクリプトの採点が完了しなければなりません。各試験官の採点に対する適正化は、その試験官が最初に行った作業のサンプルをベースにして行われます。このサンプルの適正化が行われている間、試験官は担当する残りのスクリプトの採点を続けます。適正化プロセス自体については後出の章で説明しますが、試験官が適正化サンプルを送付した後にも、試験官の担当スクリプト全体を通じて採点に一貫性があるかを点検するために、いくつかの方法が実施されるということを、指摘しておく必要があります。

最初に、グレード判定会議においてグレード境界を決定する段階で、上級試験官チームが数多くのスクリプトを点検します。このプロセスでは、採点よりはむしろ受験者の作業を検討することに重点が置かれますが、問題のある採点があれば目に付きます。第2に、グレード境界が決定された後、もう少しで上のグレードが獲得できた受験者を選んで、上級試験官がそのスクリプトの採点をやり直します。この段階でも、最初の採点に問題があればそれを発見できます。第3に、受験者の作業の再採点(「結果照会」と呼ばれるサービスで、試験結果の発表後に学校が要求できます)が行われている間に、試験官による採点

に問題があったり、一貫性が欠けていれば、その証拠が見つかります。このように、試験官の採点の質を点検する方法が適正化サンプルの他にもいくつかあります。

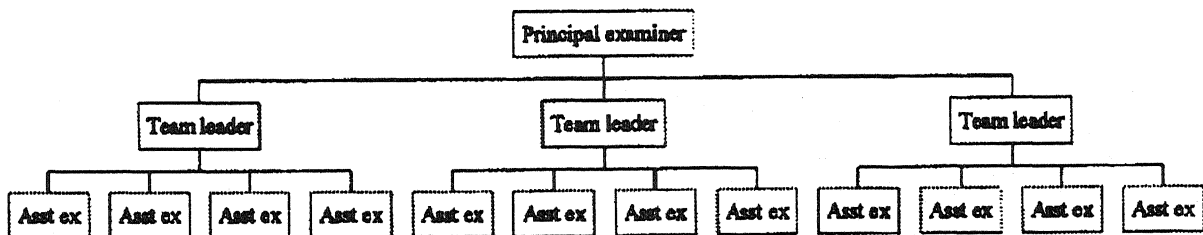
5. 4. 5 訪問試験官

最後に、この章で繰り返し述べているように、評価対象の解答を遠隔地にいる試験官が採点する場合があります。一般的に評価の対象は筆記されたスクリプトですが、時にはビデオテープやオーディオカセットテープの場合もあります。しかし、ある特定の状況では、試験官が学校に向いて受験者の作業を直接評価します。試験官が世界中に広くしかも薄く分布している現状では、資源コストが高くつき、試験官レベルでの信頼性を維持することも難しいので、訪問試験官制度が利用されるのは、この制度に対する明確で確実な要求がある場合に限られます。現在、訪問試験官は視覚芸術と試験的に行われているダンス課程 (pilot dance course) に限り実施されています。受験者の作業を現場で見ることで、そして受験者の作業について当人達と直に議論することの要求は、現状の制約より重要です。訪問試験官は、評価基準に従って判定を行い、その判定の適正化は写真やビデオを使って行われます。これは、受験者の到達度評価における信頼性と妥当性という2つの必要性の間で重大な妥協を行うこととなります。訪問試験官によって行われた採点を扱うための手順は、常に見直しが行われています。

5. 5 適正化

5. 5. 1 適正化手続

適正化は採点の信頼性を確保するための、唯一のものではありませんが、最も重要な手法です (第 5.4.4 節を参照)。各コンポーネントの主幹試験官は標準を定める立場ですが、この試験官を除くすべての試験官は、採点した解答のサンプルを熟練の信頼できる試験官でありチームリーダーである試験官に提出します。このサンプルは、チームリーダーが採点をやり直したうえで、採点結果のペアを統計的に比較することにより、最初の試験官の採点が容認できるものかどうかを判定します。おそらくは若干の調整が行われるでしょうし、容認できない場合もあります。適正化は階層的なプロセスになっていて、受験者数の多い典型的な試験コンポーネントの階層構造を構成する様々なレベルを図 2 に示します。



Principal examiner: 主幹試験官、Team leader: チームリーダー、Asst ex: 試験官助手

図 2: 受験者数の多い典型的な、外部評価が行われるコンポーネントの適正化の階層構造。図は見やすくするために簡略化した。— 実際には、大半のチームは約 10 名の試験官助手によって構成されている。

多くの場合、コンポーネントの主幹試験官は主任試験官または主任試験官代理が務めます。ただし、きわめて熟練した信頼できる元チームリーダーが務めることもできます。一般に、主幹試験官は試験問題の作成者を兼ねます。そうでないとしても、その試験問題の作成に深く関わっています。チームリーダーは、一定数の試験セッションを通じて一貫性のある正確な採点をする能力を証明した熟練の試験官です。一般的に、1人のチームリーダーが最大で10人の試験官助手を監督します。試験問題コンポーネントに関しては、適正化サンプルのサイズは1人の試験官が受け持つ総スクリプトの15%であり、最小で10人分、最大で20人分のスクリプトです。試験官は、一定数の学校から提出されたスクリプトをサンプルとして提出すること、またスクリプトの得点も可能な限り広い範囲が含まれているようにすることが求められます。

5. 5. 2 相関性基準

サンプルに含まれている各受験者のスクリプトに対して2名の採点者による採点が行われた後、そのペアの採点結果を統計的分析にかけます。1つの統計手法は、相関係数です（積率相関係数を用います）。これは、2人の試験官による採点結果の関係性の一貫性を測定するものです。相関係数がゼロであれば、両者の間にはまったく相関性はありません。係数1は、2人の採点者による採点の間に完全な相関性があることを示します。したがって、最高から最低までの候補者のランク付けも一致します（ただし、2人の試験官がまったく同じ点数を付けたとは限りません）。係数-1は、受験者の作業の相対的な価値について2名の試験官が一貫して逆の意見を持っていることを示します。したがって、試験官が付けるランクも対立することになります。

ある1人の試験官による採点が容認可能になるためには、相関係数が0.90以上で、試験官助手とチームリーダーとの間に高い一致が見られなければなりません。相関係数が0.90未満であれば、ほとんどの場合は試験官助手が担当したスクリプトをより信頼性の高い試験官が再度採点することになります。そのような場合、採点の不一致を招いた特定の原因が明らかになり、容易に矯正できる場合を除き、その試験官助手は二度と使われません。

ただし、相関係数が高いというだけでは、試験官の採点が容認可能になるとは限りません。例えば、ある試験官助手が25点満点の試験で、すべての受験者に対してあまりにも多くの問題に4点を付けているとします。そうすると、ランクの相関性は非常に高くなりますが、十分に良い採点であるとは言えません。

5. 5. 3 直線回帰

各適正化サンプルに対して、さらにデータの分析を進めます。その結果、サンプルに現れている一般的な傾向に基づいてその試験官のすべての採点結果に対して適切な平均調整を行うことが可能になります。ここで用いられる技法は、直線回帰と呼ばれるものです。試験官助手とチームリーダーの両者が採点したサンプルの得点からデータポイントの集合をプロットし、それに当てはまる最適の直線を計算します。これを図3に示します。

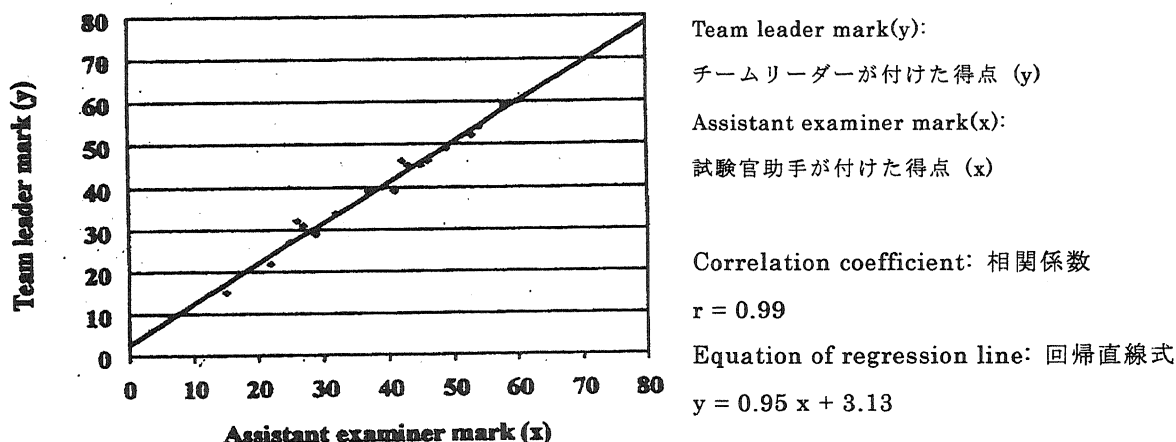


図 3: 80 点満点の試験問題である試験官助手が行った採点についての適正化の回帰直線。1 つ 1 つの点は試験官助手とチームリーダーがサンプルのスク립トに付けた点のペアを表す。実線で示した回帰直線は、試験官助手の採点を適正化後の点数に変換するために用いられる。

サンプルデータから計算された回帰直線式を用いて、試験官助手が付けた得点 (x) を同じ受験者にチームリーダーが付けたであろう得点の平均 (y) に変換します。このような適正化による調整は、サンプルを元にそれより遙かに多い数の得点の集合に外挿することによって行われるので、必ず採点の一般的な傾向を根拠としなければなりません。特定の受験者に特徴的な個人の変位は、考慮できません。例えば、図 3 においてある 1 つの点は、試験官助手が 42 点を付けたスク립トに対しチームリーダーが 46 点を付けたことを示しています。しかし、そのことだけで調整するとすれば、一般的な傾向とは異なり、その試験官助手が 42 点を付けたすべての受験者にとって適切であるとは言えないでしょう。逆に、回帰直線は採点の差異の平均値を表していて、これにより、その試験官助手が 42 点を付けたすべてのスク립トは 43 点に修正されます。そして、このことのために採点の点検がさらに行われます。その中で特に重要な方法が「アット・リスキング (at risking)」(第 5.6 節を参照) と呼ばれるものです。適正化の目的は、受験者の得点が全体としてより適切なレベルに調整されるようにすることです。適正化は、すべての受験者に対して厳密に正確な採点結果を保証することはできません。

5. 5. 4 その他の基準

適正化の調整を自動的に適用できるようになるには、納得のいく相関性を達成することの他にも、試験官の採点が満たさなければならない基準が 2 つあります。まず、回帰直線の勾配が 0.5 から 1.5 までの範囲に入っていなければなりません。直線の勾配が低すぎる（あるいは浅すぎる）と、試験官助手による受験者の採点結果があまりにも広く拡散していることとなります。つまり、できの良くないスク립トに付ける点数が低すぎ、できの良いスク립トに付ける点数が高すぎます。たとえそれが一貫した傾向であるとしても、これは不適切です。この場合、チームリーダーは試験官助手がつける得点の範囲を大幅に圧縮

する必要があります。勾配が 1.5 を超えていると、直線が急峻過ぎるので、今述べたのとは逆のことが言えます。試験官助手は受験者のできの良くないスクリプトとできの良いスクリプトとの差別化を十分に行わなかったので、チームリーダーは得点の範囲を拡張する必要があります。

第 2 の基準は、試験官助手が採点したサンプルの得点の平均とチームリーダーが付けたサンプルの得点の平均との差が、そのコンポーネントの満点の 10% 未満でなければならないというものです。したがって、あるコンポーネントの満点が 30 点だとすると、あるサンプルスクリプトの試験官助手による採点の平均は、チームリーダーが付けた得点の平均から 3 点差の範囲に入っていなければなりません。これら 2 つの基準のいずれか一方だけでも満たせない採点をした試験官は、一貫性はあるかもしれませんが、明らかに期待される採点標準からはずれているので、適正化の失敗と見なされます。

5. 5. 5 適正化の失敗

適正化を適用できない試験官のすべてのスクリプトは、IBCA の評価スタッフが 1 つずつ見直します。評価スタッフは基礎データを慎重に検討し、以下の決定を行うことができます。

1. 別の種類の適正化調整を適用する。主に、得点範囲の別の部分に適用する別の直線による調整が行われる。
2. その試験官の傾向を明らかにするため、サンプルデータの追加を要求する。
3. その試験官の採点を全面的にまたは部分的にやり直すことを要求する。

このような場合は、必ず以後のセッションでその試験官に作業を依頼するかどうかについて SMA/CAM による勧告が行われます。

5. 5. 6 合成適正化

チームリーダーも自分の採点結果のサンプルを提出しなければなりません。彼ら自身も直線回帰による適正化調整を受ける場合があります。図 2 に示した階層構造に含まれているすべてのレベルのために導かれた適正化式を合成し、1 つの総合的適正化調整式を作成し、それを各試験官助手に適用します。このような合成が適切に機能するには、適正化階層構造の中の高いレベルで行われた採点結果が高度に一致していなければなりません。つまり、チームリーダーの採点標準が主幹試験官の標準に非常に近いものであることが必要です。

5. 5. 7 線型モデルの順応

今説明している適正化調整システムのベースには、直線が調整のための最適モデルであるという仮定がありますが、この仮定には疑問の余地があります。現在 IBO は、最適直線ではなく最適曲線の研究を進めています。総合的な試験を行って、不適切な曲線関数 (curved function) が導かれないように、また複数の適正化レベルを横断して曲線関数を適切に合成できるようにしてからでなければ、最適曲線への移行はできません。当面は、「テーリン

グ」を導入して線型モデルを多少改良しています。おわかりのように、直線的適正化調整では可能な得点範囲の両極において不適切な影響が出るおそれがあります。つまり、どの受験者も満点を取れず、また零点を取ることもないという結果になりかねません（例として図 3 を参照）。あるいは、できが悪いけれども若干の得点に値するスクリプトが適正化によって零点を付けられる場合があります。また図 3 の場合のように、受験者が提出したスクリプトに点数に値することが何も書かれていず、本当に零点を付けるべきであるにもかかわらず、その受験者に点が付いてしまう場合もあり得ます。

逆の極端なケースでも同様です。非常に良いスクリプトではあっても、明らかな失敗が数カ所あるにもかかわらず、満点が付いてしまうかもしれません。あるいは本当に満点に値する受験者が満点を取れない場合もあります。一般に、直線回帰による適正化調整の影響は、得点範囲の両極において最も大きくなります。一方で、得点範囲の中央部分では適正化調整の信頼度が最も高くなります。そして、ほとんどのサンプルデータはこの中央部分に集中する傾向があります。

この問題を克服するため、得点範囲の上位 20%と下位 20%に含まれる得点に「テーリング」が適用されます。この両極において、計算により求めた回帰直線を修正し、新しい「テーリングした」直線を適用します。図 4 に示したように、この直線によって回帰直線を最大値の座標と最小値の座標に接続します。

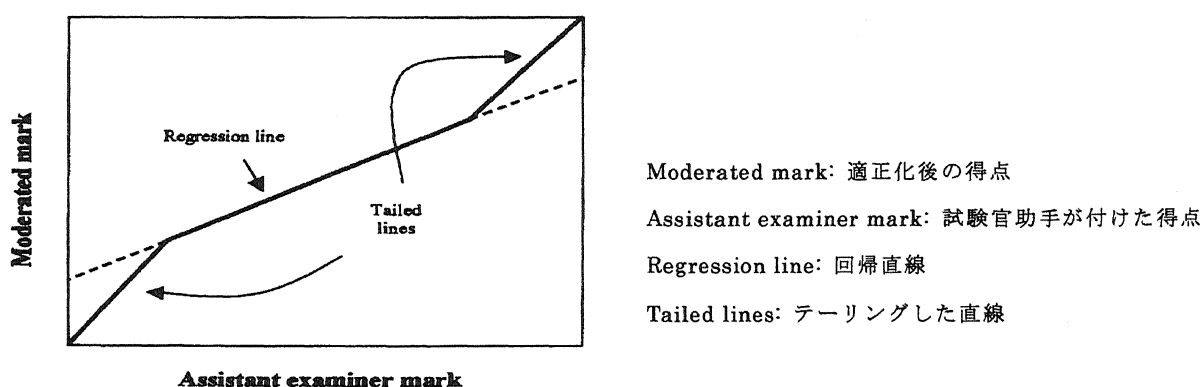


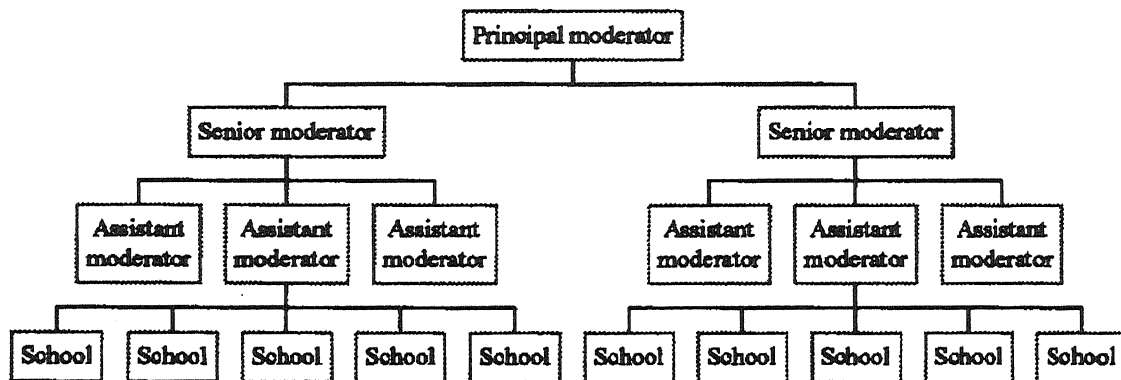
図 4：受験者の得点が最大値または最小値から外れたり、またはそれらの値になることを防ぐため、「テーリング」を行う。

この手順を導入する理由は、試験官がどれほど甘かろうとあるいは厳しかろうと、その試験官が最低点より低い点数、あるいは満点より高い点数を付けられないようにすることです。たとえば甘い試験官は、満点に値しない受験者にも本当に満点に値する受験者と同じように満点を付けてしまう可能性があります。適正化プロセスは、同じ得点のすべての受験者に対し同じ取り扱い方をしなければなりません。そして、到達度の拡散が 1 点にまで圧縮されたときには、得点に疑問があっても受験者に有利な扱いをすることが好ましいと言えます。

このようにして、試験官助手によって満点を付けられた受験者（非常に少数であり、満点よりさらに高い点数に値する場合さえあります）は、適正化調整の結果にかかわらず満点を維持し、同じ試験官が担当したその他の受験者は満点を獲得できません。ただし、これは試験官助手の採点が十分に良くできていて、自動適正化プロセスを実施できる状態であることを前提としています。自動的に適正化を行うことができない試験官は、テーリングも適用できません。もう一方の極端なケースでは、適正化後の点数が零になるのは最初から零点の場合に限られます。テーリングによって、わずかでも得点に値するスクリプトが零点を付けられることが防止でき、得点に値しないスクリプトにわずかでも点数が付くことも防止できます。

5. 5. 8 内部評価の適正化

最初に授業担当教師が採点を行う内部評価については、上述したのと同じ基本構造に従って適正化が行われますが、適正化が行えるかどうかの基準にはいくつかの相違があります。（適正化の成功は、最初の採点が絶対的に正確だったということの意味しません。直線的適正化調整を適用するために十分な一貫性があったということの意味するに過ぎません。）内部評価の適正化階層構造を図5に示します。



Principal moderator: 主幹モデレーター、Senior moderator: 上級モデレーター、Assistant moderator: モデレーター助手、School: 学校

図5：内部評価コンポーネントに適用される適正化の階層構造。図は簡略化されている。実際には、1人のモデレーター助手が約10校から内部評価サンプルを受け取り、1人の上級モデレーターは約10人のモデレーター助手を監督します。

内部評価の適正化が果たす役割に対して外部評価の場合と若干異なったアプローチがとられていますが、それは適正化を行う担当者に試験官とは異なる名称—主幹モデレーター、上級モデレーター、モデレーター助手—が与えられていることによって表されています。これらのモデレーターはその大半が熟練のDP教師です。内部評価されるコンポーネントは、すべて評価基準を適用して採点されます。そして、大半のケースでは、モデレーターに比べると教師は、受験者が作業を行う状況とプロセスについて遙かに豊富な情報を手に

入れることができます。そのことから、言語教科の口頭試験を除く大半の内部評価コンポーネントについて、モデレーターは教師の採点が適切であると思われるかどうかを判断するよう求められるのです。教師が付けた点数に関わりなく受験者の作業を単に再採点するわけではありません。教師の採点の変更されるのは、その採点が不適切であるとモデレーターが確信した場合に限ります。

このように外部評価の場合に比べてより柔軟なアプローチがとられているにもかかわらず、適正化失敗のほとんどのケースは内部評価で発生しています。IBOは内部評価を行う能力に関して教師を信任してはおりません。またIBOは試験官助手については、どの試験官助手が評価を行うかをコントロールできますが、それと同じように内部評価をどの教師が行うかをコントロールできる立場ではありません。また、教師としても、ある1つの学校の1つのクラス内では生徒グループの性質が限定されていたり、時には典型的ではなかったり、あるいは非常に均一なので、広い得点範囲や多様な作業タイプを含んだ満足のいく適正化サンプルを提出することが難しいこともあります。サンプルに含まれる得点や作業タイプの範囲がやむを得ず狭くなると、そのサンプルが自動適正化システムを適用されるための統計的要件を満たすことは一層難しくなります。

このような要因があるため、また内部評価の対象となる作業には本来的に自由解答型が多く、採点において主観性が入り込みやすいことから、適正化プロセスを自動的に適用するための基準は若干緩くなっています。相関係数は0.85以上とします。回帰直線の勾配は、外部評価の場合と同じく0.5から1.5までの間でなければなりません。サンプルの平均値の差に制限がありません。回帰直線のテーリングは、得点範囲の下の部分では行われませんが、上の部分では行われません。これは、明らかに満点に値しない受験者に教師が満点を付けてしまうケースが頻繁に見られるためです。内部評価コンポーネントで使用される適正化サンプルのサイズは、外部評価の場合に比べ小さくなっています（学校からモデレーター助手に送られるサンプルの数は、学校グループに在籍する受験者の人数に応じて、10、8、5、またはそれより少なくなります）。このようにサンプル数が少なくなる理由の1つは、サンプル数をこれより増やすと実際には大半の受験者の作業を再評価する結果になる可能性があること、そしてもう1つの理由は、モデレーターおよび上級モデレーターが担当する受験者の人数が少ないことです。ある1人の受験者について内部評価が行われる作業は、試験スクリプトに比べてより内容が濃く、審査が難しくなります。そのため、モデレーターが担当する作業を少なくせざるを得ません。学校が正式に内部評価成績を提出した後、IBOが受験生を選択し、その作業を内部評価適正化サンプルとして使用します。

学校内である課程の受講者数が十分に多く、生徒を複数のクラスに分け、2名以上の教師が内部評価の実行に携わることができる場合、IBOでは、それらの教師達が内部評価を分担して行うこと、そして評価基準をどのように適用するかについて教師達が協力して標準化作業を行うことを期待します。その学校に対して要求される適正化サンプルは1つです。その中に内部評価に携わるすべての教師が採点した受験者の作業が含まれているはずですが、しかし、1つの学校内に同じ教科で異なる解答言語を用いる複数のクラスがある場合は、

言語ごとに別の適正化サンプルを提出することが求められます。

5. 6 グレード判定と集計

5. 6. 1 手続

グレード判定会議は、各教科の評価プロセスの最終段階です。この会議は、試験問題の日付から約 35 日後に行われますが、このときまでにその教科の採点と適正化がすべて完了していなければなりません。そして、受験者の人数がある程度の規模に達しているすべての教科について、上級試験チームがこの会議のために IBCA に集合しなければなりません。上級試験チームは、SAM/CAM と共にそのセッションの評価コンポーネントに対して行われた評価作業をレビューし、各上級課程と標準課程についてグレード境界を設定し、試験官の採点に関する未解決の問題を解決し、「アット・リスキング」(第 5.6.5 節を参照)を行います。

グレード判定会議の最初の任務は、各コンポーネントに対して行われた評価作業の検討です。会議の参加者は全員が少なくとも 1 つのコンポーネントの採点に積極的にかかわってきた人であり、また大半のメンバーは、試験問題の作成にも貢献しているはずです。上級試験官は、そういった自分自身の経験に加えて、試験問題について教師から正式に提出されたコメントと、受験者の解答の一般的な特徴について試験官助手から提出された報告を読みます。これらの情報は、上級試験チームが試験問題についての全体的な認識を踏まえて適切なグレード境界について合意するための参考となる重要な資料であると共に、すべての学校に配布される教科報告書(第 5.9 節を参照)を作成するための基礎ともなります。

この作業がすむと、チームはセッションごとに新しい境界を設定する必要のある各コンポーネントについて 1 つずつ検討していきます。内部評価が行われたコンポーネントおよび外部評価が行われた非試験コンポーネントの境界は、セッションごとに毎回改訂されるわけではありません。通常、それらの境界は、そのコンポーネントが新たに導入されたときまたは改訂されたときに 1 回だけ定められます。その一方で、試験問題についてはセッションごとに毎回新しい境界が定められます。試験問題は、新しい版が作成されるごとにいつもその前の版と比べて全体的な難易度が同程度になるようにあらゆる努力がなされるので、通常、境界得点の変更幅は小さく抑えられます。

5. 6. 2 グレード境界の設定

専門的な判断に依存する基準関連システムにおいては、上級試験官は、試験問題に書かれた質問と、個々の質問が解答として受験者に何を求めているかを考慮するだけで、グレード境界を設定できなければならないと主張することは可能かもしれません。しかし、受験者が実際にどのように答えるかについて豊富な経験を積むまで、専門的な判断は非常に難しいのが現実です。時には、非常に難しくなるように作られた質問が受験者にとっては容易に答えられるものであることが判明することもあり、またその逆もあります。このような予測不可能性要素を減らすため、試験の予備テストが役立つでしょうが、通常は、ある 1 つの質問が実際にどの程度難しいものであるかの最終判断は、実際に採点をして結果を

見るまでは何とも言えません。

グレード境界の設定は、長い時間をかけて討議を積み重ね、様々なソースから得た情報（上級試験官による経験に裏付けられた判断、統計的比較、標準を熟知し、誰よりも良く受験者を知っている熟練教師の期待）を照合しなければならない、大きな問題です。

各試験問題で最も重要なグレード境界—つまりグレード3と4の境界、グレード6と7の境界、そしてグレード2と3の境界—は、この順に会議のメンバーによる判断で決定されます。これらの境界は、受験者が高等教育に進むために最も強い影響を与える境界です。その他の境界は、会議のメンバーの判断によって設定されたこれらの境界から内挿によって決定されます。会議のメンバーの判断によってグレード境界を決定するための最も重要な手段は、グレード記述子に照らして受験者の作業の質を審査することです。グレード記述子は、それぞれのグレードで典型的な受験者に期待される作業標準の一般的な説明です。

グレード記述子は、ある特定のグレードを取得するために受験者に期待される典型的なパフォーマンスの特徴を説明するもので、授業担当教師にとっては、生徒にどのような準備をさせれば良いか、また生徒が取得できそうなグレードを予測するにはどのようにすれば良いかを知るための手がかりとなるように作られています。ただし、そのような記述子は、実際の評価対象となる作業単位に記述子を適用した豊富な経験に基づいて、初めて完全に解釈することが可能になるということを認める必要があります。数学のグレード4のグレード記述子の例を下に示します。

グレード4の成績が可 (satisfactory) であるためには、シラバスについての十分な知識を証明すること、定型的なタスクを実行しながら数学の原理を応用すること、単純な文脈で数学的プロセスを実行して、正解を得ること、パターンと構造を認識する若干の能力を示すこと、定型的な状況において問題解決技術を用いること、結果の重要性に対する限定的な理解を持ち、何らかの結論を引き出すよう試みること、数学について適切な技術、表記法および専門用語を用いて、的確にコミュニケーションを行うこと、テクノロジーを申し分なく用いることが求められる。

グレード判定会議の前に、上級試験チーム（特に主幹試験官）は、各コンポーネントについての暫定グレード境界を提出します。このグレード境界は、彼らが境界をどの点数に設定すべきだと考えているかを、期待される標準についての過去の経験に基づいて示すものです。この暫定境界は、各試験問題がどのように機能したかについての会議出席者の合意、およびコンポーネントの適正化後の得点分布（ヒストグラム）を過去の年と比較した結果に対する簡潔な検討と合わせて用いることで、グレード境界を設定すべきであると考えられる得点範囲をチームが検討するための資料となります。例えば27点がグレード3の最高点であり、28点がグレード4の最低点であるということで会議の出席者が合意するまで、各点数のスクリプトをいくつも順番に検討していきます。

このプロセスを進める間、上級試験官は、スクリプトに記されている点数ではなく、受験者による実際の解答の特徴、およびそれがグレード記述子にどの程度適合しているかに着目することが求められます。この審査のために、ある質問では高い点を取り、他の質問では点数の低いスクリプトではなく、試験問題全体を通じて解答のレベルが全般的に均一であるスクリプトを可能な限り多く選びます。ある1つの境界について会議出席者の合意が成立すると、その他の境界とコンポーネントについても同じプロセスを行います。会議のメンバーは、どのセッションでも一貫した標準が維持できるようにするため、過去の試験セッションのスクリプトのうちグレード境界にちょうど位置しているスクリプトを参照することができます。

このプロセスが適用されない唯一の例外は、多項選択式の質問で構成されている試験問題です。経験によって、多項選択式の質問だけで構成されている試験問題の場合、生徒の作業の質に基づいてグレード境界について判断することが非常に困難であるとわかっています。これは、受験者が実際に何を学んできたかに基づいて判断するべきであるのに、その証拠となるものが多項選択式の解答にはほとんど含まれていないことが理由であろうと思われます。そのような試験問題では、最も近い内容の試験問題について会議のメンバーの判断によって定めたグレード境界を利用し、その試験問題で各グレードに該当する受験者の人数の比率にできる限り近い割合の受験者が多項選択式試験問題のグレードにも含まれるように、境界を計算します。例えば、グループ4の実験科学では、試験問題1は多項選択式問題で構成されています。試験問題2は、質問の種類が異なりますが、基礎になっている課程の内容は用紙1と同じです。そこで、試験問題2で決定した境界によってグレード7に該当する受験者が9%になったとすると、試験問題1の境界もグレード7の受験者が可能な限り9%に近い割合になるように計算されます。したがって、多項選択式試験問題での生徒の成績は、その教科の全体的なグレード別人数分布にはほとんど影響しません。しかし、受験者個人の教科の成績には明らかに影響します。

5. 6. 3 集計

すべてのコンポーネントについてグレード境界が決定されると、暫定総合教科グレード境界が計算され、暫定教科グレード別人数分布の点検が行われます。あらゆるコンポーネントの得点（および境界）を集計して、総得点のパーセンテージを計算するため、得点のスケールリングを行う必要があります。スケールリングは、その課程の評価全体に対して各コンポーネントが占める割合に応じた重み付けを維持するように行われます。例えば、ある教科の上級課程が3つのコンポーネントで構成され、最終結果に対してコンポーネント1が占める割合が50%、コンポーネント2が30%、コンポーネント3が20%になることが評価モデルによって要求されているとします。コンポーネント2の満点が90点として設計されていると、規定の重みである30%が得られように、適正化後の得点を3で割ってスケールリングを行います。コンポーネントのグレード境界は、当初90点を満点として決定されますが、この境界にも同じ処理を行います。

ここで重要なことは、重み付けの概念が可能な到達度（満点によって表されています）に

基づいていて、与えられた点数の分布や拡散を表すために用いられるのではないということです。あるコンポーネントの重みが 30% であるとしても、それは、そのコンポーネントが個々の受験者の得点の最終的拡散に 30% の貢献を行わなければならないという意味ではありません。— そのようなアプローチは基準参照システムにおいてより典型的に見られるものです。基準参照システムは評価項目とテストの第 1 の目的として受験者間の差別化が設定されています。DP 評価システムでは、受験者の差別化は受験者の到達度評価に次ぐ 2 番目の目的です。得点に関しては受験者の拡散が行われないコンポーネントでも、重要な教育的到達度がそのコンポーネントによって記録され、受験者の能力の総合的判断にとって貴重な貢献が行われます。ある 1 つの教科レベルに適用される DP 評価モデルの様々なコンポーネントが、受験者の得点に関してそれぞれ異なる拡散を生み出すことができます。コンポーネントによってそれぞれグレード別人数分布（各グレードに含まれる受験者の割合）がまったく異なることもあり得ます。

コンポーネントの重みが、受験者の総得点に対してそのコンポーネントが占める割合とまったく同じでなければならないという要求はありません。重み付けの意味は、ある 1 つのコンポーネントに与えられている単位（credit）の総数の割合を示すことであり、到達度の全体的な比率構成は必ずしも表されません。

DP 評価システムで採用されているアプローチは、重み付け、結合（集計）およびスケールリングの方法として、例えば Wood (1991、第 10 章) によって提唱されているようなより洗練された方法になっているとは言えないかもしれません。しかし、受験者の得点とその周囲にいる他の受験者のでき具合のみによって変更されるべきではないという健全な基準関連原則に基づいています。

またこのアプローチには、より複雑な重み付けとスケールリングのモデルに比べ、透明性という重要な利点もあります。必要なスケールリングを適用した後、得点と境界は最も近い整数に丸められます。数字の末尾がちょうど 0.5 になった得点と境界は、受験者に有利な数字に丸められます。— 得点は切り上げ、境界は切り下げが行われます。次に、各コンポーネントのグレードごとに最も高い得点が合計されて、それらのコンポーネントが含まれる教科のグレード別の最高得点が計算されます。グレード別の最低得点ではなく最高得点を選ばれるのは、いわゆる「平均への回帰」効果を抑制するためです。平均への回帰とは、簡単に言うと、1 つのコンポーネントである特定のグレードに到達することより、複数のコンポーネントで同時に同じグレードに到達することの方が難しい、ということです。例えば、3 つのコンポーネントで構成される評価モデルを仮定します。各コンポーネントで受験者の 10% がグレード 7 を獲得しましたが、総合でグレード 7 を獲得したのは 5% にも達しませんでした。これは、3 つのコンポーネントを通じて受験者のパフォーマンスが必ずしも同じレベルで行われなかったためです。

表 2 に集計の例を示します。この表のデータから、教科全体でのグレード 6 と 7 の境界は 82 点 / 83 点になります。したがって、たとえば 2 つのコンポーネントでグレード 6 の最

高点を獲得し、第3のコンポーネントでグレード7の最低点を獲得した受験者は、グレード7が与えられます。受験者の最終教科グレードはコンポーネントごとの得点の集計によって決定され、コンポーネントごとのグレードによって決まるのではない、ということを強調しておく必要があります。各コンポーネントグレードは、ある一定の範囲の得点を表すので、2人の受験者のコンポーネントグレードが同じでも教科グレードは異なるという結果も、十分にあり得ます。

表2：IBディプロマ・プログラムにおけるスケーリング後の境界の集計例

グレード境界	コンポーネント1 (50%)	コンポーネント2 (30%)	コンポーネント3 (20%)	総合教科境界得点
7	43	25	17	
6	42	24	16	82
6	38	21	15	
5	37	20	14	71
5	31	18	12	
4	30	17	11	58
etc	etc	etc	etc	etc

各DP教科内のコンポーネント全体を通じて補償原理が適用されます。つまり、ある1つのコンポーネントである受験者が低い点を取っても、別のコンポーネントで高い点を取ることによって相殺されます。ある特定の教科グレードに到達するために超えなければならない「ハードル」はありません。ただし、教科グレードを与えられるためには、受験者はすべてのコンポーネントで作業を提出しなければなりません。したがって、実際にはほとんど不可能ですが、受験者がある1つのコンポーネントで零点を取ったとしても、他のコンポーネントで十分に高い点数をとれば、教科グレード7に到達することも理論上はあり得ます。(ただし、教科ごとの結果を結合して、受験者にディプロマを授与するかどうかを決定するときには、この補償原理は適用されません。ディプロマについては、各教科、知識の理論(TOK)および課題論文(Extended Essay)にそれぞれ最低グレードがハードルとして定められています。)

5.6.4 グレード分布

コンピュータ処理によってコンポーネントごとの得点とグレード境界が集計されると、グレード判定会議で暫定教科グレード分布を検討し、その後、最終グレード境界を確定します。それらを、過去の結果、学校から提出されている予測グレードの分布、および上級試験チームによる一般的な期待と比較する必要があります。教科グレード分布を過去の年度のデータを比較して大幅な変化があった場合は、その理由が説明されなければなりません。例えば受験者の大幅な増加があって、全体的な到達度が変わったとします。この場合、新しい参加校の相対的なパフォーマンスの分析が役に立つでしょう。内部評価が行われるコンポーネントなど、毎年グレード境界が一定しているコンポーネントでのパフォーマンス

を比較することも、指標として役に立つでしょう。グレード判定会議のメンバーが必要であると判断すれば、すでにグレード境界を決定したコンポーネントについて、そのグレード境界を見直すことも可能です。

グレード記述子および過去の結果を考慮して、全体的なグレード分布が受験者の到達度を公正に反映していると IBO スタッフを含むグレード判定会議のメンバーが納得すれば、各学校ごとの結果を計算し、印刷します。次に、結果の適切さについて最終点検が行われます。この点検は、教師が必要な標準について熟知しているという信頼できる記録のある、経験の豊富な学校を一定数選び、それらの学校について予測されたグレードを実際に認定されたグレードと比較して行います。ここでも、重大な不一致があれば再度見直しを行うことができます。

5. 6. 5 「アット・リスキング」

最終結果がおおむね公正で正確であると判断されると、上級試験チームおよびその他の熟練試験官達が採点の信頼性に関して未解決の問題を解決します。「再採点」が必要な試験官、あるいは適正化サンプルには特に問題がなかったにもかかわらず、後で疑わしいと判断された試験官が何人かいる可能性があります。しかし、「再採点」が必要になる主なケースは「危険な (at risk)」受験者でしょう。一般的に、「危険な」受験者とは予測されたグレードに比べ最終グレードが 2 段階以上悪く、1 つ上の教科グレードを獲得できる得点から 2% の範囲に含まれる受験生をいいます。採点と適正化に測定誤差があるので、そのようなボーダーライン上の採点結果は、正確さを確認する必要があります。また、該当する受験者の外部採点コンポーネントもすべて再採点します。ただし、教科とレベルについて学校が行ったグレード予測の多くが著しく楽観的であることが明らかになった場合は、その学校の再採点はあまり重視する必要がないでしょう。

第 2 の「危険な」受験生のカテゴリーは、第 1 のカテゴリーよりずっと少ないのですが、予測より 1 段階だけグレードが低く、予測グレードに到達する得点から 2 点以内にいる受験生で、しかも、外部採点コンポーネントのうち少なくとも 1 つは、試験官の採点が完全に申し分ないとは言えないが、再採点は行われていなかった場合です。

理想的には、教科グレード境界から 2 点に内の範囲にいるすべての受験者について、見直しを行って正しいグレードが認定されているかを点検するべきでしょう。しかし、資源の制約により実際にはそのような点検は行えません。したがって、採点と適正化の不正確さによって不利益を被った可能性が最も高いと思われる受験者のカテゴリーにのみ注目することになります。

5. 6. 6 支援要員

グレード判定会議は、SAM または CAM、評価スタッフ、および試験運営スタッフなど多くの IBO スタッフによって支えられています。また、多数の臨時アシスタントが IBCA に提出された受験生のスクリプトを受け取り、整理し、点検し、運んでいます。臨時スタッ

フの最も重要な仕事は、すべての受験生のスクリプトを点検して、試験官がすべての解答を採点しているか、それぞれの質問またはタスクに設定されている可能な点数の範囲で点を付けているか、そして、点数の合計を正しく計算し、転記し、総得点を記入しているかを確認することです。

直接的にはグレード判定会議に参加しない人たちにこの会議の手続きをより良くわかっていただくため、教師のオブザーバーを御招待し、会議に立ち会っていただきます。それにより、オブザーバーがそこで経験したことを同僚に報告することが期待されています。

5. 7 最終判定委員会 (The final award committee)

最終判定委員会は、グレード判定会議がすべて開催された後、1月初頭または7月初頭に試験結果が公表される直前に、開かれます。この委員会によって、要件を満たした受験者にディプロマと成績証明書が正式に授与されます。またこの委員会は以下の事項についても適切な行動を認可します。

- ・ 障害、事故または病気のために、通常の手続きに従って処理できない受験生のケース。
- ・ 不慮の状況によって影響を受けた受験生のケース。
- ・ 問題行動があったと主張されている場合。
- ・ 特殊教育ニーズ委員会から特殊教育の必要な受験生の評価手続について行われた方針の勧告。

最終判定委員会は、試験委員会 (the examining board) の委員長がその委員長を務め、その他の少数の主任試験官と上級 IBO スタッフで構成されます。グレード判定会議と同じく、1校から1名のオブザーバーが招かれ、立ち会います。

最終判定委員会は、不利な状況によって影響を受けた受験者がいる場合、その受験生が被った不利益を可能であれば補償する目的で、定められている方針と先例に従って対処します。その措置は、得点を若干上乘せする場合もありますし、1つの試験コンポーネントをまったく受験できなかったために、それを補償する場合があります。後者の場合、統計的「逸失得点の手続」(missing mark procedure) を用いて、受けられなかったコンポーネントで得られたであろうと思われる得点を計算することができます。この計算は、その受験生が他のコンポーネントで獲得した得点を受験生全体の平均的な成績と比較することにより行われます。このような補償が適用できるためには、特定の条件が必要です。形式的 DP 評価システムの手続マニュアルである便覧において公表されている一般規定の中に記載されています。

学校が締め切りや手続を守らなかったことによる管理上の不手際のケースは、委員会で検討されます。深刻なケースでは、試験の安全性と完全性に対する重大な脅威が生じる場合があります。また、不手際が繰り返される場合には、学校の認定が取り消される可能性もあります。

委員会で行われる討議の大半は、受験生による問題行動の主張がテーマとなります。そのような主張は、たとえば試験中の受験者の行動について学校自体が提起することができます。あるいは試験官が受験者の作業に盗作や共謀の疑いがあると考えて提起することもできます。もう1つ、問題行動の形態としてあり得るのは、受験者が他の地域にいる他の受験者に、試験問題の内容を彼らの試験より前に教えることです。これは時差があるために可能です。時差のために、世界中で同時に試験を行うことができません。試験官は、問題事例があればそれを見つけられるように注意することが求められます。IBOは、受験者間でそのように情報が共有される可能性を減らすため、地域ごとに試験問題の内容を変える試験を増やす方向に進んでいます。

問題行動の主張が行われた場合は必ず、できる限り詳しく事情を調べ、関係する学校と受験者から説明を聞き、その上で委員会が最終判断を下します。問題行動によって有罪と判断された受験者は、当該の教科で成績を付けることが拒否されます。したがって、ディプロマを取得することができません。

5.8 結果の公表

ディプロマと成績証明書についての結果は、毎年2回ある試験セッションごとに1月5日および7月5日に学校および大学入学制度に通知されます。結果の送付は電子的手段によって行われます。これは、受験者の登録や大半の得点の入力など、試験システムに関する他の多くの事務プロセスでも同様です。受験者には受験した教科ごとに1から7までの数値化されたグレードが通知されます。完全なディプロマ・プログラムを履修した受験者には、TOKと課題論文について、文字によって表されたグレードも通知され、これらを合計したものが総ディプロマ・ポイントとなります。以下の条件に該当する受験者には、バイリンガルのディプロマを授与することができます。

1. 言語 A1 を 2 科目受験した。
 2. 言語 A1 を 1 科目、および別の言語の A2 を 1 科目受験した。
- または
3. 言語 A1 として受験したものは別の言語で、グループ 3 またはグループ 4 の教科のうち少なくとも 1 教科で試験を受けたかまたは課題論文を提出した。

ディプロマ・ポイントの満点は 45 点です。これを獲得する受験者はきわめてわずかです。また完全なディプロマ受験者の約 5% が 40 点以上を取得します。ディプロマの合格率は、過去数年約 80% でかなり安定しています。2 月中旬および 8 月中旬に、結果を記載した正式な文書が学校宛てに送付されます。

5.9 フィードバックと結果の照会

過去数年、IBO では DP 評価システムと受験者の到達度に関して学校と教師に提供するフィードバックを改良し強化することに力を注いできました。このことは、教室での授業のために累積的評価によって提供されるサポートを強化し、評価システムを利用する学校、

教師および受験生にとって評価システムの構造を明らかにするという二重の利点があります。毎回試験セッションの後、試験問題とそれに適用される採点スキームは学校向けに販売されます。また、上級試験チームが教科レポートを作成します。このレポートは、各コンポーネントでの受験生のパフォーマンスについて一般的な特徴を漏らさず記載し、どの分野で受験者の成績が良く、どこで劣っているように思われるかを説明し、受験者がより良い準備をするための提案を行います。レポートには、各コンポーネントに適用されたグレード境界も記載されています。教科レポートは、IB 教師に専門的なサポートを提供するためのウェブサイトであるオンライン・カリキュラム・センター（OCC）から教師が直接入手できます。

正式な結果が通知されるとすぐに、評価コンポーネントごとに受験生 1 人 1 人の適正化後の得点とグレードを示す電子的情報が自動的に学校に提供されます。コンポーネントごとの得点とグレードは、第 3.2 節で示した理由により、正式に公表される受験生の結果に含まれません。これらは、有益なフィードバック情報として学校に提供されるものであり、1 つの教科の評価モデルに含まれる様々なコンポーネントにおいて、学校の受験生の相対的な長所と短所がわかります。学校には、各内部評価コンポーネントごとに、学校の教師が付けた点数が適正化によってどのように修正されたかも通知されます。さらに、モデレーターが内部評価フィードバック書を作成し、これが電子的手段により学校に送付されます。このフィードバックは、各教科で実施された内部評価の長所、および改善が可能な事項について簡潔に説明しています。

こういったより一般的な形式のフィードバックだけでなく、学校は特定のケースを追跡するために結果照会サービスを利用することができます。有料の照会サービスは 3 種類あります。カテゴリ 1 は、1 つの教科で外部で採点された特定の受験生の作業に対する再採点です。学校または受験者が試験結果にパフォーマンスが公正に表されていないと判断した場合に、これを利用します。この再採点の結果として教科グレードがあがれば、料金は請求されません。再採点の結果によって教科グレードが下がることはありません。ただし、コンポーネントのグレードは下がる場合もあります。

カテゴリ 2 は、学校がある 1 つのコンポーネントについて、自校の受験者グループ全員の外部採点スクリプトのコピーを返却するよう要求することです。これにより、教師は、自分が受け持った受験者クラスから提出された作業単位がどのように採点されたかを知ることができます。試験官は、受験者のスクリプトを採点するときには、それについての簡潔で建設的なコメントを書くことが奨励されています。そのコメントは、モデレーターと上級試験官がその後に採点を見直すときに役立ちますが、それだけでなく、教師にとってはさらに有益なフィードバックとなります。このカテゴリの照会は、教師が今後の授業の参考にできるように教師にフィードバックを提供することを目的としていますが、学校がこの照会を行った後にカテゴリ 1 の再採点要求を行うことも可能です。

カテゴリ 3 は、モデレーターが作成するレポートです。これは、上述の内部評価フィー

ドバック書では書けないほど詳しく、なぜ基準ごとに教師の内部評価得点が確認または調整されたかを説明します。内部評価に使用された現行タスクの適切さについても、さらに詳しい情報が提供されます。このサービスは、学校がすでに内部評価フィードバック書と適正化による点数調整データを受け取っていて、なぜ適正化調整が行われたかを理解するためにさらに詳しい情報が必要であると判断したときに、利用されることを目的としています。

教室での授業を一層効果的なものにし、生徒の学習を改良するために形式的 DP 評価システムを利用していただくというはっきりした目的によって、本節で述べたフィードバックのソースは、すべて教師と学校に提供されます。

IB ディプロマ・プログラムの評価方針

1. ディプロマ・プログラムの教科に関して行われるすべての評価は、実際的に可能な限り、各評価環境（筆記試験問題、内部評価など）で行われる離散的テストの方針によって、学習課程とその目標に直接的に関係を持たなければならない IB の国際的な広がりを反映して、あらゆる評価技術が用いられるべきである。互いに関連する複数の教科には同じ評価方法が適用されるべきだが、1つの教科内では、上級レベルと標準レベルの性質に含まれている実質的な差がそれぞれの評価モデルに反映されなければならない。
2. ディプロマ・プログラムの評価とグレード決定手続は、学校、教科、解答に使用する言語、あるいは試験セッションにかかわらず、すべての受験者に対し均等の待遇を保証しなければならない。すべてのグレード決定と評価の判断は、証拠に基づいて行われなければならない。いかなる形態であろうともバイアスがかかっているとはならない。
3. 通常、すべての課程には評価コンポーネントが3つまたは4つ用いられなければならない。適宜、それらのコンポーネントは内部（学校で行う）評価と外部評価の両方が含まれるようにする。通常、個々の評価コンポーネントが評価全体に占める比重は20%未満ではならず、また50%を超えてはならない。また、内部で評価されるコンポーネントが評価全体に占める比重は合計で50%を超えてはならない。内部評価と外部評価のバランスは、課程のすべての目的が妥当かつ適切に評価されることが保証されるように決定しなければならない。
4. 筆記試験の時間は、上級レベルで合計5時間、標準レベルで3時間を超えてはならない。1枚の筆記試験問題に要する時間は、3時間を超えてはならない。可能な場合には必ず、試験問題の所要時間を規定の最長時間より短くしなければならない。ただし、試験によって妥当で信頼できる評価ができることを条件とする。この時間制約は、内部評価コンポーネントまたはその他の外部で採点するコンポーネントが総合的評価モデルの重要な一部をなす教科において、特に重要である。
5. 教師と試験官による採点は、採点/再採点モデルに統計的比較を行って、適正化式を求め、それによって適正化を行う。コンポーネント間の交差適正化は行われず、再採点は、モデレーターを務める試験官に送られるサンプルの作業に対し、最初の採点と同じ評価基準に基づいて行われる。
6. 内部評価は、主に外部評価では適切に評価することが難しいスキルと理解の分野に対して行われるべきである。内部評価は、受験者が試験においても証明できることを別の環境で証明するための代替手段として扱われてはならない。内部評価と外部評価の両方においてスキルが評価されることによる不当な重複があってはならない。
7. 内部評価は、シラバスの内容が漏れなく学習されているかを確認するための手段として用いられてはならず、特定のスキルを学習している生徒の評価を目的とするべきである。必要があれば、シラバスの内容がどの程度まで学習されているかは、外部試験によって評価するべきである。
8. 内部評価タスクは、同じ教科の課題論文のために行われる同じ種類の作業と重複してはならない。

9. 可能であれば必ず、内部評価タスクはその教科で普段行われている教室での授業（または宿題）の不可欠の一部を構成するべきである。内部評価は「追加的」活動であってはならない。内部評価のために行われる作業は、生徒1人1人の学習経験の一部となるように意図される。
10. 内部評価の得点が受験者の教科グレードに信頼できる貢献を行えるようにするため、内部評価の総得点の半分以上に相当する作業は、適正化を受けなければならない。これは最低限の条件であり、可能であれば必ず、内部評価によって得点が付けられるすべての作業に対して適正化が行われることが好ましい。
11. 1つのディプロマ・プログラム課程の中で、長期間にわたって内部評価の対象となる異なる複数のタスクが行われる場合（例えば作業のポートフォリオを作成するため）、その期間中に生徒が向上するために時間的余裕を設けなければならない。したがって、最終内部評価の得点は、課程期間中に生徒が行ったパフォーマンスの最高レベルを反映したものでなければならず、全課程期間中のパフォーマンスの単なる平均であってはならない。
12. 内部評価が単一の教科の結果に対して占める比重は20%から50%までの範囲だが、このうちで上限に近い値は、内部評価の対象作業に高い重み付けを与えるための特別な根拠がある場合に限って、用いるべきである。
13. 内部評価の対象作業は、適切に文書化された、各課程を実施しているすべての学校に共通の条件下において作成されるべきである。特に、共同作業の役割、教師が提供できる支援の程度、生徒が外部の資源をどの程度利用できるか、そして、作業の下書きの作り直しがどの程度許されるかは、詳しく記述されなければならない。
14. 内部評価の対象作業について、課程ごとに指定される作業量は、評価の目的を達成するために必要な最低量を上回ってはならない。可能な場合には、内部評価が行われるタスクについて語数制限を定めるべきである。最大制限語数は、そのタスクを完了するために必要な語数を上回ってはならない。

平成 17・18 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）研究成果報告書

国際バカロレア・プログラムにおける教科外活動
の位置づけと評価方法に関する研究

平成 19 年 3 月 発行
研究代表者 河合 久

国立教育政策研究所 教育課程研究センター基礎研究部
〒153-8681 東京都目黒区下目黒6-5-22

印刷者 チヨダクレス（株）
住所 東京都千代田区神田淡路町 2-3-2

